

UFOと宇宙

UFOと宇宙科学の専門誌 ……

UFOs & SPACE

隔月刊.1975

2月号 **NO.10**

最新情報 **銀色の服を着た宇宙人**

ユリ・ゲラーが撮ったUFO写真、その他の奇怪な宇宙人(?)写真などを分析・考察する。

月世界の謎の現象を探る — 宮本正太郎 (京都大学花山天文台台長)

NASAの活動と、その未来 / UFOの推進法について

宇宙・引力・空飛ぶ円盤(5) — レナード・克蘭プ

改題



世紀の謎 空飛ぶ円盤を究明した最新刊!

空飛ぶ円盤の謎と怪奇

黒沼 健著

定価九八〇円

恐怖の一九九九年—円盤襲撃に対するノストラダムスの大予言、船舶の消失、人間蒸発等目に見えぬ円盤の攻撃と現代科学の範囲ではとらえられぬ怪奇な現象。各地に潜入し対地球戦略を工作する宇宙人の驚くべき実体及び歴史にあらわれた円盤と宇宙人の存在を興味深く紹介する。

空飛ぶ円盤とアダムスキ 空飛ぶ円盤の跳梁
久保田八郎編 五五〇円 高梨純一著 八五〇円

空飛ぶ円盤のすべて 空飛ぶ円盤実在の証拠
平野威馬雄編著 八〇〇円 高梨純一著 九〇〇円

アポロと空飛ぶ円盤 空飛ぶ円盤の真相
平野威馬雄・荒井欣一著 八〇〇円 Gアダムスキ久保田八郎編 八〇〇円

空飛ぶ円盤は実在する これが空飛ぶ円盤だ
A・ミンデル・田辺貞之助訳 八〇〇円 平野威馬雄編 八〇〇円

空飛ぶ円盤実見記 それでも円盤は飛ぶ
Gアダムスキ・D・レスリー編 八〇〇円 平野威馬雄編 八〇〇円

空飛ぶ円盤同乗記 火星からの空飛ぶ円盤
Gアダムスキ・久保田八郎編 八〇〇円 C・アリンガム・岩下肇 七〇〇円

空飛ぶ円盤の秘密 空飛ぶ円盤と宇宙人
T・ベラサム・久保田八郎編 七〇〇円 黒沼 健著 九五〇円

ヒューマノイド 空飛ぶ円盤 搭乗者
平野威馬雄編 九八〇円

霊と死の世界 謎と怪奇 シリーズ1
黒沼 健著 九八〇円

呪いと神秘の世界 謎と怪奇 シリーズ2
黒沼 健著 九八〇円

怪異こぼなし集 ジョーク・オ 金子 登著
九八〇円

●東京 文京 本郷5-30 振東141750●

高 文 社

●京都 左京 百万遍 振京23523●

ジャズファンに贈る幻のVデスクシリーズ

ルイ・アームストロング

オン・ジ・エアー



収録曲—タイガー・ラグ／オン・ザ・サニーサイド・オブ・ザ・ストリート／アイガット・リズム／ザ・ブルース／ハニサク・ローズ他

●KV-108 ¥1,900

オール・スターズ '45

エスカイヤーズ・オールアメリカン・ジャズコンサート



デューク・エリントン・オーケストラ／ベニー・グッドマン・クインテット／ルイ・アームストロング／ビリー・ホリデイ／ミルドレッド・ベイリー他豪華アーティストを収録。

●KV-301 ¥3,500 (2枚組)

カウント・ベイシー

アット・ザ・サボイボールルーム〜1937



レスター・ヤング／ビリー・ホリデイ／ジミー・ラッシング等の共演による。収録曲は—アイガット・リズム／スイング・ブラザー・スイング／モータン・スイング／他7曲

●KV-109 ¥1,900

チャーリー・クリスチャン

アット・ザ・カーネギーホール〜1939



ギターの神様と仰がれるチャーリー・クリスチャンが、ベニー・グッドマン楽団の一員として初めてカーネギーホールで世に紹介された時の、実況録音です。

●KV-106 ¥1,900

オール・スターズ '44

メトロポリタン・オペラハウス・ジャムセッション



ルイ・アームストロング／ジャック・ティエガーデン／ビリー・ホリデイ／コールマン・ホーキンス他の超豪華メンバーによる実況録音盤。ジャズファンには見逃せない名盤です。

●KV-401 ¥4,500 (3枚組)

デューク・エリントン

アット・ザ・カーネギーホール〜1943



収録曲—ティク・ジ`A`ト・レイン／ティエ・フォー・トゥ／ハニサク・ローズ／ブラック・アンド・タンファンタジー他…1943年、カーネギーホールでのライブ盤です。

●KV-107 ¥1,900

泉谷 じげる ●黄金狂時代



アーティスト結集…“イエロー”“ラスト・ショー”の仲間たちと、見事に打ち出す迫力あるアルバム。泉谷 じげる第5弾—それは彼の新しい出発の歌。

●ELEC-2032 ¥1,900

武道館花の御三家大激突

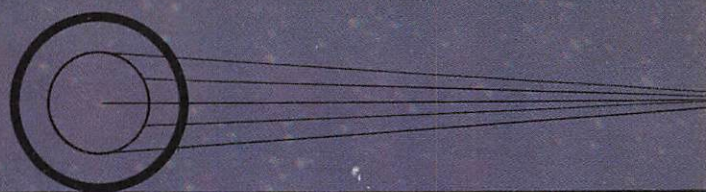


花の御三家—野坂昭如、小沢昭一、永六輔が、武道館に1万4千人の観客を集めて歌った熱狂のライブ。存在芸人のすべてをここに完全に再現しています。

●ELEC-5006 ¥2,300

エレック

ELEC RECORDS



＜ロ絵写真＞

●カラー ワシントン市上空のUFO大編隊/霧ヶ峰で写った奇妙な棒状物体
北海道岩見沢市のUFO/三宅島の怪光体

イラスト 市川淑一
表紙イラスト 池田雅行
表紙デザイン 白岩登三靖

最新情報

銀色の服を着た宇宙人

ユリ・ゲラーが撮ったUFO写真、その他の奇怪な宇宙人(?)写真を考察する

高梨純一

UFOと物理現象との重要な接点がついに出現?

ゴードン・クレイトン

科学を曲げる男 ユリ・ゲラー

18

●＜天空と大地＞科学シリーズ——8

京都大学花山天文台台長 理学博士

月世界の謎の現象を探る

宮本正太郎 24

自然現象か、他の原因か? 月面の意外な事実を明るみに出すと——

イルカの言葉の研究、無人の惑星探査計画、スペース・シャトル建造など—
NASA(米航空宇宙局)の宇宙開発状況を紹介

読売新聞科学部 中村政雄

NASAの活動と、その未来

34

＜写真＞ 木星の最近の素顔

43

科学ニュース

44

UFO情報

48

UFO目撃レポート

52

パイオニア11号、木星の電波信号を探る

59

宮崎県のUFO現象を分析する

宇宙UFO研究会代表

松田三男

60

UFOの推進法について

伊知地 充

66

薩摩半島はUFOの飛行コースにあたる?

鹿児島県で撮影されたUFO

73

連載科学記事——

宇宙・引力・空飛ぶ円盤 (5)

77

空飛ぶ円盤の機構を科学的に推理する

レナード・クランプ

声—OPINIONS

84



ワシントン市上空の UFO大編隊!



●この写真は今を去る23年前の1952年7月20日夜、米ワシントン市の国会議事堂上空を通過するUFOの大編隊を撮影した歴史的な記録写真である。このときは約40機のUFOが出現し、多数の市民が目撃して大騒ぎになった。撮影者は民間人だが、実に20年以上も発表をためらったあげく、最近ついに公表に踏みきった。しかし依然として氏名を伏せている。
(35mmカメラ・50mmレンズ・コダクローム)

霧ヶ峰で写った 奇妙な棒状物体



●茨城県新治町の高校生・増盛之君（16歳）が1974年7月29日午前10時頃、長野県
の霧ヶ峰スキー場のスキーリフト付近で風景を撮影したところ、空中に奇妙な細長
い物体が写っていた。撮影時には気づかなかったものの、なお、本誌側でネズを仔細
に検査した結果、中央部を境りの空中にも、小物体が写っている事実が判明した（小
矢野の黒点）
（ヤシカEレックス35GT・カラー・ヤシノンD×45mm F1.7絞りF5.6・シャッター
スピードは自動・フジカラーN100）

北海道岩見沢市のUFO

●1974年6月21日午後8時15分頃、北海道岩見沢市の高校生・小西一晃君（18歳）は、弟の倫展君（中3・14歳）と同級生の山本智君（17歳）と共に同市有明町から仰角30°で北から東へ無言で飛ぶ白色の光体を目撃し、撮影した。これは連続3枚のうちの最初の1枚目で、中央の電柱の頂上から右斜上に伸びている白い点線状の線は下方の照明を反射して光っている電線で、これと交叉して左斜上方に軌跡を描いている白線状の物体がUFO。肉眼で約50秒観測したという。（トフコンミニレックス・UVトフコール50mmF2開放・約10秒・ハイスピードエクタクローム）



三宅島の怪光体

UFOか他の現象か？

●1974年8月13日の夜7時半頃、伊豆諸島の三宅島へ行った横浜市の黒岩弘明君（16歳）が同島で奇妙な数個の光体が上空を乱舞するのを友人と共に目撃し、連続3枚の写真に収めた。物体群は急に明るくなったり、消えたり、数がふえたりしたが、無音で飛び、点滅もせず、不思議な現象であったという。これはそのうちの1枚。（ミノルタNEW SRT・F1.8開放・フジクロームR100）



最新情報

銀色の服を着た宇宙人

高梨純一



ユリ・ゲラーが撮ったUFO
写真その他の奇怪な宇宙人?
写真などを分析・考察するー

今世紀最大の謎、「宇宙からの訪問者」空飛ぶ円盤「騒ぎは、いよいよ混沌たる複雑さを加え、奇々怪々たる本質を露呈して、ここに突発以来二八年目の新春を迎えた。

ユリ・ゲラーが撮影したUFO写真

まず最初にご覧にいろいろのは、わが国にも昨年初め、日本テレビの招待で紹介され、たちまち全国津々浦々にまで爆発的センセーションをまき起こした例のイスラエル生まれの超能力者ユリ・ゲラーが撮ったというUFO写真である。

このユリ・ゲラーの数々の不思議な能力、特にわが国でも全国的に「僕も」「私も」と、全く同じようなこと——あるいは、もっとつき進んだこと——ができるという少年少女たちが続出した「スプーン曲げ」能力の真偽については、「週刊朝日」と「日本テレビ」とをその賛否両論の両極端の旗頭に、全国の新聞・雑誌・テレビ・ラジオ等がその渦中にまきこまれて大々的な論争を展開したが、これまでの超能力——あるいは心霊研究——の歴史を背景に冷静に判断してみた場合に、彼の能力が彼の主張する通りの本物である、と考える方が妥当そう

今回は、最近海外で発表された写真等若干を中心に、海外の空飛ぶ円盤研究界最近の話題二、三を紹介しよう。

である。

というのは、彼のやったようなあるいは、彼がやるのを見て、「私もできる」「僕もできる」と続々出てきた何百人という全国の追隨者たちのすることが、たとえトリックで一見全く同じようなことをすることができるとしても、そういう全国何百人の人たちが（殊に少年少女たちが）皆一せいにそういうトリックでやる方法に気づき、あるいは、ともかく何らかの方法でトリックでそういうことをすることを思いたち、我も我もと名乗り出てきた……と考えるのは、確かに非常に大きな無理がある、と考えられるからである。

その上、そういう人たちは、関口淳少年やその他の実験の一部がトリックで行われたものとして週刊誌上などで大々的に暴露されたとき、もし自分たちのやっていることを本当にトリックでやっていることならば、その機会に鳴りを

ひそめ、ひっそりと姿をかくしてしまった方がよいものを、わざわざ「そんなことはない。たしかにそういうことは超能力でできる。僕の（あるいは私の）やることを見てほしい」と、続々としてテレビ局や週刊誌の編集局などに申し出ているのである。

こういうことは、こういう「超能力」がすべてトリックであった場合には、到底考えられないことである。

その上、ユリ・ゲラーがこれまでに現したと伝えられるその他のすべての現象も、心霊現象のこれまでの歴史において何人からの能力者たちがすでに何度となく現した現象と、本質的に全く同様の現象にすぎないのである。

だから、我々としては、海外における彼の諸現象のこれまでの研究の結果などから考えて、彼の超能力はまさしく本物のものにちがいないと判断していたのだが、その彼をイスラエルで「発見」して米国に連れて来た、今日のように世界の人々の注目を集めるようにしたそもそもの責任者——米国の経験豊富な神経学者で、数々の卓抜な電子医学器具の特許の持ち主でもある（彼はこれまでにすでに五十四件以上のそういう特許をとっており、現在主としてそういう特許料の収入で、何の危惧もなくこういう方面の研究に没頭できているのだという）、現在

屈指の心霊研究者の一人でもあるアンドレア・ブハリック博士が昨年著わし、世界の心霊研究界をあっと驚かせたユリ・ゲラーの伝記「ユリ」(邦訳「超能力者ユリ・ゲラー」二見書房刊、六五〇円)を読んで、その中に書かれているユリとUFOとの関係あるいはユリの体を使って現されている現象はすべて、我々の銀河系の惑星「フーバ」の知的生物によって操作されているのだということ、またその生物は平均百万年の寿命を持ち、今から約二万年前に我々地球の人類に干渉しはじめたということなど、更には、ユリとブハリック博士のいる室内でどこからか聞こえてきてそういう真相などを語りかけてきた金属性の声は、地球から五万三千六十九ライト・エイジ(一ライト・エイジは地球の時間で約一千億年にあたると解説されているから、五千三百六兆九千億光年ということになる!)離れた位置にある彼らの宇宙船スペクトラから話しかけられてきているのだ、と説明されているのなどを読むと、一体彼の能力をどこまで信じてよいものかわからなくなってくる。

だが、そういうことの詳しい吟味や議論は、今この狭い紙面では到底行えることではないので、後日の別の機会にゆずり、ここには一応の最近のトップ・トピックスの一つとして、そういうユリ・ゲラーが撮ったという「空飛ぶ円盤」の写真を紹介しておく。

この写真については、すでに前記の著「ユリ」の二〇四頁(翻訳本)に次のように書かれ

●①ユリ・ゲラーが撮ったUFO写真



ている。

「彼らがボーイング七四七機でシェウエインフルト上空にいたとき、ユリは足もとにおいてあったニコンF・カメラが、腰のあたりまで浮き上がるのに気づいた。ユリは、これはUFOの写真を撮れという合図だと感じた。彼は窓の外を見た。だが何も見えない。飛行機の下は雲が切れ、晴れわたっていた。とにかく、ユリはカメラを窓の外に向けて写真を撮り始めた。三週間ほどしてこの写真を現像すると、非常にはっきりとした輪郭を持った三つのUFOが写っていた」

この記事では、これが正確には何月何日の出来事かは書かれていないが、最近米国の豪華な心靈研究雑誌「サイキック」の昨年六月号に公表されたその写真の説明によると、一九七二年一月四日の出来事で、当時彼の乗ったボーイング七四七機は、英国のロンドンからドイツのミュンヘンへ向かう途中で、彼の友人のシビ・ストラングも同乗していたが、彼にもそのUFOは見えなかったという。

ところが、そのフィルムを現像してみると、写真の通り三個のUFOが写っていた。その点について「ユリ」では（邦訳二三四頁）、「十一月八日、ユリは二週間前にドイツの上空で撮った写真のことを思い出した。UFOが写っていることを考慮して、彼はそのフィルムを慎重に現像した。フィルムが現像されてもどつてくると——コダックのカラー写真——その

うち五枚にUFOが写っていた。

ユリはとても興奮して、電話をしてきた。ハロルド・パソフ博士がそれらを検査していた。だからわたしは彼にできるだけネガとプリントを送ってくれるようにと頼んだ。

ハロルドがその写真を見ると、三機のUFOの写った一枚を除いてすべて消えてしまっていた。（その一枚をわたしはいまでも持っている）どのようにネガと他のプリントが消えてしまったか、まったくわからない」

これで見ると、そのフィルムはユリ自身が現像したようにもとれるが、「サイキック」誌の解説によると、ある米国西海岸の大きな実験所（または現像所の意か）のそういう事柄に関心のある物理学者が現像を担当した、ということになっている。

しかし、どうして目に見えない（ユリにさえ

警察署長が写した宇宙人

次に、今度は、一昨年の秋の米国におけるUFO大フラップの真最中、アラバマ州フォークビルの若い警察署長ジェフ・グリーンハウが撮ったという宇宙人の写真についてご紹介しよう。

本誌の読者など、当時のわが国の新聞に報道された海外ニュースなどですでにある程度で存じだと思いが、一昨年（一九七三年）の後半、米国では八月の最後の週にジョージア州の南部

も）UFOが写ったのか、そしてそれがなぜ、こんなフニャフニャした感じに写っているのか——そしてまた、なぜ最初写っていた五枚のコマの中、一コマだけを残して、ネガもプリントも共に消えてしまったのか？……。現在のところ全くわからない。

しかし、撮影のとき、そのカメラがわざわざ彼の腰の所まで浮き上がってきたというのだから、明らかに目に見えない何かの「存在」の操作があり、そのことから考えると、このUFOはあるいは客観的な存在ではなく、彼が他の機会にこれまで何度となくやってきたといわれる「ソウトグラフィ」——日本語で言えば、「念写」的イメージであったのかもしれない。

ともかくここには一応のトピックとしてご紹介しておくにとどめる。

地区で始まったUFOの集中目撃が、たちまち燎原の火のごとく南部諸州に蔓延し、それがニュー・イングランド地域（ニューヨークを含む東部地区）にも波及し、更に西部地区にも及び、連日連夜米国のどこかでだれかがUFO目撃をするという有様で、一月の初めになってそれがもとの状況にもでるまでには、たとえばNICAP（米国の大きなUFO研究団体・全

米空中現象調査委員会)などでは、八月末からの二カ月半ばかりの間に、実に三〇〇件を越えるUFO目撃が同会の手を集まったという。

その間、一〇月三日にはミズーリ州のグリーンビルで大きなトレーラーをつけて走っていたトラクターの運転手エディ・ウェップさんが、後方からすばらしい速度で飛んで来た明るく輝いたナゾの物体をよくたしかめようと操縦席の左の窓から首を出してそれを眺めたところ、まるで大きな火の玉が顔にぶち当たったかのような明るい閃光を受けて目が全くくらんで見えなくなってしまう、またその瞬間目からずり落ちた眼鏡をあとから地面に探し当ててみると、プラスチック製の枠の一方が明らかに強い熱を受けた結果らしくひんまがってしまっており、そこからはずれ落ちたレンズがその近くにころがっていた……という出来事や、例の有名な同州パスカグーラで一〇月一日夜の二造船工の空飛ぶ円盤搭乗者による誘拐事件、そして、一〇月一八日の夜には、オハイオ州マンسفールドの近くの上空で米国陸軍医学隊のヘリコプターが全長六〇フィート(約一八メートル)の「太い葉巻状の物体」とニア・ミス! という事件など、いろいろな事件が起きているが、その米陸軍のヘリコプターのニア・ミスの前日の一〇月一七日の夜、アラバマ州フォークビルで、若い警察署長のジェフ・グリーンハウが、全く思いがけない出来事に遭遇した。

警察署長といっても、そこはずいぶんとへん

びな土地らしく、フルタイムの警察官は彼一人だけなのであるが、その夜、家にいると午後一〇時ごろ同町の西半マイルばかりの所に住む一婦人から電話がかかってき、いくつもの点滅する光をつけた宇宙船が同家の裏の方の原っぱに着陸したと伝えて来た。これを聞くと、その夜は、同地サウス・モーガン郡一帯で空飛ぶ円盤らしいものを見たという電話がすでにくつもかかってきたので、それとばかりに、新しく買ったばかりのボラロイド・カメラをひつつかんで、車でとび出ていった。

そして、砂利の多い凸凹道を幾度も右に折れ左に曲がりして、一刻も早く現場に近づこうと懸命になっていたとき、ある坂をくだった所で、バツタリと道の真中につっ立っている異様な「もの」に出くわしてしまった。

それは、身長六フィート(約一メートル八〇センチ)くらいで、人間と同じような体つきをしているが全身が頭の前から足の先まで銀色のスズ箔のようなもので覆われており、頭の頂上に短いアンテナのようなものを着けて、そこでジッと立っていた。

グリーンハウは、これは何かのいたずらだろうと思ったので五〇フィート(約一五メートル)くらいの所で車を降り、「ハウディ」(今日)と声をかけてみた。ところが相手はそれには答えずにゆらゆらと横に揺れるような歩きっぷりで、ゆっくりとこちらに近づいて来た。それを見たグリーンハウは、まだこれはいたずら

だろうと思っていたが、手早く車の中からボラロイド・カメラを取り出して、パッパッと四枚写真を撮った。

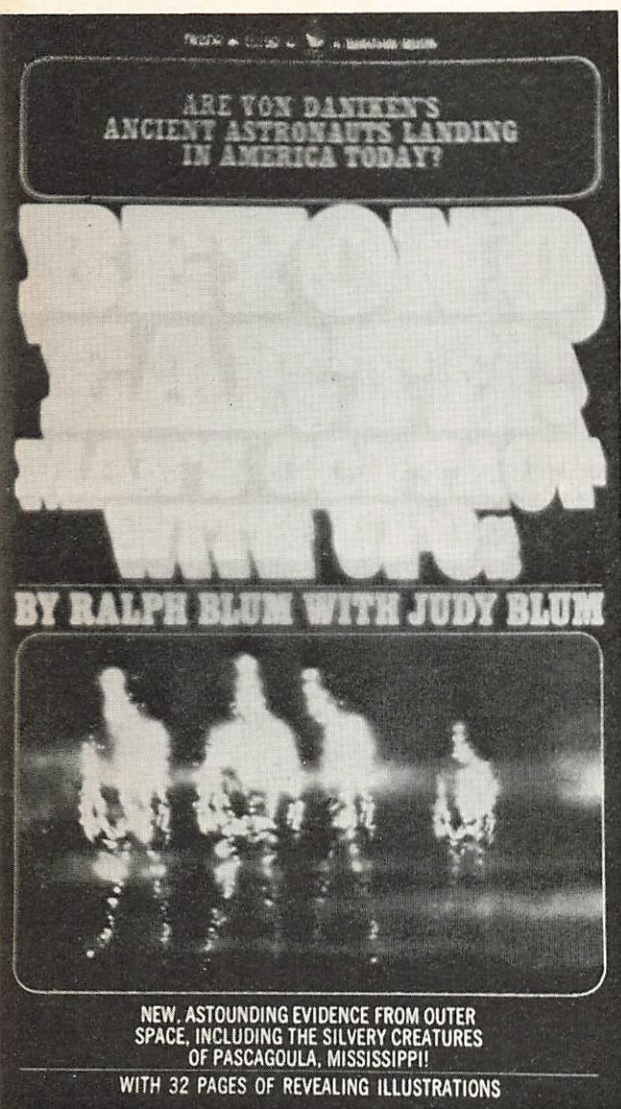
その間に、相手は近づいて来て、ほんの三メートルばかりの間隔をおいて面と向かい合う形となった。

「それは、まるでロボットのようになごちなく動き、全く何一つ音を発しませんでした。私は恐怖で体が硬直したようになりました」

そんなふうに急に恐ろしくなった彼は、ふと思いついて、パトカーの屋根についている赤色の回転灯を突然バツとつけてみた。すると、とたんにその怪物はいきなりぱっと身をひるがえして、道の反対方向に向かって一目散に逃げ出した。

それを見ると、グリーンハウはパトカーにとびのって、その後を追った。ところが、その速いことといたら「私がこれまで見た人間のどれよりもそれは速く走っていました」というわけで、パトカーの速度を時速二〇マイルにまであげて懸命に追跡したが、どうしてもそれが追いつけず、その上パトカーのタイヤが砂利で失速し、ちょっと目をはなした間に、相手はどこへ行ったのか見えなくなってしまうていた!

こうして、折角の「宇宙人らしきもの」を捕えそこねたわけであるが、そのときに撮った写真が厳然とした証拠として残った。この写真は、当時外電などで全世界に電送されて、わが国の新聞にもこの出来事の短いニュースと共に



●3.「地球の彼方—人類のUFOとの接触」の表紙。スズ箔をまとった4名の宇宙人?の写真が載っている。



●2.グリーンハウが撮った宇宙人?

載ったので、読者もよくご存じだと思うが(写真2)、その後、昨年発行されて大評判となったラルフ・ブラムとジュディ・ブラムの共著「ビヨンド・アース——マンス・コンタクト・ウィズ・UFO」(地球の彼方——人類のUFOとの接触)を見ると、その表紙に写真3のよ

うなのが載っている。この図は同書の中にも載っているが、新聞や海外の研究誌などに載った前記の写真とくらべてみると、左から二つ目のがそっくりである。そこで、これはグリーンハウの写した四枚の写真を合成して一枚にしたものではないかと思っていたのであるが、これは筆者の一大ミステイクで、実は、この図の説明は、同書(ペーパーバック)のペラペラの表紙の裏に簡単に書かれていたのであるが、なにしろ買ったとき、すぐ本屋できれいな紙のカバーをつけてくれたので、それがかくれてしまい、本文のどこを探してもその説明がないので、そう判断していたのであるが、その解説を見ると

「本文の原稿にあるいろいろな情報や描写と
ミシシッピ州パスカゴラの事件の体験者、チャールズ・ヒクソンとカルビン・パーカーによって著者に与えられた情報にもとづく画家の想像図」
となっている。これには、ちょっとがっかりしてしまっただが、そうは言っても、先に指摘した左から二つ目のものは、新聞などに載ったグリーンハウの写真の相手とそっくりで、その他のものも、それがゆらゆらと横揺れしつつこちらに近づいて来るのを撮ったらしい形になるだろうという形そっくりである。それに、パスカゴラでの遭遇者の方は、身長から言っても、体形から言っても、服装から言っても、移動の仕方から言っても、どこをとっても、これとは全く異なっている。(次頁のAPROの発表した図参照)

だからこの説明はちょっと変で、この図はたしかにグリーンハウが撮った四枚の写真をもとにして描いたものではないかと思うのだが、なにしろまだその写真の残りの三枚が発表されていないようなので(海外の研究誌のどれにもまだ載っていない)何とも言えない。

しかし、ともかく、このグリーンハウの体験は非常に特異なもので、彼自身も、

「私はこれまで、宇宙からの訪問者なんて信じなかったが、今は信じる」

と言っていたくらいであるが、何たること! この出来事は、彼にとって人生の没落への端緒となっていました!

というのは、まわりの人たちは全く彼の言うことを信じてくれず、彼はきつとだれかに一杯食わされたのだ、と噂する有様で、結婚してわずか三年目の妻まで彼を馬鹿にして、ちょうど同州のデクターへ巡回法廷がまわって来たのを幸いに、そこまで行って即日離婚の許可をとり（アラバマ州の法律では、相手の反対がない場合には、迅速に離婚の許可が与えられることになっているという）さっさと出て行ってしま

NICAPの調査員の憶測

さて、この宇宙人は果たして本物の宇宙人だったのでしょうか？

これはむづかしい問題である。というのは、こういう大騒ぎの際には、よくそれに便乗したイタズラ者が現れるものだからである。

現に、オハイオ州ジーニアの近くでは、一〇月一六日、アルミ箔でつくった銀色の服をつけ、頭の上に見せかけだけのアンテナをつけた三人の男が国道三五号上を歩いているのがパトリールに見つかつて、散々油をしぼられたと報じられている。

一〇月一六日といえば、前記の出来事の前日ではないか？ ひょっとして、その中の一人が、あるいは、そういうニュースを何かで知っただれかが、同じことをして、グリーンハウを一杯食わせたのではないだろうか？

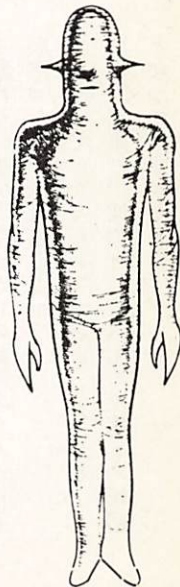
った。

その上、どういう理由でか、この出来事の四日後の一〇月二二日には、彼の自動車が爆発し、その後彼のモビル・ハウスも火事で焼けてしまつて、何か何者かが彼にこの町を出て行けと迫っているようで、彼も頑張れるだけは頑張つてみたが、ついに警察署長の地位も投げうってしまつたという。

全く世の中は、わからないものである。

だが、グリーンハウが遭遇した相手は、時速二〇マイルもの快速で追う彼の車の追跡を振り切つて逃げ去っている。こんなことがアルミ箔の服を着たいたずら人間にできるであろうか？ その点から、この出来事は簡単に「イタズラ」ときめつけてしまうことはできないように思うのであるが、ちょうど今日米国から航空便で届いたばかりの米国のUFO研究団体NICAPの会報「UFO・インベスティゲイター」の最新号（一〇月号）を見ると、意外なことが書かれている。

その記事は、同会の地域調査員マリオン・ウェップがこの出来事を詳しく調査した結果を報道したものであるが、それによると、この出来事がだれかのいたずらである可能性は十分にあるというのである。というのは、当局がこの出



来事を調べ始めてすぐ、ある噂が耳にはいったという。その噂というのは、その土地の近くの土地の消防夫たちが何人か共謀して、空港の消防夫が用いる特製の銀色の消防服を借りて、そういうイタズラをやったものかもしれぬ、というのである。この特製の銀色の消防服というのは、熱を九〇パーセントまで防ぐことができるので、それによって火災を起こした航空機の中に閉じこめられている人々を救うために考案されたものだという。

そこでウェップが早速そういう消防服を借りてきて着込み、顔と足さきにもアルミ箔をまといつけて写真を撮つてみたところ、グリーンハウが撮つた写真と非常によく似たものができたという。（写真4参照）

しかしこの服は非常にかさばつて、非常に動作の邪魔になるものであるから、その点でやはり、その何者かが時速二〇マイルというグリーンハウのパトカーを振り切つて逃げたという点と食いちがうことになるわけであるが、ウェップは、その際グリーンハウは逃げた相手の後を追つてあわててエンジンスタートさせ、たちまち時速二〇マイルというような高速にまであげたかもしれないが、その後たちまち砂利に車



●4. 消防服を着た写真

をとられて相手を見失ってしまい、本当はあまり長い距離で相手を追いかけたのではないのではないか？ という憶測を提出している。

そしてその夜、グリーンハウの所へ、町のはずれの自分の家の近くに空飛ぶ円盤が着陸したと電話で通報してきた婦人も、結局だれだかわからずじまいになっていることでもあるから、ひょっとすると、その婦人もそのイタズラに一役買っただけをおびき出したのではないかという意見をのべている。

なるほど、これは考えられることである。だが、いくら相手が一足早く一目散に逃げ出したからといって、それを追ってスタートした彼の車が時速二〇マイルにも達して、その後車輪が砂利で空回りして追跡ができなくなるまでに、こんなかさばった服を着て走る相手に追いつけなかったというのは、いかにも想像しにくい。しかし、そのかわりに、彼がおびきづいて、あまり本気で追跡もせずに放棄し、時速二〇マ

イルで追跡したとただ口でだけ言っているとしたら、あり得ないことでもない。（現に別の記事では、彼がそう言ったらしく、最高時速一五マイルで追跡したことになる）

だがこれはあくまでも憶測にもとづく議論であり、本当にそれがイタズラであったのか、本当の宇宙人であったのかは簡単に結着のつく問題ではなさそうである。

それに、たとえ本当は別物でも似たような服装をしていれば同じように写真に写るはずであって、写真に写ったところがよく似ているから

■ 夜空に飛び去った銀色服の宇宙人？

こんな具合に、この出来事の真偽を判断することは非常にむづかしく、また実際にそれに似たイタズラをした人がいたというわけであるが、実はその後、一〇月二二日にまたもインディアナ州のブラックフォート郡でこれに似た「銀色の服を着た生きもの」（シルバー・スューテッド・ビーイングス）を見たという出来事が起こっているの、それもこの機会にご紹介しておこう。

しかもこの場合には目撃者は一人ではなく、二組計三人で、その上、三時間と一マイルという時間と距離をはなれて、全く別個に、全く同一と思われるものを目撃しているのである。

そして、目撃された相手の数も、共に一個

といって、ただちに同一と断定することはできない理屈である。

そこで、この点は本人にもう一度よく当時の状況を聞き、またこの消防服を着て真夜中の道路上に立ったところを見てもらった、この憶測が当たっているかどうかを判断してもらえばよいわけであるが、その後グリーンハウは人前に出るのをいやがり、連絡さえもうまくとれないという有様だということなので、最終的な結論を出すことはなかなか簡単ではなさそうである。

（又は一人）ではなくて、二個（二人）である！
まことに不思議な（殊に前記の出来事を人間のイタズラと考えた場合には、全く腑に落ちぬ）出来事である。

まず、目撃者の一方、同地のダンカークに仕事を携えている若いドワイン・ドナサンとその妻の二人は、同日の午後九時四十五分ごろ、家へ帰ろうと東に向かって車を走らせている最中、はじめ道の真中にとまっているトラクターからの反射かと思ったものを見つけたが、近づいてみると、何と、何か銀色の服を着たものが二つ、道の真中で「音楽に合わせてダンスを踊って」いるように動いていた。

だが、その動き方は、何か奇怪であった。

ドナサン自身の言葉でご紹介すると――

「そいつらは、道の真中で輪を描いて踊っているみたいであった。しかし、お互いになぜかあまり離れたくないようであった。二人がこちらを向いて、我々の車を見たとき、彼らの動作から見ると、彼らには道から離れることができないようであった。彼らは、ステップを踏んでいるようであったが、どちらの足も前には出ていなかったし、特別早く動くこともできない様子であった。彼らは両腕を前につき出したまま踊っていた」

どうもよくわからないのであるが、ともかく、彼らの動作が何か不可解なものであったことがよくわかる。殊に、両腕を前につき出したまま踊っていたとか、どちらの足も前に出していなかった（つまり、両足をびたりつけたままでピョンピョン跳びはねていた？）などという描写を読むと、これまで報告された、空飛ぶ円盤から現れた小人搭乗者の動作と何かよく似かよったものだったことを感じる。

ところが、もう一方の目撃者で、チュニーズ・コーナーというたぶん販売店？を経営しているギャリイ・フラッターもまたこれと同じような光景を、約三時間後、約一マイル離れた地点で目撃したのであった。その際、彼の車のヘッドライトを浴びた相手の二人はびくりしてこちらを振りむいて、約五分間ジッとこちらを眺めつつづけている様子であったが、彼が車のスポ

ット・ライトをつけると、とたんにグルリと向こうを向き、何か箱のような器具で覆われた両足でトンと地面を蹴ったと思うと、ツーッと宙にとび上がったしまった。

そして、そのまま空中を漂い去って行くような具合で、その速度はやがて時速二〇マイルから二五マイルくらいのもとなり、やがて見えなくなってしまうという。そして、その後にはチリ一つ浮かんでいず、それらがそんな服を着た子供のイタズラだったなどとは到底考えられぬような状況だったという。

一方、ドナサン夫妻の方も、いったんそれらのそばを通りすごして、少し行ってから振り返ってみると、両方とも道の横手に立ってジッとこちらを見送っている様子であったので、もう少し行ってから、また思い直して、車の向きを

州間道路七五号上の怪事件！

だが奇怪事は怪奇事と呼んで、尽きるところを知らない。これよりも三日前、前記のグリーンハウの遭遇のわずか一日おいて翌日の一〇月一九日、これよりもっと奇怪な出来事が、ジョージア州のティフトンから北二〇分ばかりの所で起こっている。

この場合の目撃者はアラバマ州ハンツビルに住む女の実業家であるが、本名を発表すること拒んでいるので、この出来事を同紙の科学記

変えて、またもとの所へ戻って来てみると、もうそこにはそれらの姿は見当たらず、ふと夜空を見上げた彼らは、そこに、夜空高く上がった下がりたりしつ輝いている二個の光を認めたという！

こんな具合に話がよく合っている。――となると、いくらインディアナ州はオハイオ州のすぐ隣だからといって、先に述べたオハイオ州でのイタズラ者の二人が、ここまでやって来て、道路の真中でダンスを踊っていたなんて、到底考えられない。（その点、グリーンハウの事件の起こったアラバマ州はオハイオ州から余程遠い）そんなイタズラものには、どんなお芝居ができるとしても、空へ飛び上がって逃げ去るなんてことはできないはずだからである！

者のバリイ・ケースボルト氏の筆で報道した同地の「ザ・ハンツビル・タイムズ」紙は、ロビンソン夫人という匿名で報道しているので以下その名前で解説することにする。

この日同夫人は、ジョージア州のティフトンへ行く用事があって、自分の車を運転してハンツビルを出て、州間道路七五号上を走ってジョージア州アトランタのすぐ南の所にあるガソリン・スタンドで車を停めて、ガソリンを満タン

にし、車の調子を見てもらった上で、また発車した。そして、ティフトンへあと二〇分くらいの所まで来たとき（というから、大体ジョージア州アシュバーンのすぐ北あたりに当たるのだろう、とAPROでは言っている）突然エンジンやその他の機構がみんな一せいにピタリと動かなくなってしまった。

そのとき時間はちょうど午後の三時半くらいのことであつた。

そこで、困った夫人はともかく車を無理に動かして、道の横手の所に持つて行つた。このとき夫人が頭を悩ましていたことは、当然、なぜこの車がとまってしまったのだろう、一体どうすればよいのだろう、ということだけであつた。

ところが、動かない車の操縦席にすわつて、一体どうしたらよいのだろうか、とぼんやり頭を悩ませているうちに、いつの間にか何か不安な気分が胸にジワジワはい上がつてきて、やがて突然何か異様な感じに襲われたので、はっとして、顔を、車の左手の道路側へ、そつと、ぎごちなく向けたところ、そこに思いがけないものを見出して、全身が凍りつくような感じがした。

そこ、すぐ窓の外に、はんだのような銀色をした金属性の衣服をまとつた身長四フィート（約一メートル二〇センチ）くらいの正体不明の生きものが、ジッと中をのぞきこんでいたのである！

幸い、車の窓ガラスはしまつていたので、直接それに襲われるというおそれはなかったが、それでも夫人はあまりにも恐ろしくて、まっすぐにその怪物の目を見ることができなかった。「もし、窓が開いていたら、私はそれにさわることでできたでしょう。それほどすぐそばに、それは立っていたのです」

しかし、そのために、夫人は相手の腰から上だけしか見ることができなかった。

相手の頭の部分は、これまた同様の物質で出来た宇宙服の頭の部分のようになっていて、そこには目のための小さな長方形の穴が二つあいているきりで、他には何もなく、全くノッペラボーであつた。

「私には、それは全く現実の出来事とは思われませんでした。しかし、それは現実の出来事だったのです」と夫人は語っている。

さあ、その後どんなことが起こるか、と思われたが、こうして五、六分たつたとき、突然その生きものは車の前へ行き、その前をぐるっと回つて車の右側へ行き、その後、車の後部へ行つて、そのまま見えなくなつてしまつた。

その間、夫人は、その怪物に足があるのかどうかを見ようと思つて、腰から下を見ようと思つたが、全く見えなかった。しかし、ただ歩く際、その首から上が、まるでロボットのように上下左右に機械的に動くのに気がついた。しかしこれはそういう細かい目の部分からしか外が見えないので、自然そういう歩き方になつてし

まうものかもわからなかつた。

その他には、どんな音にもおいても、光も認められなかつた。

こうして、怪物が車の後部からどこかへ消えてしまつた後（夫人はこわくて後をふり向くことはできなかったが、操縦席のバック・ミラーでそれをたしかめた）夫人は突然、このあと車が爆発か何かすると大変だと思つたので、あわてて車から外に出た。そして、あたりを見まわしてみたが、もうどこにもその怪物の姿は見当たらなかつたので、通りかかつた車にきづかせて手を借してもらおうと思つて、車のフードを何とか開けてみたところ、そこから白い煙が一せいに噴き出してきた。しかし、内部は別に燃えているわけではなく、白い煙だけがあとからあとからと噴き出してきていた。

その上フードは非常に熱くなつていて、その後一時間半ばかりして、やつとそばを通りがかつた州警察のバトカーがレッカー車を呼びよせてくれて、それで車を修繕屋のガレージに運びこんだときにも、まだあまり熱くて全然手がつけられず、それから更に一時間半ばかりして——つまり車が動かなくなつてから丸三時間くらいして——やつと修繕工がエンジンにさわれた、という有様だつたという！

なお、この際に、バトカーの警官はこれと全く同じような出来事の報告を同夜他の数人のモーターリストからも受けた、と夫人に語つたというが、もしこれが本当だとしたら、大変なこと

である。こんなふうに、これもまた大変興味ある驚くべき実例であるが、残念なことに、当の目撃者である同夫人が研究者のインタビュをこぼんでいるということであるので、これ以上調査することができず、残念なことである。そ

スラッシュ少年が撮ったUFO写真

最後にもう一つ、大変興味ある実例として、一昨年（一九七三年）の二月三日の夜、米国フロリダ州のブラデントンで、一六歳の写真好きの少年バトリック・スラッシュ（スラッシュと書いても、〇〇一・ナポレオン・ソロの敵のスラッシュとは別に関係ないからご安心を！）が撮ったという写真をご紹介します。

この出来事には、当夜彼が写真に撮った物体から投下されて彼が拾ったという三個の小さな鋳造状の物質、というおまけまでついている。

その夜、彼は友達の家へ行くとして、午後九時一〇分から一五分の間ごろ、車を走らせていて、航空機が落ちていくようなのを見た。一体何だろう？ と確かめようと思って、ずっと先まで走って行って橋を一つ渡ってみたが何も見当たらないので、戻って来たところ、ある丘の近くまで来たとき、車の光の中にブラーデン河の水上一〇フィートから二五フィート（約六メートルから七メートル半）くらいの所に滞空しているナゾの飛行物が一つ、照らし出され

のためにAPROなどはこの出来事は信ずることができぬといい、おそらく作り話だろうと言っているが、そうきめつけてしまうのにはあまりにも惜しい実例といえよう。

た。その物体の大きさは、直径六メートルから七メートル半くらい、高さは三メートル三〇センチから六〇センチくらいで、その下部から、何か正体のわからぬ光線のようなものが水面の所までズーッと伸びていた。

そこで車を降りて、それを眺めていたが、またあわてて車に戻ってカメラを取り出して、その物体の写真をバチバチ撮った。

そのうちうまく写っていたのは二枚だけであったが、その中の一枚が写真6である。

これで見ると、たしかに長い光線のようなものが斜めに下方へ投射されている。

しかし、同少年の言うところによると、この光線のようなものが、かなり幅の広いもののようには写っているのは（彼には、それは直径一メートル二〇センチから一メートル半くらいあるように見えたという）一種の「フレア・エフェクト」にすぎないので、実際の幅は、せいぜい一フィート半（約四五センチ）くらいにすぎないだろうという。ともかく、彼の言うところに

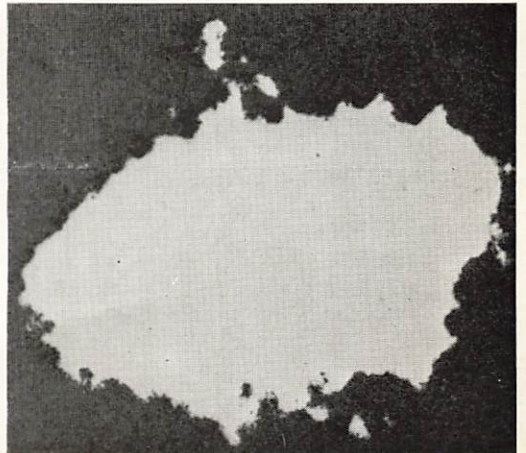
● 5 1973年秋、米国南部諸州でのUFO大フラップの最中、ジョージア州アトランタのテレビ局のニュース・カメラ・チームが9月9日に撮った写真。(NICAP発表)

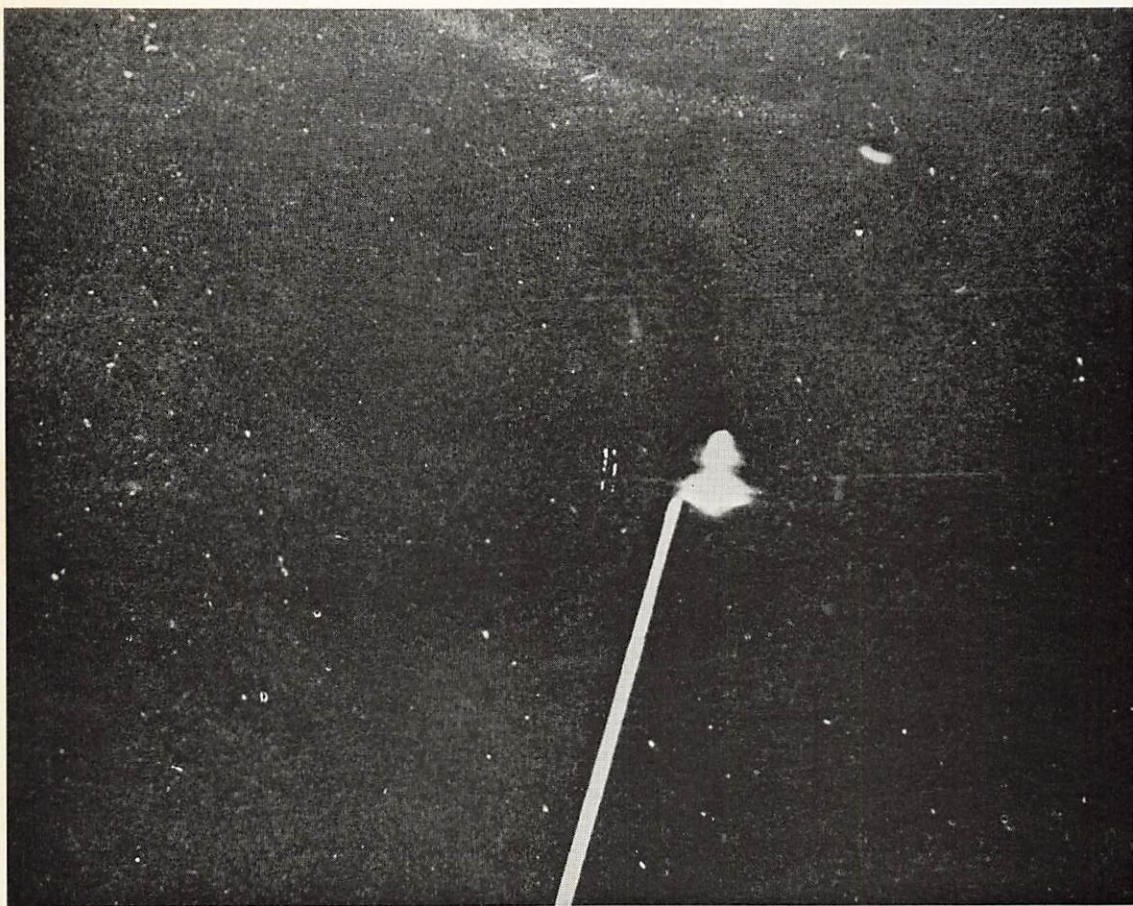
よると、これは普通の光線とは全くちがったものだったという。

ところで、彼がこのナゾの物体を四分半から五分間くらい眺めていて、その間に閃光写真を二枚ばかり撮ったところ、突然その物体はその光線のようなものをひっこめ、何か連続的な大きな音をたてつつ彼の方に前進して来た。

その音はドサッ、ドサッというような音ではなく、何か金属性のものを水中で叩いているような、ガチャン、ガチャンというような音だったという。また、その物体の下部と底とが急にうす青味がかつた緑色に変わったという。

同少年はびっくりして、その物体が彼から四メートル半ぐらいの所まで近づいたとき、あわてて逃げ出したが、約一メートルほど走って立ち止まった。





●◎1973年12月13日の夜、米フロリダ州のブラデントで16歳の少年パトリック・スラッシュが撮ったUFOの写真。(NUFON発表)

そのとき、その物体は元の位置にとめてあった彼の車の上方八フィートから一〇フィート（約二メートル四〇センチから三メートル）ぐらいの所を通過して行ったが、そのとき何かその物体から小さいものがいくつか落とされ、その中のいくつかは水中にとびこみ、一つが彼の車のフードに当たる音を彼ははっきりと聞いた。その間に、彼はもう一枚シャッターを開放でその物体を撮ろうと思ったが、彼自身が動いていたのでうまくいかなかった。その間に、その物体は速度を増すとともに、輝きを赤ダイダイから赤外線方向に変え、飛び去って行ってしまった。

そこで彼は車のところへ戻り、車を二、三フィート後退させて、そのヘッドライトとスポットライトで地面に落ちている落下物を探し、いずれも直径四分の三インチ（約二センチ）ぐらいの小さなものを三つ、見つけることができた。この落下物は一見黄鉄鉱のように見えるが、大学で分析の結果、そうではなく、何か鉱物の燃えかすのようなものであることがわかり、現在米国の熱心なUFO研究家の一人、スタントン・フリードマン博士が入手して、更に詳しい分析を行っているそうであるが、果たしてどういう結果が出るか、大変興味あることと言えよう。

（六頁のカラ―写真は一九六七年七月二日の午後、米北カロライナ州の村のロニー・ヒル少年が、着陸した円盤から現れた小人宇宙人を撮ったというもの）

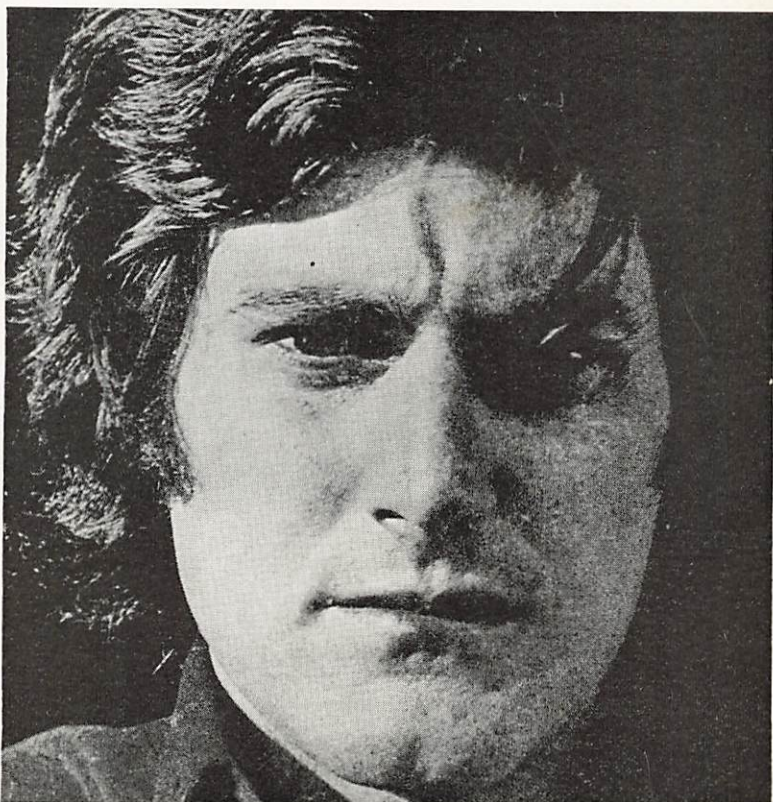
ゴードン・クレイトン

“UFO”と物理現象との重要な接点がついに出現?

科学を曲げる男 ユリ・ゲラー

「私たちは一六世紀にはじめて電光を見た男と同じような立場にある。つまり、そのような現象が存在することはわかった。しかしそれを科学的に説明することはまだできないのである」

フライング・ソーサー・レビュー誌関係者の一部のみならず、同誌に好意を寄せる人たちの中にも、最近の同誌に掲載される記事のうちに「非科学的」「ないしはあまりにも超心理学的傾



向の強いものが散見されることに不安や驚きを感じるといふ声がある。『ポルトとナット』の、健全な科学の伝統に立ちもどってほしい、と彼らは訴えるのである。

だが、現実はいえは、友人たちがしがみついている健全な科学の伝統というやつが、知らず知らずの間に急速に解け去ろうとしているように思われる。あらゆる徴候が示しているのは、

人々の心の中にはぐくまれてきた新しい傾向こそ未来の科学であるということであり、この小文で決定的に明らかにしようとしているように、「真実にそま実」であり、「固いものは固い」のだという一九世紀的科学観・宇宙観は今や過去の遺物になり果てようとしているのである。しかし、人間が、純粹に機械的な宇宙に関する最終的な大発見が今にも完成されそうに感じ、それからあとは学ぶものも発見するものも何もなくなくなるように思っていたのは、ほんの百年たらず前のことなのである！

科学の研究についてJ・アレン・ハインネック博士は、現代の人々が常にあるよりも偏狭すぎることに對して、くりかえして警告している。やがては二一世紀の科学の、いや、たぶん三十一世紀の科学の時代が来る。そして、そのときには我々の子孫たちは、現在の我々の想像も及ばぬような技術や知識を自由に使いこなしているだろう、と博士は語る。アーサー・クラークも言うように「現在の我々自身の技術よりほんのすこし進んだ技術でも、それは魔術のように思えることだろう」。最もやっかいな問題も実はそこにある。というのには、UFOを建造・操縦する人々の科学技術の「床」が、現代人類自身の科学技術の「天井」よりも上にあるならば、我々が近い将来にこの差

を克服することがいっただいできるだらうか、またそのような異質の本質をどうやって評価できるだらうかということになるからである。

●N A S A も超能力に関心を示す？

読者諸君もご承知かと思うが、N A S A (米国航空宇宙局) の関係者のなかにも、ここ数年来超心理学に並はずれた関心を寄せる人々がいる。そしてそのなかには、米国では最も有名な神経学者であり、五四の特許を持つ電子工学技術者でもあり、また世界最高の超心理学者であるアンドライジャ・ビュハリッチ博士もふくまれる。博士はまた、専門家たちの間では内容深い数々の論文の著者として、市民の間では「魔法のマシルーム」や「テレバシー」の彼方に「など一般向きベストセラー」の著者として、それに超能力者のペーター・フルコスの発見者としてもよく知られている。

数年前のことだが博士は、N A S A (あるいは、N A S A にきわめて近い筋) から、古代聖者の術である空中浮揚術を行うというある人物を調査するためブラジルに潜行するよう依頼された。ビュハリッチ博士自身の説明によるとその人物の所在をつきとめることはできなかったが、ブラジル滞在中に

すすめられたのは、いなか者ではあるがコンゴナス・ド・カンボですばらしい心霊手術を行っているホセ・デ・フレイタス、あだ名をアリーゴ(まぬけな男)という男を調査することだった。博士は行って見てすっかり驚き、数カ月後には医者、技術者、カメラマンなど総勢一二人の調査団を組織してふたたびコンゴナス・ド・カンボにやって来た。彼らはそれから何カ月かにわたって、神がかりになったアリーゴの仕事ぶりを観察し、フィルムにおさめた。彼は見知らぬ患者の群れの前で、ふつうはチャリと見るだけで、時には見もしないで病気の診断をくだすのである。平均一分に一人、一時間六〇人というスピードぶりだった。

アン・ドゥーレイ、チャールズ・ボーウェン、ブライアン・ワインダー、それに私の四人は、一九七〇年にロンドンでビュハリッチ博士に会い、博士の撮影したアリーゴの手術ぶりの記録映画を見ることができた。その手術は私と妻、息子の三人が英国で、リオ・デ・ジャネーロのロリヴァル・デ・フレイタスから受けた手術と同様のものだった(姓は同じだが、ロリヴァルとアリーゴは親類ではない。デ・フレイタスというのはいふれた名前なのだ)。

調査団は、いなか者のアリーゴがくだした一千例以上の診断をできるだけ

くわしく、それも一人ひとりについて、時にはX線や血液検査などのあらゆる近代技術を使用して徹底的に調査したが、誤診と思われるのはただの一例もなかったとビュハリッチ博士は語った。この好人物は、ブラジル奥地の小さな町にあるみすばらしい自宅の、マリアやイエスの絵のかかった部屋の中のそまつな木の小テーブルの前にすわり(立っていることもある)、神がかりのような状態のうちに、多くの医師や看護婦をかかえたニューヨークの大病院で一年間にあつかうよりもはるかに多数の患者をみごとに治療してしまふのである。一九七〇年一月、ビュハリッチ博士はニューヨークで、「人間のエネルギー場の研究」を議題とする国際会議の議長となった。スポンサーはライフ・エネルギー研究所とウェインライト・センターである。彼が選出されたのは、この会議の研究課題の対象となりそうな人物をさがしだすための世界一周調査団を派遣するためだった。

一九七〇年後半になってから彼は、あらゆるルートを通じて調査を開始した。女性治療者バチタを調査するためメキシコへも行った。彼女もブラジルやフィリピンと同様の治療者と同様に狩猟用のナイフただ一本だけで麻酔薬も使わずに、消毒薬も使用しないで大外科手術を行うのである(もつとも、

こういった手術で感染する者は一人もないので、消毒薬は不要であるようだ)。ブラジルでアリーゴがやったように彼女も、頭蓋骨を開いて腫瘍を除去するみごとに脳外科手術をやっているにみせた。

メキシコがすむと博士はドイツに行き、つづいてイギリスへ、さらにイスラエルへと旅を続けた。現代の奇跡である本編の主人公を博士が発見したのはイスラエルのことだった。

●奇跡の人

本年二八歳になる若いイスラエル人ユリ・ゲラーは、一九四六年二月二〇日テルアビブで生まれた。この青年の不思議な力はじめて明らかにしたのは、彼が七歳のときだった。だから彼の誕生日のお祝いに時計をくれた。この時計を見つめて心中に忿ると針がとて不思議な動きをすることに彼は気づいたのである。学校に行くところの現象はもつとはっきり現れた。

「洋傘効果」とでもいおうか、彼は自分を中心において周囲の人たちから、たぶんテレバシーで、ある種のエネルギーをひきだすように思われたのである。次に彼が発見したのは、離れたところにある固い物体を動かしたり(念動作用)、未知の方法で情報を受受したり(テレバシー)、手に持つか、な

でやるか、または見つめるだけで金属製品を曲げたり溶かしたり、更に固い金属製品を全く消してしまったりふたたび出現させたり（物体消滅、遠隔移動）することだった。

ビュハリッチ博士がイスラエルに到着したころは、彼はもう劇場の大観衆の前で堂々とショーを行っていた。

博士がいうように、ユリの手にかかると実体のある固い物体が曲がりやすくなったり、時には単に気化してしまふ。博士がメキシコの五ペソ銀貨をユリの手におき、「何とくしてみせたまえ」と言ったところ、銀貨はたちまち消えうせてしまった。博士が銀貨をもう一度出してくれとたのむと、ふたたび出現はしたが変形していた。「彼の手の中の空間以外の場所では何かが起こったことはわかる。こんな貨幣を曲げるには約六百ボルトの力が必要だ。二時間ほどするとユリは飛びあがって電話機に走りよった。そのとき天井から五ペソ銀貨が落ちてきて彼の肩ではねかえって、私のひざの上に落ちた。約六〇度ぐらいの角度に曲がっていた」

最初はイスラエルで、それからドイツで、熱心な調査を数カ月にわたって続けたのち博士は、米国最高のシンク・タンクの一つであるカリフォルニアのスタンフォード研究所へユリを連れて行った。ここでは、宇宙飛行士のエドガー・ミッチェル博士をふくむ一

団の科学者が、それぞれの専門分野で研究を行い、その結果は一九七三年三月、コロンビア大学における物理学会の席上で発表された。ビュハリッチ博士は語る。「実験のさいにもゲラーは、正確なテレパシー能力と正確な透視力を発揮した。彼は念力のみで実験装置を操作したし、はかりに乘せた物質をその実際の重量に関係なく、念力だけで重くしたり軽くしたりしてみせた。また電磁場やきわめて鋭敏な実験装置を動かしてみせたし、実験室でも念力のみで金属製品を曲げてみせた。研究はまだじまっただけである」

●消滅した物体は、一体どこへ？

科学者たちが最も関心を寄せていることのついに、「ユリが消滅させた物体はどこへ行くのか」という問題がある。ビュハリッチ博士は言う。「これについては、まだ適当な実験装置を開発していない。私たちの実験では彼に、貨幣でなく、替わりにある種の発信機を使ってもらっている。これが消滅して未知の宇宙に行ってくるわけだ。それがどこかはわからないが、ひょっとしたら彼の胃のなかかもしれない。だが私たちは、この発信機がもどってきたとき何かの記録が残るように、またそれがどこに行っていたのか

がわかる何らかの変化を観測できるように、この装置に何らかの証跡を残させたいのだ。

実は、私たちはこんな結論に達したのだ。つまり、未知の空間に送り出すための調査機としては人間が一番望ましいということである。人間なら、何かの方法で消滅させられ、または霊的存在に変化させられてしまっても、作用するエネルギー源が何か、また行く先はどんな宇宙だったかを、帰ってから報告できるからだ。この難問を研究するにはそれをもっとも科学的な方法ではなからうかと、私たちは真剣に考えている。宇宙飛行士を外部の宇宙に送り出すことは、今では日常茶飯事となっている。だが、超心理飛行士を内部の宇宙に送り出すようになるかもしれないとは、もちろんこのような情報収集実験はあくまで合法的に行いたい。人間に関しては現在でも暗示、催眠術、麻酔剤の使用などによる様々な実験が行われている。もしわれわれがこれらの被験者を探険家として使用するようになれば、近代病院の麻酔チームのような医師団が必要になるかもしれない。この医師団が、被験者が消滅してその肉体から遊離するさいに彼の行動を追跡するのである。また、ユリが物体消滅の実験を行うさい、前もってだれかをその肉体から遊離させておき、空中にただよいながらユリのする

ことを観察させることもできる。彼は現場にいて観察をつづけているのだが、実際は全く別の次元の空間にいるわけで、彼の肉体は明らかにここにいるにもかかわらず、だれも彼自身を見ることはできないということになる。彼は自身から遊離してその空間での出来事を観察し、消滅した貨幣を追跡するので。

われわれはいろんな種類の発信機を考えた。たとえば、この時計はすでに一度ユリの手で消滅させられたもので、その後ふたたび出現して、今では全く正確に動いている。だが彼はまた手に持った時計を念力で進ませたり遅らせたりすることもできる。したがって、時計を送り出すことは意味がないといえる。放射性物質で作った発信機をユリに消滅させることも前から考えているが、これならその内部のエネルギー分子の分布状態を計測できる。それがもどってきたとき、正常な分布状態とどれだけがっているかわかるわけだ。そうすれば、その発信機が旅してきた宇宙がどんなものか、何かをつかむことができるだろう。しかしこの問題は考えれば考えるほど、既知のいっさいのエネルギー組織や物質組織を操作できる人物を使って実験をすることは、情報よりもむしろ歪曲をもたらすのではないかということに気づいてくる。つまり、彼なら何でも操作でき

るかもしれないからだ。

科学が信頼している計器さえ信じられなくなる。計器の針は念力でも動くからだ。近代計測法が根本から危機にさらされているわけだ。古くさい黄金の子牛は窓から投げすてねばなるまい。研究所のスタッフがうろたえているのはそのためなのだ。つまり、この青年は、現代のビデオ組織もコンピュータ組織も破壊しようとしている。すくなくともそれだけの能力を持っている。

この「内部の宇宙」がUFO研究にどんな重要な意味を持つか、強調してみせる必要はないだろう」

●ユリの超能力は外部宇宙から来る

UFO問題に関心を持つ多くの読者諸君にはもっと興味深い事実をお話しよう。

まず第一に、ビュハリッチ博士がしだいにユリと親しくなるにつれて、ユリのほうも、自身のことやその信念、経験といったものについて、気軽に博士に打ち明けるようになった。ユリの話によると、神秘の力は彼を通じて働くし、またエネルギーを引き出すため他人が周囲にいないてはいけないうろに見えるが、いっさいの背後にある力はユリ自身の内部から来るのではなく

て外部から来るのであり、それも彼自身は地球の外から来るのではないかと考えているとのことである。

彼が博士に打ち明けたところでは、すべては彼が三歳のときからはじまつており、当時のことは細かい点までハッキリ覚えていてという。ある日の午後彼は、テルアビブにある彼の家の近くの大きな庭園で遊んでいた。そのとき、頭の内外で閃光が輝くを感じた。その光は強烈で現実的であり、空の彼方から来たように思われた。彼は母のもとへ走って行ってその話をしたところ、母は空をじっと見上げたが、よく晴れわたっているだけで何もなかった。

そのときはユリも、この経験をあまり重要視しなかった——それはそうだろう、彼はそのときたった三歳の幼児だったのだから。だが、彼が成長し、不思議な力も発達するにつれて、彼自身も、いっさいはあのとき頭の内外にひらめいたあの壮大な閃光が原因であることは間違いないと思うようになってた。

彼を通じて働く力がどこから来るのかと聞かれて、彼はこう答えている。「この力は、私から発するものではなく、私を通じて現れているだけだと信じます。これは外部からの力なのです……。また、私は、私たちが多かれ少なかれもっと他の仕事のために準備さ

れているのだと信じます。それは必ずしもこの地球上とは限らず、どこか他の惑星での仕事かもしれません。私にいまできることは、たとえばこの宇宙全体のように、地球や人類を超越した大計画の一部なのかもしれない。いま「準備されている」と言いましたが、これは死を否定するものではありません。肉体はむしろ死にます。しかし、私たちはエネルギーとして、また私たち自身として、生き続けるのです（ユリは、人間が生まれ変わるといふことは実際にあるのだ、と強調している）。

今までの出来事——私が皆さんに見せてできること——は、将来どんなことが起こるか皆さんに証言するための大変複雑な大計画の一部にすぎません。私たちは、成長途上のもっと大きな出来事のために準備を整えつつあるのです。今までの出来事は、もっといろいろな不思議なことが起こる、また私たちにもっと大きなことができるのだ、ということをご告げる前兆にすぎないのです。

この件について私が考えていることはすべて、時間——過去、現在、それに未来——を制御するすべを知り、われわれの想像を絶するほどに発達したある超文明に関係があるのです。この文明は、人々がそれを完成するための使命を帯びた制御装置——コンピュータのようなもの——を残しているに

違いありません。そしてこの使命こそ、他の人々と同様、私たちにも深い関係があることは疑いありません。

ですが、はつきり申しあげておきますが、これは神について言っているのではありません。神こそはいっさいを超越していると、私は信じます。

神の存在は、いつも私が考えてきたことです。いまこそ私は、自分の経験から、そして自分の持つ能力から、私の信仰心がいよいよ深くなってきたことを感じています。

私にとってそれは、宇宙空間を飛行したり月に着陸したりした宇宙飛行士たちの経験したことに同様なものだと思います。宇宙飛行を行ったために彼らは、神と宇宙についてもっと深く考えるようになりました。私自身の体験は、それよりももっと長い期間にわたっているだけです。それだけなのです」

今後数年間に地球にどんな出来事が起こるかと質問されて、ユリは次のように答えている。

「三年以内に何か大きなことが起こります。すばらしく壮大なことです。地球の外部もかわりあいになります。が、やはり地球にいちばん関係の深いことです」

それは外部の宇宙との連絡がはじまるという意味なのかと問われて、ユリは言う。

「そうです。今度こそはたいへん緊密な連絡です。しかし、それは我々人類の方に心構えができていくかどうかによりです。私たちの準備ができていなければ、連絡ははじまらないでしょう。もったあとになればもっと詳しいお話ができますが、今のところは私もすべてを知っているというわけではな

●驚異的な超能力の数々

ユリとその能力について得た膨大な資料についてこれ以上お話しすることは紙面の都合で不可能だが、彼の驚くべき力についても少しお知らせしたい。

金属製品を曲げたり折ったりするときにも、これといって特別な感覚は感じない、と彼は言う。そして、まことに不思議なことに、これらの金属製品——スプーン、キー、貨幣など——の場合、曲げや崩壊の過程はどうかすると、ユリが手をはなしたあと、または念波を送ることをやめたあとでも進行をつづけることがある。さらにくわしく質問されて、ユリは、「低電圧の電気・ショックのように、熱かったりビリビリしたりする」ことはある、と答えている。また、すばらしい離れわざをやったときは、精神的にはとても爽快だが、肉体的にはかなりくたび

れるという。こういったビリビリした感じや熱い感じ、それに肉体的疲労などは他の超心理現象にも共通した特色だが、それは「UFO」体験の場合にもよく感じられることなのである。

この小文を終わる前に、彼が行った奇跡の二、三を述べておきたい。

あるとき、ビュハリツ博士がユリに、霊魂だけブラジルに旅行してこないかとすすめたことがある。ユリは言う。「私はある町に着いた。一人の男にここはどこかとたずねると、リオデジャネーロだとのことだった。するとだれかが真新しいチクルセイロ札を私の手ににぎらせてくれた。このブラジル紙幣は、アンドライジャのそばの長椅子に座った私の手のなかにそのまま残り、私がブラジルに行ってきたという証明になった」

一九七一年一月、ビュハリツ博士はユリをつれてシナイ砂漠にいた。博士はムービー・カメラの中に砂が入ったのでブツブツ言っていた。このカメラのケースは、ニューヨーク市オシニングの自宅に置いてきていた。

翌朝博士がイスラエルのホテルの自室にいと、五時半ごろユリからすく来いという電話がかかった。彼の部屋にカメラのケースがあるというのだ。博士は語る。「そこで私は大急ぎでかけつけた。一目見ただけで、これが、六千マイル離れたニューヨーク市オシニ

●時計を使ってテレポーテーション実験中のソ連の超能者、ネリア・ミハイロバ夫人



ングの自宅の戸棚に入れて錠をおろしてあるケースだとわかった。チャンとマークがあるし、間違いない。それに、八カ月はどしてオシニングに帰ってみると、ケースはそこになかった。ケースはそれ一つしか持っていないのだから、このことが、ユリは遠くはなれた場所へでも不思議な力で物体を移動させることができるという最初の体験だった。その後は、彼は何度もこのような実験をしてみせてくれた」

現在ユリは、宇宙飛行士のエドガー・ミッチェル博士が月に置き忘れたカメラを地球に移動させる問題を研究中である。彼は言う。「それをなしとげ

るためには、心で感じなくてはならぬ……。できることはわかっている。私がすることは、それを心に念じ、それからほとんど忘れてしまうことだ。しかし、このことはやはり心の隅のどこに残るのだ。それ（月に残したカメラ）がいつ戻ってくるかわからないが、時期が来ればかならず戻る。だがそのためには環境も適当でなくてはいいけないし、大インテキだと言われないためには正当な証人も必要だ。私が聞いたところでは、そのカメラが月に残っていることを物語る写真もあるそうだから、宇宙飛行士のだれかがそのカメラをコソコソ地球に持ち帰ったから

こそそんなインチキができるのだとは言えないわけだ。その上、ある科学者の話では、そのカメラはもう放射能を帯びているはずで、この放射能こそ測定できるよい証拠になるということだ。宇宙飛行士やNASAの証言や写真と同じようにね。そうしたら人も私を信じるようになるだろう。むろん、信じてくれない人も、たくさんいるだろうが、

● UFOに乗船したユリ・ゲラー

最後に、もう一つ。

ビュハリッチ博士は自分のパーカー万年筆の真ちゅう製カートリッジに目じるしをつけ、この万年筆を鋼鉄製キヤビネットにおさめて錠をおろし、それからユリを呼んで、カートリッジを消滅させてみると命令した。ユリはただちに承知し、カートリッジは消えてしまったが、それから二日後、ユリが博士に話しかけた。「アンドライジャ、あなたが欲しがっていた証明をお見せしましょう」

夜になって二人は、イスラエルの砂漠へ車を走らせた。

博士は何か「コオロギのような音」を耳にした。以下は博士の言葉を借りよう。

「砂漠に一機のUFOがいた——金属

製の円盤形をして、頂上では青い光が輝いていた。私は言った。『なるほど、これなら証拠になるね』(注)

ちょうど高感度の夜間用フィルムを入れたスーパースーパー8ミリ撮影機を持っていたので、私はさっそく撮影をはじめた。

ユリは言った。『あなたは近づいてはいけません。私は乗船しなければならぬが』

五〇ヤードほど離れたところから私は、彼がUFOの内部に入っていくのを見て思った。『さようなら、ユリ。もう君に会うことはないだろうね』

私は撮影を続けた。一〇分ほどすると、ユリが何かを手持って出て来た。見るとそれは、私のパーカー万年筆のなかの真ちゅうカートリッジではないか。目じるしがあつたのですぐ私のものとわかつた。これこそ何よりも納得できる証明だった。

私は言った。『やれやれ、これでUFOの映画ができたぞ。君が乗船するところも撮影した。二日前の体験の物理的証拠もできた。これは良い事例になる』

だがそれから、今度はスーパースーパー8ミリ撮影機のフィルム・カートリッジが消滅してしまつた。たつた一〇分間の出来事だった。これこそ私の証拠品だつたのに。だから今や私は、いろいろ不思議な経験をした以外には、手を

ふれることのできる証拠は一つ持っていないのである」

● 新しい科学とは

現代人の科学では全く説明がつかないように見えるかもしれないが、これらの事件は将来われわれの研究がどのような方向をとらねばならないかを明らかに示しているのだ。超心理現象は避けてなつかしいボルトとナットの時代にもどりたいなどという泣きごとは、できることなら聞かずにすませたいものだ。現在では「ボルトとナット」派も、彼らの科学や宇宙観がドーデー鳥のように絶滅しつつあることを理解しはじめているはずである。

一九世紀の固い、「実在」して手でふれることのでき、長持ちのする機械観はすでに色あせ、いっさいは運動と波動、それにエネルギーの科学に道をゆずりわたしている。この新しい世界を探索して、それを説明するための全く新しい科学用語を作り出すことが必要なのだ。これこそ新しい時代の若い科学者たちの手強い仕事となるだろう。マックス・プランクが言つたように新しい観念になじみやすい新しい血と新しい精神が、古いものどもにとつてかわりつつあるのは、ありがたいことだ。彼らなら、メンゼルやコンドンなどという名に結びついた非科学的感

情的思考にかかずらって貴重な時間をむだにすることはないのであらうから。

われわれの研究の本質に関係があるのは、人類が宇宙の生命のなかでどの程度の高さにいるのか、そしてアイヴアン・T・サンダーソンが簡潔に命名した「OINTS」(Other Intelligent, 他の知的生命の略)たちといかなる関係にあるのかという問題である。したがって、私たちの研究はその最大の努力を、(ユリ・ゲラーやその他の多くの人たちが信じているらしいように)このOINTSはただ単に地球の外部から来るのか、それとも宇宙の外部から来るのかという難題に集中させねばならないだろう。後の場合ならば、その故郷はまことに多種多様なものとなるかもしれない。宇宙に関する私たちの知識はまことに乏しいのであるから、私たちはどちらの可能性に対してもあらゆるドアを慎重に大きく開けておかななくてはならないだろう。

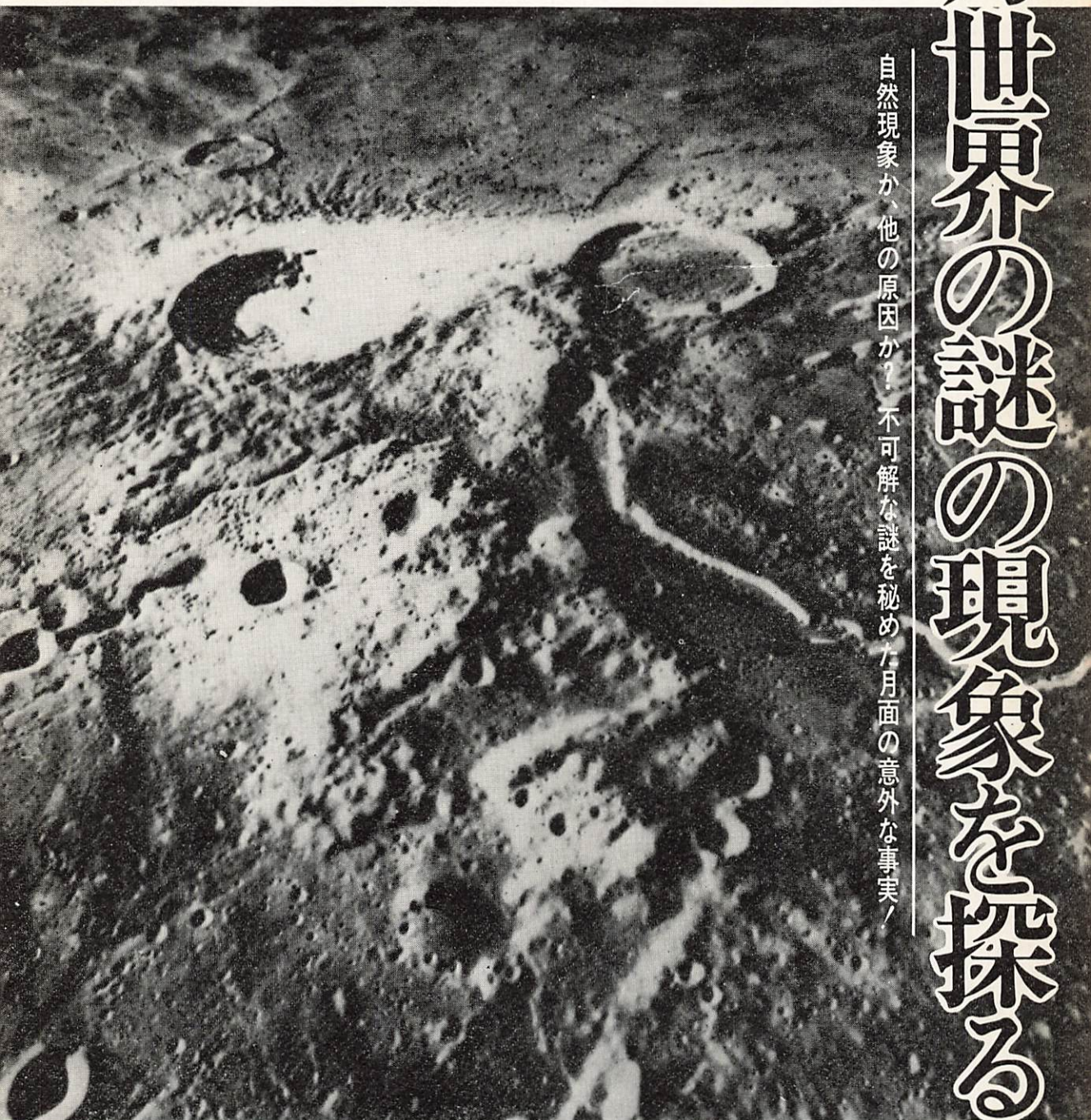
注

ブラジルに滞在中博士は、しばしばUFOを目撃したばかりでなく、奥地の着陸地点に行つてみたことさえあつた。奥地ではあまりたびたびUFOが着陸するので、住民はすっかり馴れてしまつても興味を失つていた。これは博士自身の言葉である。

●〈天空と大地〉科学シリーズ(8)

月世界の謎の現象を採る

自然現象か、他の原因か？ 不可解な謎を秘めた月面の意外な事実！



●アリストアルコスを北側より望む。
左のクレーターがアリストアルコス。
右はヘロドトス。周囲は嵐の大洋。
(アポロ15号撮影)

京都大学花山天文台台長
理学博士 宮本正太郎

●不思議なオニール橋の出現

月は地球に最も近い天体であるためか、昔からいろいろの噂のたえない世界である。かぐや姫の伝説はともかくとして、一七世紀になって、惑星の運動法則で有名なケプラーは、月のクレーターは月人の築いた城壁であろうと考えていた。

望遠鏡の性能が良くなって月のこまかい地形が観測できるようになると、月世界にも火山活動や地殻変動が起こっているのではないかと、いう疑いが出てきた。月面「晴の海」にリンネという名の小さいクレーターがある。一八六六年シュミットはこのクレーターが消失してしまっただけと言いついて大騒ぎとなったことがある。今世紀になって宇宙時代のはじまる少し前、一九五三年の夏、アメリカのオニールは、月面の「危機の海」の西岸に長さ一九kmの橋がかかっているのを発見したと、いつて評判になった。

遠くはなれた世界をのぞいてみるには望遠鏡が必要である。しかも大口径のものほど望ましい。しかし大きいレンズを造ることは技術的にむづかしい。現在でも最大のものはシカゴ郊外のヤーキース天文台にある口径四〇インチ（約一〇〇cm）屈折式望遠鏡である。もっと大きいものをというと、鏡をつかういわゆる反射式望遠鏡であるが、これも大きなものが次々と建

設されたのは戦後のことである。昔は鏡を磨く

には個人の経験とカンにたよっていたので、大望遠鏡というのは珍しく、一般の者は観測者の言うことを信用する以外にしかたがなかった。

一八世紀末、イギリスの天文学者で音楽家でもあるウィリアム・ハーシェルは口径四フィート（一二〇cm）の大望遠鏡を手磨きで作った。彼は数多くの偉大な研究をなしたが、どうかと思うようなことも言っている。太陽はいつも密雲に覆われているが、この下には固い地面があり、人間が住んでいるというのである。今から考えると温度六〇〇〇度の太陽表面にである。

ウィリアム・ハーシェルの息子のジョン・ハーシェルは南アフリカのケープタウン郊外に口径二〇フィートの大望遠鏡を据えつけた。一八三五年夏、ニューヨークからロックという記者

がやってきて、ハーシェルの大望遠鏡でみると月には羽根のはえた月人（セラナイト）のいるのが見えるという記事を書いたので、アメリカはもちろん、イギリス、フランスでも大発見として騒がれた。

望遠鏡でどれくらいこまかいものが見えるかということとは、望遠鏡の倍率ではなくてその口径による。現在世界第一の望遠鏡はパロマ天文台の反射鏡であるが、口径五メートル。この望遠鏡では角度 0.023 秒のもののまで分解して見える。この角度は月面というところと四三メートルのもののまで見えるということである。これでもし月人が見えると思えば、それは身長四三メートル以上の超人でなくてはならない。もっと遠い火星世界となると、かりに火星人がいるとしてもそれを見る望みは全くない。火星大接近のときなども、 0.023 秒といえは、火星表面にある三〇キロメートルの大きさのものをやっと思分けることができるにすぎない。もし火星人を見たければ、どうしても宇宙船が必要になる。

●アルフォンススのガスと アリスタルコスの“赤い灯”

以上のような次第で、昔からいろいろの噂が次々に話題となったが、確かなことは何もわからなかった。むしろ、月には水も空気もないとい

いうことから、死の世界だというふうに見られていた。月は少し図体は大きい、ただの石ころで、火山活動も地殻変動もないものと信じら



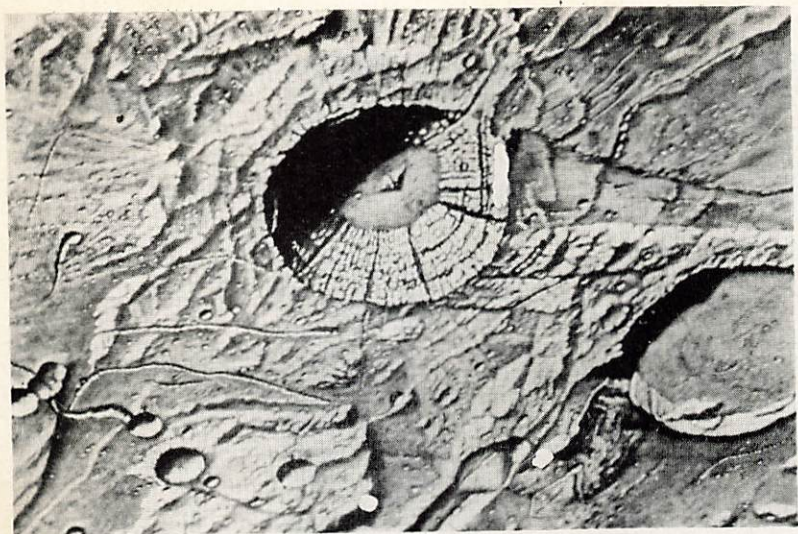
●アルフォンスのクレーター-中央峰付近。(レインジャー9号撮影)

れていた。このようなわけで、宇宙時代のはじまるまで、プロの天文学者で月をまじめに観測し研究している人はいなかったのである。

ところが宇宙時代となって、現実人間が月へ行ける可能性が出てきてからは、ほっておけなくなった。月への関心が高まり、アポロ宇宙船をどこへ着陸させたらよいか、精密地図を作ったり、地面の様子を調べたり、忙しいことになり、専門家も月の研究に取り組むようになった。

このようないきさつから、多くの観測者があらためて月面を監視するようになってみると、今までの何の変化もない世界だと信じられていた月面に不思議な現象の見られることがわかってきた。

ロサンゼルスオルターは月に大気が少しでもあるかどうか調べようと思って、青フィルター、赤フィルターをかけた写真を撮って比べる作業をつづけていた。もし月に大気があるなら地球の場合と同様、青フィルターをかけた写真では遠方の景色がうすれるはずである。それは短波長の光ほど大気による散乱が大きいからである。ところで、一九五六年一〇月二六日の早朝、オルターは月面の中央近くにあるアルフォンスという名の大クレーターの写真を撮ったところ、青フィルターをかけた写真にはクレーター内部の地形が出ていないことを発見した。アルフォンスの南隣にあるアルザッヘルというクレーターには内部の地形がちゃんと写って



●赤い灯のともるアリストアルコス（矢印の地点。グリーンエーカーによる）

いる。オルターはアルフォンススのクレイター内のどこからガスが噴出していたのではないかと推論した。

このニュースを知ったクリミヤ天文台のコズイレフはアルフォンススに注目して観測をつけていたが、一九五八年一月三日早朝、下弦の月が空にかかっているときアルフォンススの中央峰付近にガスの噴出しているのを発見し

た。彼はガスのスペクトルを撮ることに成功し、そのなかに炭素分子の吸収帯のあることも確かめた。

この報道はアメリカにも伝わったが、当時アメリカではすべての学者がコールド・ムーンの見解をとっていたので、コズイレフの観測を頭から否定した。しかし彼は翌年一〇月二三日の夜明け前、ふたたびアルフォンススのガス噴出を目撃したのである。しかし、この同じ時刻にイギリスの観測者モアアがアルフォンススを見ていて、彼には何の異状も認められなかったということがあるようになって判明し、この事件については意見が分かれて結着がつかなかった。

それから数年たつて一九六三年、すでにアメリカではアポロ計画がスタートし、宇宙局の連中は月世界の地図づくりに懸命であった。空軍

●「嵐の大洋」の謎のフレア

こうなつては月世界にも何かの事変が起こっていることを疑うわけにはゆかなくなつた。ところで同じ年の十一月、また新しい型の異変が発見された。マンチェスター大学のコパールは宇宙局の依頼で月面地図作りのため、世界的な観測網をつくつて月の写真観測にはげんでいた。この観測拠点の一つであるフランス、ピレネー山脈の頂上にあるピク・デュ・ミディ天文台において、一九六三年十一月一、二日の二夜

の地図情報センターからアリゾナのローエル天文台に派遣されていたグリーンエーカーは、アルフォンススの事件よりもっと驚くべき異変を目撃したのである。それは月面「嵐の大洋」のまん中にあるアリストアルコスというクレイターについて、地図の最後の修正を行うため、こまかい地形をチェックしていたときのことである。一九六三年一〇月二十九日夕、グリーンエーカーはこのクレイターの外輪山と付近二カ所に赤い灯のともっているのを発見した。灯は三〇分ほどして消えたが、同僚のバルもこれを見ている。しかも一カ月たった十一月二十七日夕にもふたたび外輪山の同じ場所に赤い灯がともった。このときは緊急の電話連絡により、他の多くの天文台でもこの現象を確認した。

これも月面「嵐の大洋」にあるケブラーと呼ばれるクレイターおよびその北方、六万平方キロメートルにわたる地域が赤くボツと明るくなるのを認めた。輝きは一五分間くらいでおさまったのであるが、青い光には異常はなかったという。

この現象をコパール自身は太陽面に起こったフレアと呼ばれる爆発現象に結びつけて解釈しようとした。フレアに伴って巻き起こされた強

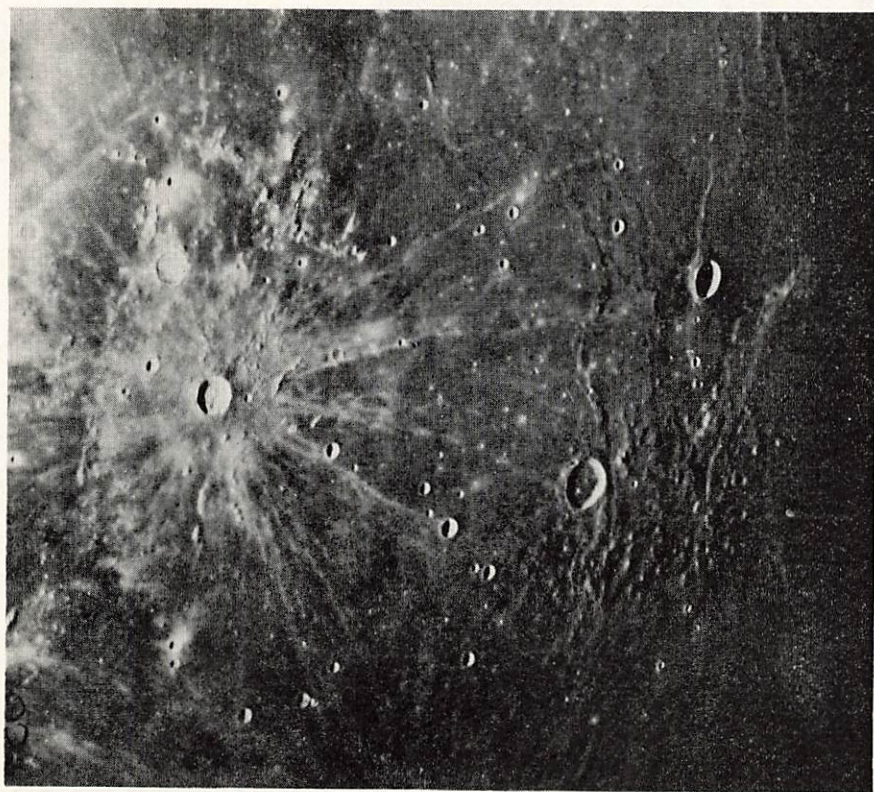
い太陽風が吹きつけ、この地域に螢光現象があらわれたのではないかというのである。その後の観測データの集積から統計的にみると、この現象と太陽フレアとの相関はあまりないらしいことがわかった。それだけにいつそう不思議な謎の異変ともみられている。

●二六世紀から月面の異変が見られた

一九六九年夏にはアポロ十一号が最初の有人月面着陸に成功した。今から言えばアメリカだけでなく全世界が平和な良き時代であった。その後、不景気の進行につれ、アポロ計画も一七号で打ち切られてしまい、問題の地点であるアルフォンススにもアリストタルコスにも、またケブラーの北方にも宇宙船を着陸させて調査を行う希望は消えてしまった。実用的な宇宙ステーション、スペース・シャトルの実現の後、ふたたび月世界探究の日の来るのを待っているのが現状である。宇宙ステーションさえ整備されれば、小さなロケットで、わずかな費用で楽に月へ往復することが可能となるからである。

さてアルフォンススのガス噴出事件の頃から我々の月に対する考えが次第に変わってきたことは事実である。このような異変は現代になって初めて起こったものだと考えられない。昔にも起こったにちがいないということから、各国の古い記録を熱心に探りはじめたのはイギリスのモアと、アリゾナの惑星研究所にいたミッドルハースト女史である。彼らの調査によると、異変の記録は一六世紀中葉までさかのぼることができるという。一六世紀といえはもろろんガリレオの望遠鏡発明以前の時代である。

ライン河に沿う古都ウォルムスの街で、一五



●赤く染まるケブラー北方の地域。南が上。中央左の光条を伴うクレーターがケブラー。(アリゾナ月惑星研究所)

四〇年一月二六日の夕、三日月形に欠けた月の暗い部分に、点のような光を人々が見ている。その位置は月面の北半球にあるカリブスというクレター、またはその付近であった。望遠鏡でなく、肉眼で見えたというのであるから、よほど大きい規模の事件であったにちがいない。ハーシェルその他有名な天文学者もそうした記録を残しているから事実であることに間違いはない。事件の発生する地点もきまっています、アルフォンススやアリストアルコスが記録の数も最も多く、平均して年に一回くらい。どこかで何かが起こっていることになるというから驚くほかはない。

ミドゥルハーストの集計によると、異変の起こるクレターは月の海と陸地との境に沿って分布している。もしこれが事実ならば、月の裏側は陸地ばかりで海がないから、月の裏側の異変も起こらない平穏な地域だということになる。それはともかく、海岸沿いに危険地帯のあるという傾向は、わが地球においてはもっと顕著である。太平洋という大きい海に沿って、インドネシアから日本列島を経て、アラスカ、カリフォルニア、メキシコ、ペルー、チリまで地震や火山爆発のたえまのない、いわゆる「火の帯」ができています。

●不可解なコパールの観測例

太平洋を取り巻く火の帯の存在は近頃やかましいマントル対流説によって説明されている。地球の中心部には鉄、ニッケルの重いドロドロに溶けた中心核があり、それを取り巻いてマントル層といわれる岩石の層がある。岩石ではあるが、深部で放射性元素の出す熱のためにあたためられて、そろそろと対流を起こしている。この対流は深部の熱い、したがって比重の小さくなった岩石と、外側の冷たい比重の大きい岩石とが入れ替わる現象である。岩石といえども百万から三百万気圧の力で数千万年の間じっとおさえつけられると、アメのように流れ出す。速いところで一年に一〇センチくらい動くにすぎないが、一億年もたてば地球内部の岩石と表面近くの岩石が入れ替わるくらいの大きい変化になる。現在の地球ではおよそ二億年周期でこのような対流の盛んな地殻変動、天変地異のはげしい時代がやってくる。現在は大変おとなしい静かな時代にあたっている。それでも内部の熱い岩石がカリフォルニア一帯で吹き出しており、それが西に流れて日本列島のあたりでふたたび地球の内部へと帰ってゆく。このようにして太平洋を取り巻く火の帯が形成されているらしい。

月は地球の四分の一の小さい惑星であるから内部で遊離されるエネルギーもそれほど多くはないが、それでも一〇億年もたてば温度が昇り岩石の溶けるくらいにはあたためられる。あちこちのクレターでガスの噴出があったり、溶岩が出たりしても不思議ではないであろう。月の内部のマントル対流は、もしあるとしても地球のものよりずっとおとなしく、活動の周期は二〇億年くらいになるものと思われる。したがって、地球や月の年齢を地殻ができてから四五億年くらいと推定してみると、創成期は別として、現在までに一度くらい地殻変動の盛んであった時代があつてよいことになる。そうした形跡は月の地形のあちこちに認められる。

アルフォンススやアリストアルコスの異変は以上述べたようにして何とか解釈がつけられそうであるが、コパールの見つけた異変はまた別種の事件であつて、火山活動で説明するのは無理である。この種の事件の記録はコパール以前を探しても無駄であることは明らかである。もっとも、昔から皆既月食のとき月が意外に明るいのは月が螢光を放っているからだというような話もあるにはあつた。ともかく、その後コパール自身および他の天文台で同様の観測を続けてはいない。したがって、統計的なデータも得られていない。また、この地域付近の地形を写真で見ると、特別な地形になっているわけでもなく、コパールのいわゆる螢光とか燐光を出すような特別な岩石が露呈しているといった徴

候も認められない。コパールの異変は全く謎のまま、しかもその後忘れられてしまったというところであらう。

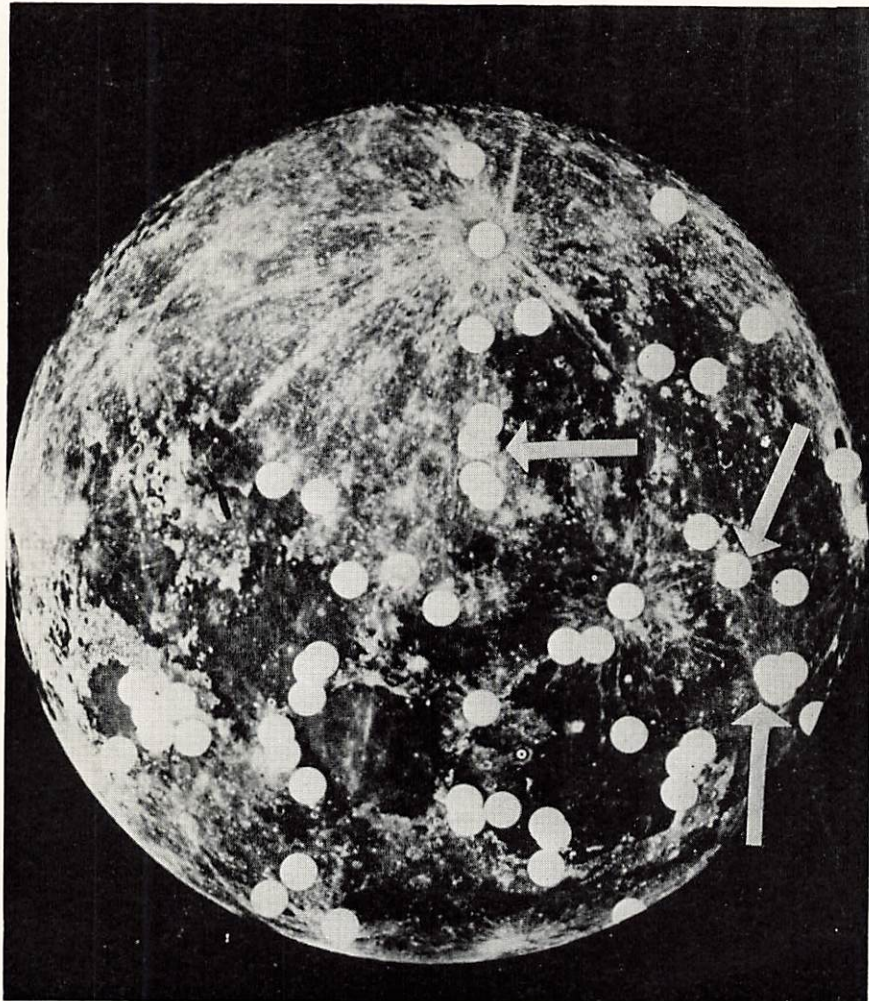
地球から観測できる現象ではないがアポロの残してきた地震計が今でも生きていて、地震、いや月震の記録を送ってくる。月の地震は人体に感じない程度の弱いものであるが、その頻度は地球の地震よりずっと多い。この月震の起こる時期と、前に述べたアルフォンススその他の異変の起こる時期とは、統計的にいって、ともに月が地球に最も近いときに多いという事実が知られている。

地球の周りを回る月の軌道は円ではなくて、かなり細長い楕円である。地球から平均の距離は三八四、四〇五キロメートルであるが、最も近いときには三六四、〇〇〇キロメートル、最も遠いときには四〇六、〇〇〇キロメートルまで離れる。月の視直径は一割くらい変化するので、それにつれて地球が月におよぼす潮汐力も変化し、月自体の歪みも変わる。地球に近いとき、歪みは最も大きく、この時期に月震が最も多く起こり、アルフォンススなどの異変も起こる。

地球が月に引力をおよぼすと同時に、月も地球に引力をおよぼしている。このため、海の潮の満ちひきだけでなく、地球自体も歪みを受ける。余談になるが、ソ連の研究者によると、カムチャッカから日本列島にかけての地震は、月が地球に近く、地球の歪みの最も大きい時期に

最も多く起こるということである。まだ統計的な、あらい研究であるから、地震がいつ、どこ

で起こるというような地震予知の可能性にはほとんど遠いようである。



●異変の起こるクレーターの分布（南が上）。（ミッドルハーストによる）
矢印は、上からアルフォンスス、ケブラー、アリスタルコスを示す。

●火星の運河は錯覚ではない



●1920年代に観測された火星の運河のスケッチ。

月には水も大気もなく、地下のエネルギーも多くはない。それだけに、月世界で異変が起れば注目をひくことになる。月の異変を考える上で参考になるのは火星であろう。火星は大きさが月の二倍で、地下のエネルギーも地球のようには大きくはない。希薄ながら大気に包まれているので気象現象も見られる。大気の密度は地表で地球の二〇〇分の一程度であるから、地球でいえば高度三〇〇四〇キロメートルの成層圏に相当する希薄さである。この大気は炭酸ガスの大気で、炭酸ガスだけの分量からいえば地球大気より多い。したがって植物にとっては良い環境であろう。しかし酸素も窒素もないので動物はだめである。この事態が知れてから火星人

の噂は消えてしまった。

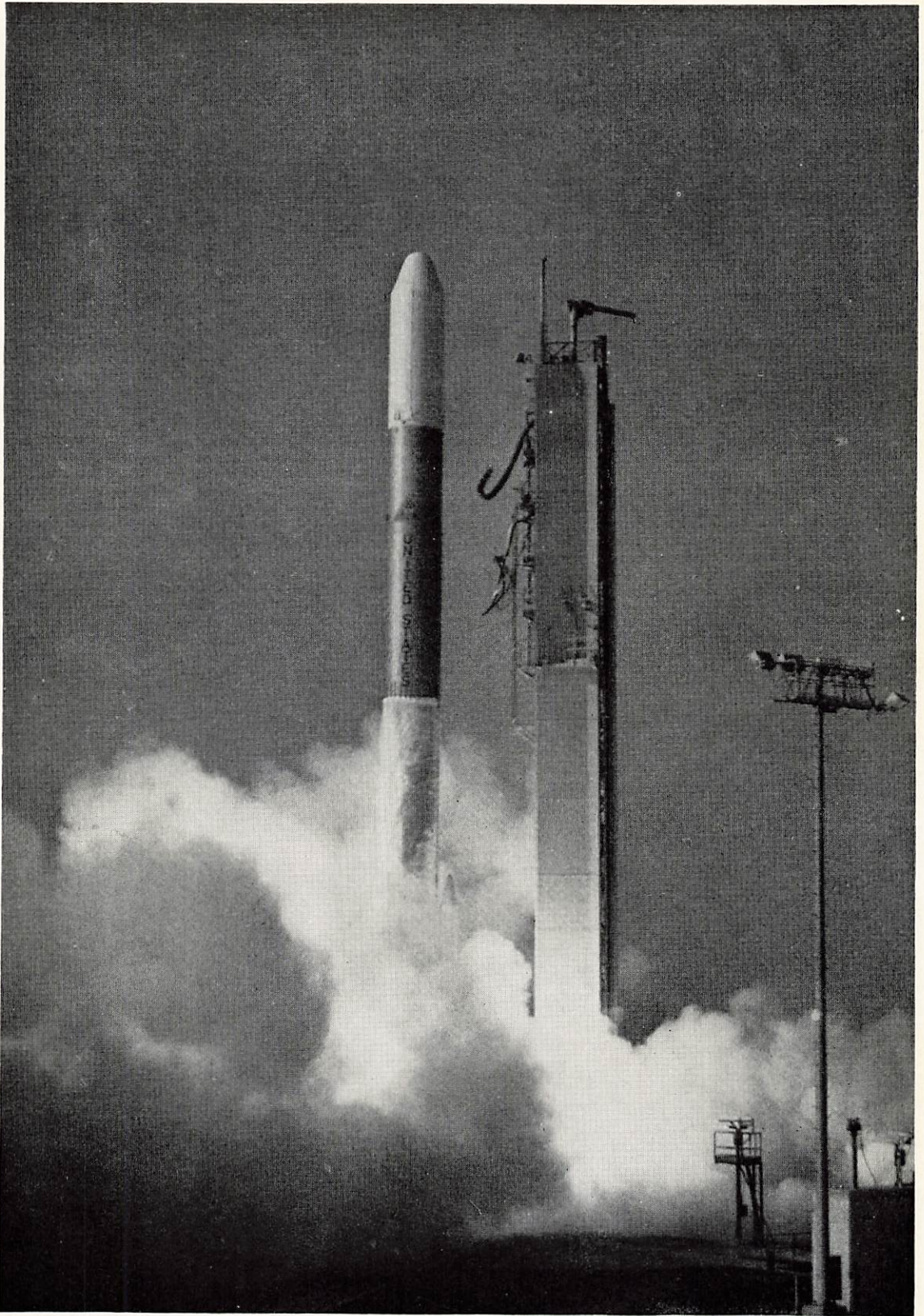
大気中でときたま強い上昇気流が発生し、まっ白い入道雲のかたまりが出来てキラキラ輝くことがある。昔、謎の怪光として騒がれたことも幾度あった。何しろ地球から遠く離れた世界での出来事であるから確かなことはわからない。たまには火山の爆発というような事もあったかもしれない。

はじめての人工衛星スプートニクが打ち上げられてまもない頃、ソ連の著名な学者が火星の衛星は火星人の打ち上げた人工衛星だろうという意見を述べ、それが大きく報道されたことがあった。ところが、一九七一年に打ち上げられた火星ロケット、マリナー九号が写した写

真を見ると、二つの衛星ダイモス、フォボス共に、ジャガイモのような形で、アバタ面をしていて、人工的な様子は全く見られなかった。

火星最大の謎は何といっても運河の存在であろう。火星表面には砂漠地帯をよぎって、運河と呼ばれる暗い直線状の模様が一〇〇〇キロメートル、二〇〇〇キロメートルとのびている。とても天然自然の地形とは思えないというので問題になった。観測者のなかには、いわゆる運河は目の錯覚であって、実在するものではないといって否定する人もいるが、近年写真技術の進歩とともに写真にも著名な運河が写るようになったから、目の錯覚として片付けるわけにもゆかなくなった。

ところで一九六四年末、はじめての火星ロケットであるマリナー四号が打ち上げられたとき、すべての人は今度こそ運河の謎が解けるであろうと期待した。送られてくる写真に運河がどのような地形として現れるか興味をもって待ったわけである。しかし、送られてきた写真にはそれらしい地形は見あたらず、荒れはてた砂漠に、月に見られるようなクレイターが点在するだけのものであった。その後打ち上げられたマリナー一六、七、九号にも運河は姿をあらわしていない。ただ北半球にあるニロシルチス運河と、南半球のコブラテス運河とだけが幅広く長い地溝として現れており、宇宙局の連中はこれを火星のグランド・キャニオンと呼んでいる。この二つは例外で、大部分の運河の正体は



●1974年11月15日、米カリフォルニア州バンデンバーグ基地から打ち上げられた「ストレート・エイト」ロケット。これには3個の衛星が積載されており、その1つにスペイン最初の人工衛星INTASATが含まれている。これによりスペインも宇宙開発の仲間入りをした。

いまだに謎のままである。

月、火星、地球とならべてみると、我々は地球の過去の姿をまざまざと見る思いである。エネルギーのすくない月世界では、原始地殻がそのまま残っている。地球の大陸も昔はクレターに覆われていたことであろう。火星の陸地には月と同じようなクレターの残っている地域もあるが、ところによってクレターは消えて、かわって富士山のような、いわゆる成層火山が見られる。アマゾンの砂漠にあるオリンピア火山は高さが一〇〇〇メートル以上、裾野のひろがりには四三〇キロメートルもある。現在の地球表面にはこのように雄大な大火山は見られない。それは地球の地殻があまりにも固く、厚く進化してしまったので、よほど大きな地下マグマの活動でもなければ大火山はできないからであろう。また、たとえできたとしても、激しい地殻変動のためにすぐに壊されてしまうであろう。陥没カルデラにしても同じことで、地球上で一番大きい阿蘇山は直径わずか二〇キロメートル、こんなものは月世界にもってゆけば群小クレターの一つになって、全然目立たない存在になるであろう。地球は大きさが火星の二倍、地下にも大気中にもエネルギーのあふれた危険な世界である。しかし、そのようなエネルギーの流動する世界にこそ生命が進化するのだともいえる。とはいえ、もし地球より大きい惑星があったとすれば、頻繁な火山爆発や地震のため生物は住めないであろう。生命の育つ

星としては地球くらい大きさが限度であろう。地球の半分の大きさの火星では地殻の進化も生命の進化もテンポがおそい。火星に火星人はいないとしても、原始生命の存在する可能性

●積極的に宇宙へ進出しよう！

この広い宇宙に太陽と同じような恒星は無数にある。わが太陽の属する銀河系だけで千億の恒星があるし、すぐ隣のアンドロメダ大星雲は銀河系の二倍のひろがりをもつ恒星の大集団である。このような集団がバロマ天文台の大望遠鏡で見えるかぎりの空間にどこまでも分布している。スペクトル分析によると、恒星の組成は太陽と同じく水素が主で、ついでヘリウムがその一〇分の一くらい、他の重い元素は全体合わせて一万分の一くらいにすぎない。無数の恒星の体質も、不思議なことに太陽と同じで、例外というのはほとんどない。

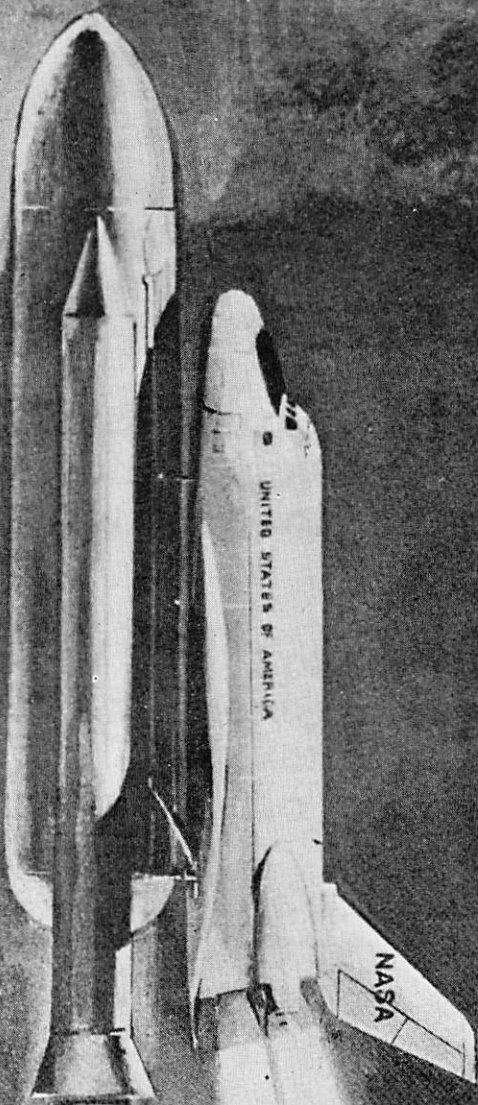
わが太陽系と同じように、どの恒星にも原則としていくつかの惑星が公転している。惑星には大別して二種類あるらしい。木星級の質量の大きいものでは、水素ヘリウムが主で、体質は太陽と同じであるらしい。大気の下には液体の水素、その下には固体の水素の地面があるだろう。もう一つの種類は、地球のように質量の小さい惑星で、重力が弱いために水素ヘリウムは逃げてしまい、硫酸塩、鉄、ニッケルのかたま

は大きい。今年（一九七五）末に打ち上げられるヴァイキング・ロケットは火星の原始生命の検出をねらっている。これは生命の謎の解明につらなる重大な問題といえよう。

りになっている。この地球型惑星が太陽から適当な距離にあれば、その上で生命が育つ。地球の生物は炭水化物の複雑な組織であるが、宇宙のどの惑星上で生命が発生するにしても、核酸のような原子チェーンをつくり、生命活動をなす原子は炭素以外にない。生命に必要な炭素、水素、酸素、燐などはどこにでも沢山ある元素である。こうみえてみると、わが太陽と、そのまわりを回っている地球と、その上に発生した地球の生物は、宇宙のどこにでも見られるありふれた情景であるらしい。少なくとも太陽や地球や人類がこの宇宙の特殊な条件の下に創られた珍しい存在だとする理由はどこにもない。ただし、地球外の宇宙人が現在地球の偵察に来ていのかどうかとなると、また別の問題である。我々は宇宙人の来訪を待つという消極的態度でなく、ロケットを建造して、月をはじめ火星や他の惑星世界をこちらから訪ねる積極性をもちたいものである。近い将来、月はミステリーの世界ではなく、我々地球人の植民地になるであろう。

NASAの活動と、その未来

イルカの言葉の研究、無人の惑星探査計画、スペース・シャトル建設などで湧きたっているNASA（米航空宇宙局）の全貌を紹介



読売新聞科学部

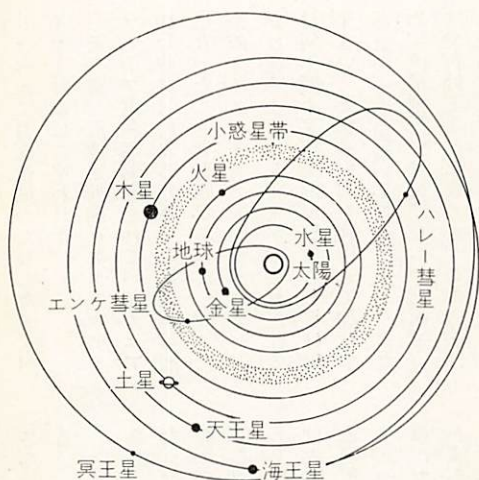
中村政雄

●スペース・シャトルで 宇宙開発へ

地球以外の星にも、地球のような文明を持つ国があると信じて、米航空宇宙局（NASA）は木星探査機パイオニア10号に、宇宙人へのメッセージを入れておいた。宇宙人がこれを見したら、地球に人間がいることを知るだろう。NASAは宇宙人と交信できる日に備えて、イルカの言葉を研究している。宇宙人がイルカに似ているわけではないが、イルカと人間が話せるようになるれば、宇宙人と出会った時に、ひょっとして役に立つかもしれないからである。月に生命はないことがわか

ったが、それ以外の星はどうだろうか。NASAはエンケ、ハレー両すい星や火星、木星の「月」、土星の環など太陽系の「地球の仲間」たち全部を、無人探査機で調べる長期惑星探査計画を立てた。一九七九年からスペース・シャトル（宇宙連絡船）を飛ばし、宇宙の無重力を利用して地上では出来ない新製品を作る「宇宙工場」も一九八〇年代に建設しようとしている。

NASAの惑星探査は、一九六二年のマリナー2号による金星飛行に始まった。このときのロケットは



アトラス・アジナBで、月面に衝突させるのがやっとくらしいの技術だった。その後アトラス・セントール・ロケットが使えるようになり、火星や金星へマリナー4、5、6、7号を送ることができた。アトラス・セントールはアメリカが最初に実戦用として開発したICBM（大陸間弾道弾）用ロケットで、月面に無人探査器を軟着陸させ、

スペース・シャトル

シャトル宇宙船

●設計ランチ	重量	4406000ポンド
●荷物	真東	65000ポンド
	設計荷重(104°)	32000ポンド

78フィート

122フィート 184フィート

オービター

荷物室	直径15フィート 長さ60フィート
●主エンジン(3台)	それぞれ推力 470000ポンド
●OMS エンジン(2台)	6000ポンド
●姿勢制御エンジン(38台)	870ポンド
●姿勢制御バーニアエンジン(6台)	25ポンド
●重量	正身 150000ポンド
	設計着陸時重量 188000ポンド

固体ロケット補助エンジン

●長さ	149,1フィート
●ダイアメーター	146インチ
●重量	ランチ推力1265000ポンド
	不活性ガス 182000ポンド
●推力	ランチ 2700000ポンド

燃料タンク

●長さ	153,7フィート
●ダイアメーター	331インチ
●重量	ランチ1619000ポンド
	正身 69000ポンド

シャベルで月面を掘ったりしたサーベイヤー計画にも使われた。

その後、液体逆推進ロケットやアイソトープ電源が開発されてバイオニア10号や11号による外惑星の探査が可能になった。一九七四年からは一段と大型のタイタン・セントール・ロケットが使えるようになったが、これだけでは何年間も宇宙を飛び続けることは出来ない。惑星の引力を利用して加速するという宇宙飛行が可能になったため、直接飛行では行けなかった深宇宙まで行けるようになった。この方法は水星接近飛行をしたマリナー金星、水星計画で初めて使われた。

昨年一二月三日に木星から四一、〇〇〇キロにまで接近し、表面のカラー写真を撮影して送信したバイオニア11号も、木星の引力を利用して飛んでいる。バイオニア11号は一九七三年四月五日、米フロリダ州のケネディ宇宙センターから打ち上げられ、これまでに一〇億キロもの宇宙飛行を続けて木星に近づいた。木星に近づくとつれその引力に引かれてスピードを増し、最も接近したときは時速一七万一〇〇〇キロという人工の物体としては新記録のスピードだった。この木星の引力ではずみをつけて、次の目標である土星に向かっていく。予定では一九七九年に土星に接近する。こうした引力を利用した飛行をすれば推進エンジンをふか

さなくとも、外惑星へ飛ぶことが出来る。

ただ、軌道修正のロケットは必要である。燃料をたくさん必要とするようなロケットだと重くなり、地上から発射するとき、もっと大型のロケットがいる。そこでブラズマ・ロケット（SEP）の開発が進められている。これは太陽電気推進システムとも呼ばれ、太陽電池でおこした電気で、水銀をプラズマ状にして噴出させる。水銀は簡単にガス状にできるので具合がいい。わずかに一四〇グラムの水銀で、約一四カ月間連続して噴出できる。無重力状態の宇宙では、ごくわずかの力でも効果的に働くので、これで十分太陽系の果てまで探査機を飛ばすことができる。このブラズマ・ロケットは一九七九年に完成することになっている。

NASAの長期惑星探査計画で使われる探査機は現在使用中のマリナー、バイオニアと開発中のバイキングの三種類。マリナーは火星などに接近してそのまま通過したり、そのぐるりをぐるぐる回る。バイオニアは接近して通過する型。バイキングは一九七五年から火星で使われるが、ぐるぐる回ったり、着陸したりする。一九八五年までの計画はタイタン・セントール・ロケット、またはそれにブラズマ・ロケットをつけただけで十分だが、一九八〇年からはスペース・シャトルが実用期

に入るので、スペース・シャトルを使うことも考えられている。

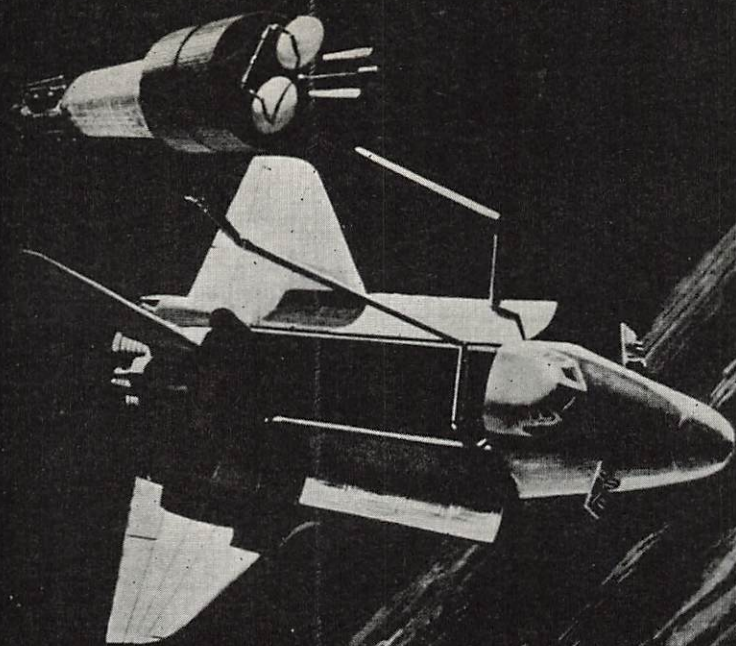
NASAの長期惑星探査計画総括表

年	1973	74	75	76	77	78	79	1980	81	82	83	84	85	86	87	88	89	1990	91~
水星																			
金星	△ マリナー (金星/水 '73)					△△ (バイオニア金星 大気探査機)		△ (バイオニア 金星周回機 時期未定)	△ (金星軌道 レーダー観測)								△ (着陸時期未定)		
火星						△△ (バイキング '75着陸)	△△ (バイキング '79着陸)					△ (サンプル 持ち帰り)						△ (衛星サン プル 持ち帰り 時期未定)	
外惑星	△ (バイオニア 11)					△ (マリナー 木星/土星)	△ (天王星)	△ (天王星 フロップ)	△ (木星探査機)					△ (海王星)					
彗星および小惑星								△ (彗星予備調査飛行 エンケ彗星近接探査)					△ (ハレー水星 近接探査)					△ (小惑星サ ンプル 採取帰還)	

各惑星の「仲間調べ」計画

NASAが計画している惑星の探査

計画には次のようなものがある。



水星 水星に到着するには非常に大

きい推力を必要とする。惑星の引力を利用した宇宙航行方式が使えるようになるまで、水星に探査機を送ることは不可能だった。金星の重力を利用して、マリナー10号がはじめて一九七四年近接観測に成功した。つぎは水星を回る軌道に探査機をのせるわけだが、これには正確な軌道修正が必要で、プラズマ・ロケットが完成するのを待たなければならぬ。マリナー10号で得られたデータを十分解説する必要もあり、お金もかかることなので、実現するのは一九八七年とされている。

金星 この星は表面を厚い雲におお

われているばかりか高温高圧なので、これまでの技術だけで、バイキング型探査機を着陸させるわけにいかない。金星の大気をまず調べ、その過酷な環境に耐える着陸機を開発する。それに着陸するには、表面の地図を作る必要がある。厚い雲におおわれているから、望遠鏡でのぞくわけにいかない。レーダーを使う必要がある。地球から金星表面をレーダー観測する技術は、一九七五年から一九八〇年の間に、一キロメートルを見分けるくらいの精度になると期待される。一九八三年ごろには高精度のレーダーをのせた探査機を送りこんで金星を回らせ、着陸のための地図を作る。着陸は一九九〇年以

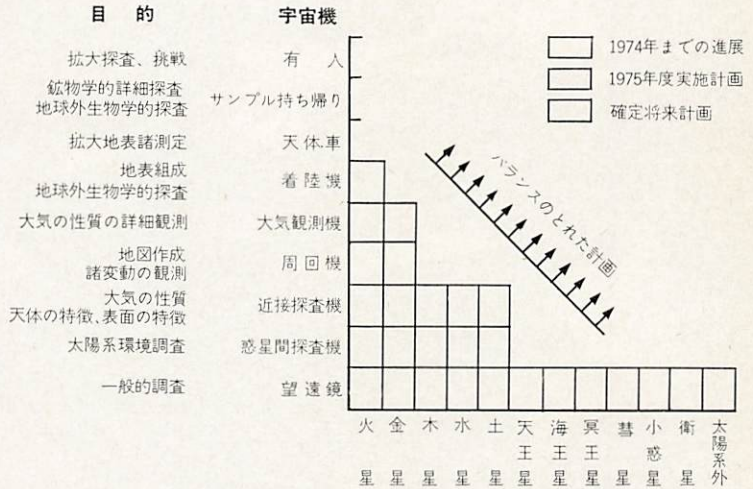
降となる。

それまではもっぱら金星の大気を調べる。大気圏突入探査機で大気下層を調べ、周回探査機で大気上層を調べる。突入型は、四個の探査機を探査機輸送バスにのせて打ち上げる。周回型は探査機輸送バスを少し改良したもので、ほぼ同じようなものとなる。一九七八年にアトラス・セントール・ロケットで一機ずつ打ち上げる。周回探査機はヨーロッパが参加した国際協力になるかもしれない。大気の運動状態を調べるため、気球のような浮遊ステーションも考えられている。

火星 火星は環境が過酷でないた

め、探査機を送ることも容易で、ほかの惑星より探査が進んでいる。すでにマリナー9号によって火星表面の地図は表も裏も完成した。一九七五年にはバイキング探査機を軟着陸させ、火星に生物がいるかどうかさぐる。同時に地質、水分、風がどのように吹いているかなど気象も調べる。テレビによる火星風景の生中継もある。このときのバイキング機は火星の周囲を回る周回機と着陸機が一組になったもので、周回機は火星全体の写真をとり、外気の成分なども調べる。ちようどアポロ計画で着陸船に乗った二人の飛行士が月面に滞在中、司令船が残りの一人を乗せて月を周回していたようなぐあい

惑星探査の進展状況

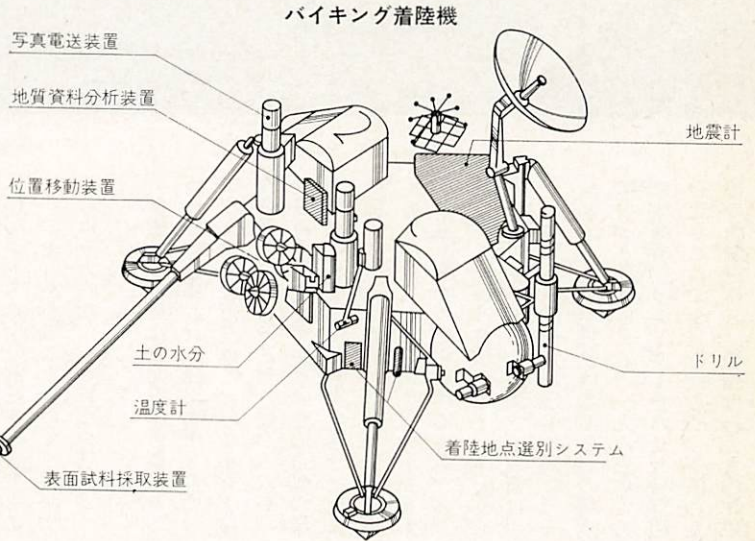


である。

もしこの火星探査で火星に生物がいる、生物がいる可能性がわかれば、一九七九年には火星車を着陸させ、生物を求めて火星上を縦横に走らせる。生物が七五年の調査でいまいとわかれば、七九年は地質調査が中心となる。火星表面は四季の変化をみせるほか、ドライアイスと氷のまじった水原が冬になると北極と南極にでき、夏が近づ

くと消滅する。火星車をうまく走らせることができれば、その試料をとって、電波で地球に知らせてくれるだろう。

火星車は小型と中型があり、形も性能も月面車に似ている。火星の表面を深さ一メートルほど掘る機械や写真電送装置、地震波を出して地面の構造を調べたり、エックス線や中性子線を火星の土に当てて、成分を自動的に分析



することもできる。月面車とちがうのは、人間が乗らないことである。

このあと一九八四年ごろには火星の土を掘って自動的に持ち帰る、帰還型探査機を打ち上げる。NASAの研究によるとタイタン・セントール・ロケット一機を使えば、火星の表面物質五キログラムを採取し、地球に持ち帰ることができる。この計画では、まず火星を回る軌道に探査機を送り込む。こ

こから火星着陸機をおろす。この中には火星試料の収集装置が積みこまれており、着陸して表面物質を集めたら上昇エンジンをふかして戻ってくる。着陸機はそのまま火星に残しておく。月着陸船が着陸に使った下降用のエンジンを月面に残して帰ってくるのと同じやり方である。火星軌道上で帰還用のエンジンとドッキングして地球に帰るわけだが、帰還用のエンジンはあとから送り、火星軌道上でドッキングさせてもいい。火星車を使ってあちこちの試料を集め、それを積みこんで持ち帰ることなども検討されている。

この計画ではいろんな装置が使われるので、切り離して一部分を作ることが可能である。一部分をどこかの国が分担する国際共同実験となる可能性もある。

火星の衛星のフォボスカディオスに探査機を軟着陸させ、その土を掘って持ち帰ることも考えられている。しかし重要さからいえば、それほど重要な実験ともいえないので、一九九〇年より前に実施されることはない。

木星 火星より遠くにある外惑星は、地球とは大きさ、組成、回転速度などがまったく異なるので、太陽系がどうして生まれたか宇宙の起源をさぐる手がかりを与えてくれる。惑星のこどもである衛星は地球に似た性質を備

えており、土星の第六衛星のタイタン衛星と木星の最大の衛星がガニメデ衛星には大気のあることが知られている。

このような理由から、NASAは外惑星を早くから調べたいと思っていた。木星まではアトラス・セントール・ロケットで届くとしても、そこから先は太陽から遠く離れるため、探査機の電源として太陽電池を利用することができず、手をのばすことが出来なかった。しかしアイソトープ電池が開発され、この難関は解決された。一九七二年に打ち上げられたパイオニア10号で初めて使われた。

パイオニア10号と11号のおもな目的は、木星の放射能帯を通過するとき、探査機にどのような障害が生ずるかをみることだった。この二度の飛行で、将来、外惑星探査機を飛ばすときの軌道や探査機の設計に必要な資料が得られた。打ち上げロケットはアトラス・セントールに代ってタイタン・セントールが使えるようになったので、土星よりもっと遠方までいける。

パイオニア11号に続く木星探査機は、一九七七年のマリナー木星・土星号である。パイオニア10号は木星まで一二〇、〇〇〇キロ、11号は四一、〇〇〇キロまで接近した。マリナー木星・土星号はもっと接近して、精密なクローズアップ写真をとる。

このあと一九八一年と八二年には木星のぐるりを回る探査機を送って、さらに詳細に調査する。これで木星の詳細地図や環境がわかり、木星の衛星群の素顔もキッチできる。

一九八四年には木星の大気圏に突込むパイオニア木星探査機が打ち上げられる。木星大気に突入するには、突入条件がかなりきびしい。高温で濃密な大気を通して地球と通信を保ち、その高い気圧に耐える探査機を作るには、かなり高度の技術がいる。熱しゃへいだけでも、アポロ宇宙船が帰ってきたとき地球大気に再突入したさいのしゃへいよりむずかしい。大気が地球よりずっと濃いからである。アポロ宇宙船

くらのしゃへいでは黒こげになってしまう。大気とのまさつ熱で帯電粒子ができるため、アポロ宇宙船も地球大気に再突入したときは通信が一時とぎれた。木星まで出かけて大気を調べるのに、通信がとぎれては困る。高度の技術が必要とするので、この計画は土星や天王星の大気に探査機を送りこんだことになる。

一九九〇年か九一年には、木星最大の衛星であるガニメデ衛星に探査機を着陸させることが検討されているが、現在計画中の推進技術では不可能である。新しい、もっと進んだ推進技術がそれまでに開発される必要がある。

土星 外惑星を調査する惑星学計画

と呼ばれるものが、一九七七年のマリナー木星・土星号からスタートする。木星に接近したマリナーはそのまま木星の引力ではずみをつけると土星に向かう。これで土星と土星の環やタイタン衛星の近接写真が得られる。七九年には軽い大気圏突入型探査機を土星に送り、大気をさぐる。八五年にはプラズマ・ロケットを使って土星のぐるりを回る衛星が飛ばせるようになる。

惑星の大気を調べるだけの探査機なら、比較的軽い飛行体ですむので、惑星着陸機にくらべるとずっと楽である。土星や天王星の大気は地球の大気の約一〇〇分の一の気圧しかない。この大気の中を飛ばすのは、それほどむずかしい。土星と天王星の大気を調べる探査機は同一設計のものでいいことがわかり、パイオニア10号、11号の改良型が使われる。パイオニア土星探査機、パイオニア土星・天王星探査機と呼ばれる。

天王星 一九七九年に、七七年に打ち上げるマリナー木星・土星探査機とほぼ同じ探査機を送って、天王星のクローズアップ写真をとる。このときは木星の引力を利用して天王星まで飛行させる。天王星に接近したあと、天王星の引力ではずみをつけば海王星まで行くことができるが、海王星に到着

する前に探査機の寿命が尽きてしまうので、このときはまだ海王星までは行けない。このときの飛行では木星のそばを通るが、木星の観測はしない。

天王星に探査機を送るチャンスとしては、木星の引力を利用する場合は一九七九年と一九八〇年、土星の引力を利用するには一九八〇年代の前半ならいつでもいい。一九八〇年にはパイオニア11号を改良した探査機が打ち上げられ、天王星の大気圏に突入する。

海王星 どんな探査機になるか未定だが、一九八六年までに海王星探査機が発射される。多分近接型となるだろう。木星か土星の引力を利用して天王星に近づき、天王星の引力ではずみをつけられ、プラズマ・ロケットもついているので、海王星までたどり着ける。

すい星と小惑星 これらは生まれてからずっと変質せず、生成時の原始物質のままの姿を保っていると思像されるので、「太陽のこどもたち」がどのような経過を経てきたかを知るよい手がかりとみられている。そこでこれらの小天体と探査機をランデブーさせ、できればそのカケラを地球に持ち帰ろうという計画である。

しかしこれら小天体はサイズが小さく、正確な位置を推定することすらむ

ずかしく、どういう航法で飛ばせば探査機を接近させることができるかはつきりしない。うまく飛ばせることができたとしても、遭遇時間が非常に短い。観測できる時間もわずかしかな。木星のように大きければかなり遠くからでも写真がとれるし、近づきながら何日間も何時間も観測できるが、とくに小惑星ではそうはいかない。木星や土星のように大きな引力をもつものが近くにあればその引力を利用して遠くまで飛ばすことができるが、すい星や小惑星にはそうした便利なものが近くにない。化学推進剤だけでこれらの天体とランデブーするには、ロケットの燃料をいすぎるので不可能。

しかしプラズマ・ロケットが使えるならば、こうした困難は除かれ、多くのすい星や小惑星の探査が可能になる。そこで一九八〇年地球に接近するエンケすい星に、プラズマ・ロケットつきのすい星科学探査機を接近させ、テストをすることになった。

エンケすい星と探査機のランデブーは二つの方式が考えられている。打ち上げはケネディ宇宙センターからで、ともに一九八〇年八月二十八日。一つは探査機の重さが三三五キログラムで一月二〇日に、すい星が最も輝きをみせるころ近くを通過する。このときの探査機は速度は秒速一八・三キロメートルで、すい星の頭部か尾部のどちら

かを通過する。このさいできれば、すい星の成分の一部をかすめ取って、二年後に地球に持ち返らせる。もう一つの方法は、探査機の重さは二二五キログラムで、すい星活動末期の二月六日にランデブーする。このときの探査機のスピードは秒速九・七キロメートルで、やはり頭部か尾部を通り抜ける。いずれの場合も、打ち上げロケットはタイタン・セントールにプラズマ・ロケットをつけたものが使われる。

どちらの方法にしても、頭か尾のどちらか一方しか観測できない。頭と尾では成分がちがうし、出来れば両方を観察したい。タイタン・セントール・ロケットの打ち上げ能力にも余裕があるところから、一個のロケットで二個の探査機を打ち上げ、それぞれ頭部と尾部を探査することも考えられている。アメリカは一発のミサイルで幾つもの核弾頭を打ち上げそれぞれ違った目標に命中させるという曲芸技術を既に持っている。二個の探査機を同時に操るくらいのことではできらう。

金がかかりすぎるという予算上の理由でこうした実験ができない場合も考えられる。その時は一機または二機の探査機をエンケすい星目がけて弾道飛行させる。勿論一九八〇年に実施されるが一機しか打ち上げられない場合は探査機は尾部を通過することになる。

一九八四年はエンケすい星とのラン

デブーの本番を迎える。このときは地球とすい星の位置関係が観測に好都合で、探査機とすい星は並んでランデブー飛行できる。このランデブーを成功させるには、探査機の姿勢を精密にコントロールしなければならぬ。

有名なハレーすい星が一九八六年に近日点を通過する。なんとか探査機を送ってランデブーしたいところだが、これまでに開発されたロケットやいま開発中のプラズマ・ロケットでは力不足でランデブーできない。うんと強力なロケットで打ち上げ、秒速五五キロという猛スピードが出れば、その弾道飛行ですい星の中を突切ることができ

●火星は地球の過去の姿？

こうした宇宙探査のなかで、アメリカの科学者が最も力を入れたがっているのは火星だ。火星にはむかし運河があるといわれた。規則的に並んだ運河のように見えた筋は、一九六九年に火星に接近したマリナー7号によって、月にあるようなクレーターの列だとわかった。運河のないことがはっきりして、火星人がいる望みも消えた。メタンやアンモニアはあるらしく、これが生物から出来たものだと思えば、なか生物はいるかもしれないが、それほど高等なものがあるとは思えない。

る。一九八五年にハレーすい星近接探査機を、なんとか打ち上げようとしている。

翌八六年には小惑星に探査機を送る。この探査機で小惑星とランデブー飛行する予定だが、その前のすい星目がけて発射される探査機で、すい星の観測を終えたあと小惑星への接近テストもすることになっており、いきなり本番でも成功の見込みは大きい。ひき続き一九九〇年代に小惑星に探査機を着陸させ、そのかけらを地球に持ち帰る計画がある。地球に落ちてくるイン石は小惑星のかけらだという説が強いが、事実かどうかはつきりする。

「火星人がいないことを知りながら、科学者はなぜ火星の生物に執着するのだろうか。地球の遠い過去か未来のどちらかを、そこに見ることが出来るからである。科学者は全く同じ理由で金星の素顔にも興味を持っている。

「地球はいずれ、火星か金星のどちらかになる」と学者はいっている。

地球から見ればどちらもキラキラ光るただの星だが、火星と金星の表面は月とスポンジほどの違いがある。

おおざっぱにいうと火星の大気は地球の一〇〇分の一。主成分は炭酸ガス

で、ほかに一酸化炭素と酸素、オゾン、水蒸気などがある。大気が薄く、海がないため、地球のような気温調節ができない。赤道では日中三〇度くらいになった温度も、夜は氷点下一〇〇度近くに冷える。

ソ連の探査機によると、金星の地上気圧は九〇気圧だった。金星の重力は地球の重力の〇・九倍だから、地球へ持ってくれば一〇〇気圧の大気になる。地球のざっと一〇〇倍だ。主成分は炭酸ガスだが、窒素や酸素、水蒸気もある。火星にはほとんど雲はないが、金星は全体が厚い雲におおわれている。雲の頂上では氷点下三〇度だが地表は分厚い雲におおわれて保温がよく、雲で日射はさえぎられても三〇〇度の焦熱世界。

地球はいつの日か、この金星のようになるかもしれない。エネルギーの消費が進んで地球が暖まると海水が蒸発し、溶けこんでいた炭酸ガスが大気中に放出されてくる。海洋中には大気中の六〇倍の炭酸ガスが含まれている。岩石中には炭酸カルシウムなどのかたちで、海水中の一〇〇〇倍もの炭酸化合物がある。これがすべて炭酸ガスになったとすると、炭酸ガスだけで三〇気圧になる。つまり、金星のような状態になる。金星に生物がいらないとすると、地球の生物もいつかは消滅するのだろうか。

金星が地球の未来の姿だとすると、火星は過去になる。大気の量ばかりでなく、太陽からの距離も、地球はちょうど火星と金星の中間にある。火星にも金星にも生物がいないとすると、なぜ地球にだけ生命があるのだろうか。その秘密は雨にある。地球にだけ雨が降る。

地球を宇宙からながめると、半分は雲でおおわれ、半分が晴れている。雨が降って、雲をつくっている水分が地上に落ちてしまいうから、晴れたところができる。地球の雲は雨を降りやすくする性質があるので、雨になりやすい。金星や火星の雲は冷たすぎて全部こおってしまい、雨にならない。

金星は雨が降らないので、雲にすっぽりおおわれる。火星は雨が降るには水分が不足している。

雨が降って海に溜り、それが蒸発して雨に変わる循環が、地球の温度を一定に保ち生命を維持してくれている。生命の根源は雨にあるともいえる。

ところが火星にも、むかし川が流れたらしいあとがある。火星は円軌道と、だ円軌道の組み合わせて運動する。何万年かすると軌道がめぐって、暖かい季節がくる。過去にもそのような時代があって雨が降り、川ができたのだらう。このつぎ火星に雨が降るころ、火星人がいるかもしれない。

アポロ計画の生みの親、フォン・ブ

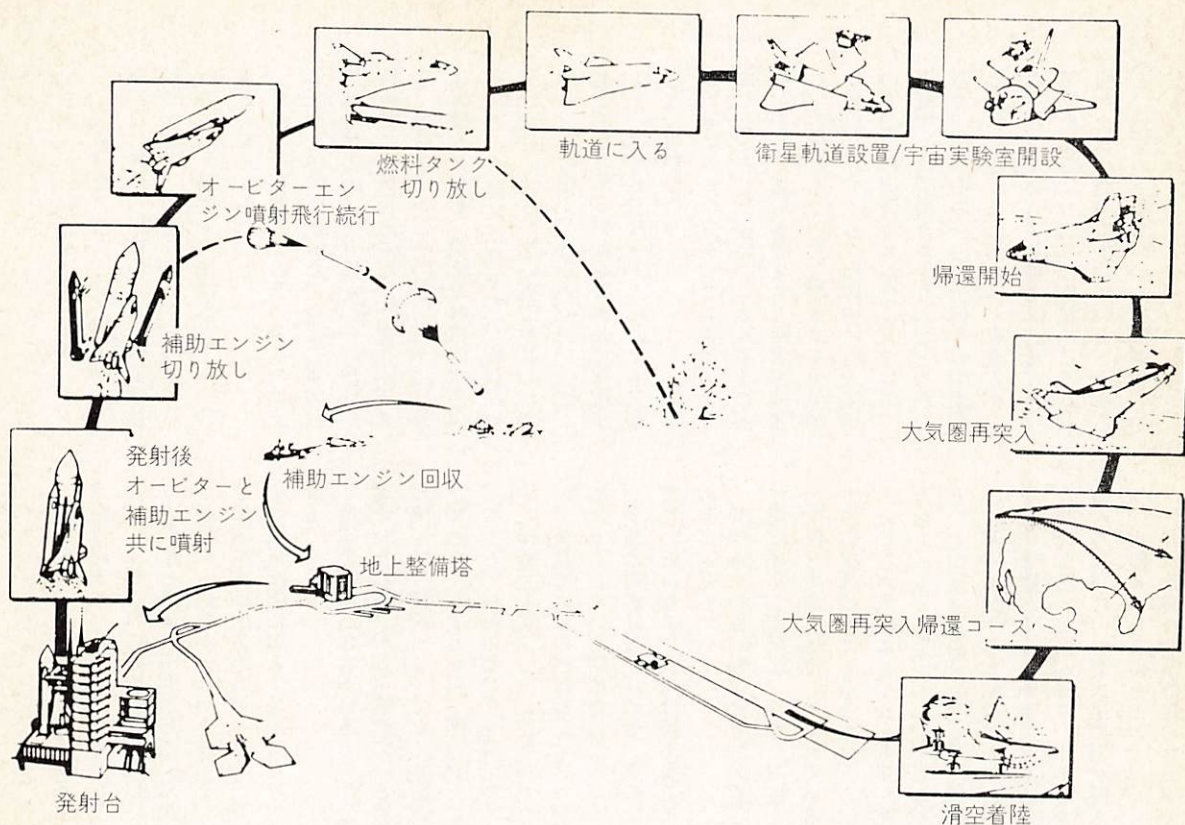
ラウン博士は、なんとかして人間を火星に送りこみたいと思っていた。ブラウン博士が若いころ、V2号というロケットを発明した動機は、火星に着陸するためだった。ドイツからロンドンを攻撃するのにV2号はたいへんな威力を発揮したがブラウン博士の望みは、宇宙旅行だった。その望みが戦後アメリカに移住して、月に人間を着陸させるアポロ計画となった。火星人の夢は、この天才にも強く焼きついたのだらう。

これまでの宇宙探査は、ロケットで探査機を打ち上げる方法だった。これからのこの方法は続くが、一九七九年にはスペース・シャトル（宇宙連絡船）が登場、定期バスのように地上と数一〇〇キロメートル上空の宇宙との間を往復する。この宇宙連絡船は宇宙飛行士のように特別の訓練を受けなくても、だれでも乗れる。科学者が乗って宇宙に出かけ、直接自分の目で観測できる。宇宙はゴミも雲もないので、太陽や星が、地上から眺めるのとくらべようもなくはつきり見える。人工衛星もロケットで打ち上げるより、シャトルで運ぶ方がずっと安上がりで、正確な位置に配置できるようになる。故障すれば修理もできるし、部品も簡単に取り替えてできる。スペース・シャトルの実用によって宇宙科学はますます進歩する。

スペース・シャトルはジャンボ・ジェット機のような形をしたオービターが、二本のロケット・エンジンと燃料タンクにまたがったようなものである。打ち上げられると、高度四〇キロでロケット・エンジンを切り離し、数一〇〇キロ上空まであがる。地球を回る軌道で一〜四週間飛び続けると地上に戻ってくる。飛行機のように着陸するので、一〇〇回くらい何度もくり返し使える。だから使い捨てのロケットより安上がり。一回の宇宙旅行費用は約三〇億円で、月まで往復したアポロ計画に比べると四〇分の一。

アポロ計画が終わってケネディ宇宙センターはすっかりさびれたが、今度はスペース・シャトルの基地として生まれ変わる。いま長さ四一五〇メートルのスペース・シャトル用の滑走路の建設が進み再び活気をみせている。オービターには機長、操縦士のほか四人乗れる。宇宙で出来るいろんな実験設備を乗せることができる。NASAがねらっているのは、宇宙にある無重力状態と真空を利用して、地上では出来ないような新しいものを作ることである。重力のない宇宙では、どんなに重いものでも軽いものでも目方は変わらない。鉄とアルミでも鉄とガラスでも溶かせば均一にまぜ合わせることが出来る。全く性質が違ふ材料をまぜ合わせることにによって思いがけないす

スペース・シャトル飛行計画



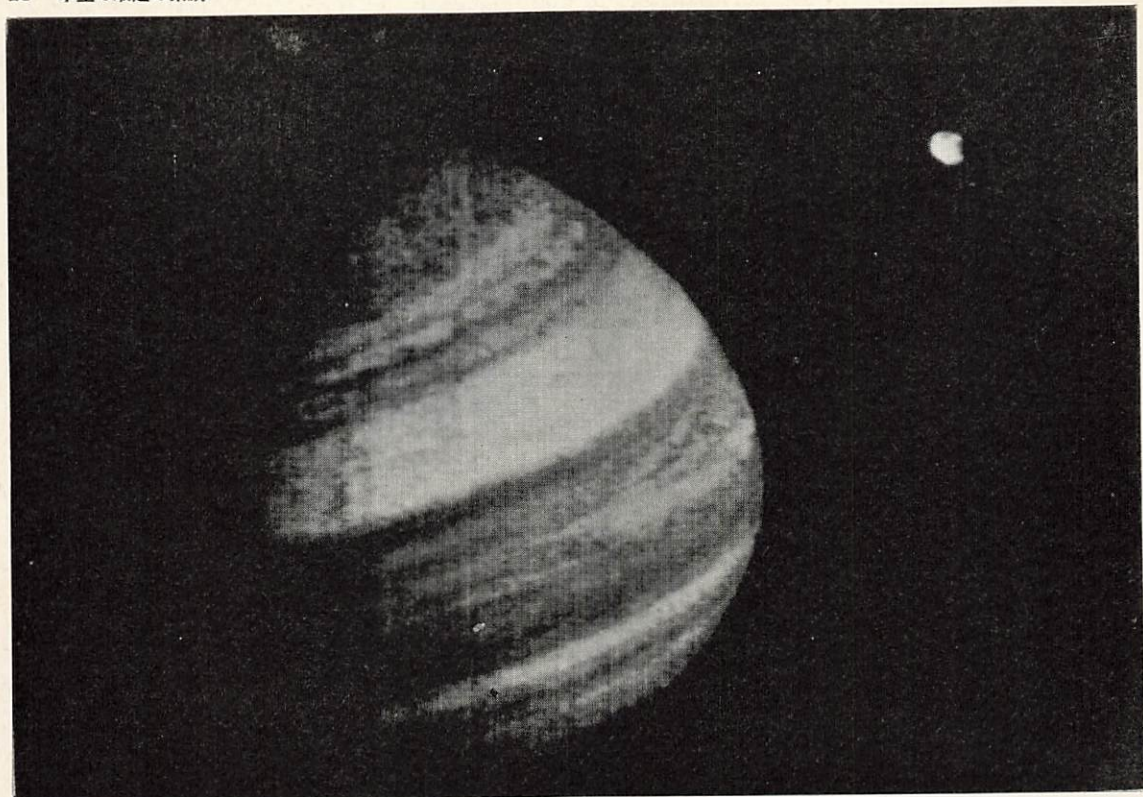
ばらしいものが出来る可能性がある。
 地上ではつくり出ることが出来ないような高価なレンズ、半導体、医薬品を生産する宇宙工場が一九九〇年までに実用化する予定だが、スペース・シャトルで宇宙天文台を作る計画もある。
 宇宙にはエックス星などがあって、地上の常識ではどう考えても理解できないほど強力なエネルギーを出す天体がある。地上では空気や雲にじゃまされてよく観測できない。雑音のない宇宙天文台でこのナゾをとくことができる。人類は新しいエネルギー源を手に入れることができる。
 宇宙人がどこかに存在するならば、必ず電波を出しているにちがいないというわけで、アメリカの科学者はオズマ計画を立ててアンテナを宇宙に向けてたが、宇宙からの便りはなかった。しかし雑音のない宇宙に受信所をつくったら、あるいは宇宙人の便りをキャッチできるかもしれない。
 干ばつが続いたり集中豪雨で畑が荒れたり、異常気象だといわれるが、地球上のお天気は、太陽活動が支配しているといわれる。太陽で黒点がたくさんできると、いったい地球にどんな変化が起きるのか、宇宙に直接出かけて行って太陽からどんな物質がどのくらい飛んできるか調べ、そのあと地球にどんな変化が起きたか、宇宙から見おろせば、手っ取り早くわかるだろう。

大地震が起きるとき発光現象が起きて、ぼんやり明るくなるといわれるが、はっきり見た人は少なく、なぜ光が出るのかだれも知らない。宇宙からいつも地球を見張っていれば、そのとき地球でどんな変化があったか詳しくキャッチすることができるだろう。
 米空軍の数年間にわたる調査で、空飛ぶ円盤(UFO)は実在しないという結論が出たがこれまでUFOだといわれてきたものが本当はなんであつたか、まだナゾ解きが終わったわけではない。厚い大気とゴミと電波雑音に包まれた地球から眺めただけでは、真相はつかめない。

宇宙探査機も、なにか変わった情報をつかむかもしれない。しかし人間が宇宙に滞在し、スペース・シャトルから直接眺めれば、もっと新しい発見があるにちがいない。

地球のように生命が住める星は、広い宇宙には何万もあるといわれる。地上から眺めて「地球はひとりぼっち」だといってみても、宇宙に人間が出かけてみれば、「ナゾの信号」だらけかもしれない。大気のベールに包まれた地上から空を仰ぐのは、海の底から空を眺めるのと大差ない。

スペース・シャトルを利用して宇宙ステーションを建設し、すい星や小惑星のかげらを持ち帰るころには、イロカのことばが役に立つかもしれない。



●木星の最近の素顔

●12月2日にバイオニア11号からカリフォルニア州、マウンテンビュー、NASAのエームズ・リサーチセンターに電送された写真。左側に木星、右上には木星の4つの大きな衛星の一つであるガニメデが写っている。この写真はバイオニア11号が木星から約745,105キロメートルの位置にあるときに撮られた。写真の下側が北を示す。(ワイド・ワールド・フォトス提供)

日本超科学会雑誌

超科学

第3号 特集「霊元素アトム」 送料共500円

●発見された不老長寿の霊葉・四次元物質 橋本 健

遂に日本にも学会誕生!

今なら入会金1000円、年会費3000円で
誰でも入会できます。

●会員は下記の品1割引!

超心理学実験用機械器具

- 四次元波受信機(4Dメーター) サボテンの歌が聞け、ウン
定価39,000円 送料1,000円 発見機としても使用できます
- 超心理学実験機(念力測定器・サイメーター)
定価15,000円 送料1,000円 (小型)9,500円 送料500円
- ESPカード 定価500円 送料55円
- 魔法の振子 定価400円 送料55円

〒248 鎌倉市小町1-15-17 TEL0467(25)3035
(橋本電子研究所 所長・橋本 健)

日本超科学会

宇宙哲学

ジョージ・アダムスキー著
宇宙人から伝えられたコスミック哲学

480円

ソ連圏の四次元科学

上・下巻各一五〇円
超能力の研究に八十億円の国家予算を投
じて宇宙開発と軍事に利用している

超能力の秘密

ジナ・サーミナラ 十菱廣訳
■異性間、異人種間の転生 ■瞑想と宝石
による超能力開発法 ■内分秘腺と超能力

950円

転生の秘密

ジナ・サーミナラ 多賀瑛訳
二五〇件の転生例を心理学者が分析 ■不
倫・離婚と前生 ■職業能力の前生の基礎

950円

ノストラダムス大予言 原典

おまたせしました! 残存全九六八予言詩仏和对訳

A5判
340頁
上製本
2400円

たま出版

162 東京都新宿区納戸町33
TEL(260)4367 振替東京94804



糖尿病はスイ臓がウイルス感染して生じる

糖尿病はなぜ起きるのか。これまで多くの医学者を悩ませてきたナゾだったが、昨年9月7日、東京・内幸町の帝国ホテルで開かれた国際微生物学連合会議のシンポジウムで、米国立衛生研究所(NIH)のノトキンス博士は「スイ臓がウイルス感染すると糖尿病になることがネズミの実験でわかった」と発表し注目された。

血液中の糖分はスイ臓中のランゲンハンス氏島のベータ細胞

胞の出すインシュリンが分泌されないとい血中の糖分が増え糖尿病になることはわかっていたが何の原因でインシュリンの分泌が押さえられるのかが不明だった。

同博士はネズミにEMCウイルスの一種を注射するとベータ細胞に集まってこれを破壊しインシュリン分泌をとめてしまうことを発見した。ところが全部のネズミが糖尿病になるのではなく発病するネズミとそうでないネズミのあることがわかった。それは遺伝差によるものとみられる。

国立予防衛生研究所の甲野礼作ウイルス中央検査部長は「EMCウイルスとよく似たコクサツキー・ウイルスが引き金となり糖尿病になることは類推されるので、ノトキンス博士の発表は、それを実験的に裏付けたものといえる」と語っている。

帯電粒子帯が地球をとりまいている

●マックス・プランク研発表

西ドイツの宇宙科学者は昨年10月23日、電気を帯びた粒子帯が地球をとりまいていると、発

表した。

ミニッツヒに本部を置く宇宙物理学の研究所マックス・プランク研究所は、その発見が生命に決定的な影響を与えている地球との相互作用を理解する上で役立つと述べている。

科学者たちは特別に開発された無人宇宙船に取りつけられたプラズマ分析装置によって集められたデータを調べているうちにこの新しい粒子帯に気付いたものの。

その粒子帯は1万から2万キロメートルの厚さがあるといわれ、ミニッツヒの物理学者たちは、太陽に向かった側の地球の磁場が太陽風(ソーラ・ウインド)と呼ばれている太陽から放射されるプラズマの流れと化合すると信じている。

このようにして作られた電気を帯びた粒子は地球の暗い側に付着し、そしてその気流の流れは地球の磁場のほとんどを取り囲むといっている。これらのデータからバン・アレン帯と地球上の地極光帯の起源に対して新しい光を投げかけるかもしれないと考えている。

ヘルムート博士の同僚でこの電気を帯びた粒子帯を発見した

科学者は「これは「プラズマ・マントル」と名づけられるだろう」と話している。この粒子帯は地球から100万200万キロ、バン・アレン帯から5万キロ離れた位置にある。

スペース・シャトル計画に米ソが協力

●NASAの行政官が語る

NASAの行政官ジェームス・C・フレッチャー博士は昨年の10月14日、米ソが協力して宇宙工場計画に参加する予定であると発表した。これはまだ計画の段階だが宇宙工場計画は、宇宙環境を生かしたスペース・ステーションの中で新しい生物学、電氣的、冶金的な科学技術の発展を目的としている。

東京・赤坂見附の東京アメリカンセンターでの記者会見でフレッチャー博士は米国とソ連がスペース・シャトル計画を協同して行う可能性があると述べた。

スペース・シャトルは宇宙工場計画の序幕であるスペース・プロセッシング・プログラムや宇宙工場計画に必要な人員や材料を積んで地球と宇宙船を維持

する計画の一つである。

宇宙における工場計画には病気をコントロールするための生物学的材料を分類すること、交流電気を直流電気に切り変えるための大きな水晶を研究すること、地球上で不可能な新しい合金を製造することなどがある。

NASAは一九七九年から一九九一年にかけて一週間に一度かそれ以上の割合でスペース・シャトルを飛ばす予定。

同博士によると日本もこの宇宙工場計画に積極的に参加し、宇宙開発局で研究されている原子核ロケットの打ち上げや米国の大気圏気象衛星や通信衛星、放送衛星の分野をにやっているといる。

ビタミンCの大量使用は有害?

ビタミンCの大量服用はかえって害があることを昨年九月中旬コロンビア大学の人類栄養研究所のマイロン・ウイニック博士が語った。ことに国立科学学会がこれを推奨することは好ましくない。それは、妊婦や胎児に対して知識が欠除した状態では有害である、としている。

ただビタミンCは風邪に対しての抵抗力をつけるがそれも1日100〜200ミリグラムまでであり風邪に対して抵抗力をつけるとビタミンCの大量服用を推奨したノーベル賞受賞者ライナス・ポーキング博士の1日1000〜1万ミリグラム服用するというのは好ましくない、と言っている。

というのはいまのところビタミンCが有効であるというはっきりとした証拠が出てないからだと述べている。

スペース・シャトル 計画へ第一歩

一九七九年に予定されている米国のスペース・シャトルの最初のテスト飛行がカリフォルニア州のエドワード空軍基地にある砂漠で行われる予定だ。

これは一九七五年6月に予定されている米ソ協力しての宇宙接合のち米宇宙計画の次のステップとして使用するもの。

謎につつまれている木星 らの電波

木星から発信されている強い

電波信号は知性体から送信されている証拠はない——コロラド大学の天体物理学者ジェームズ・ウォーヴィック氏は述べている。

「ただ私としてはそれが知性体からの発信であってほしいと願っている」とつけ加えている。が、それは依然として謎のままである。

日本のアマチュア天文 者が新星発見

大分県の図書館員クワノ・ヨシユキさん(43)は昨年10月に、射手座の中に新しい星を発見した。

クワノさんはアマチュア天体観測家で、この発見をスミソニアン天文台が確認した。その名は一時的だが「射手座の新しい星No 1974」と命名された。

作物に影響ある太陽黒点

太陽黒点は地球上の作物に影響を与えているかもしれない——と、ロンドン西部スローのアブルトン研究所の雑誌「ネーチャー」で述べている。

その記事は「世界の小麦生産

高が一九五八年と一九六八年に上昇している。これは大体太陽黒点の周期と一致しているが、断定はできない。太陽黒点の影響の大きいところは南半球のアルゼンチン、オーストラリア、南アフリカである」としている。

血圧降下剤レセルピンは ガンのもと?

英国の医学雑誌「ランセツト」は血圧降下剤レセルピンを服用すると乳ガンなどになるといっている。

これは米厚生教育省が昨年9月20日発表したもので、60歳以上の女性が通常の人と比べて3倍の発生率を示している。エドワード厚生教育次官補は「レセルピンは効果が確立されていない薬品だから、委員会の結論が出るまで、その服用の変更を勧告する」といっている。

2万年前の珍蝶発見

●熊本の厚生林で

2万年前の第3紀の生き残りのチョウが熊本県の厚生林で生息していた。これまで分布して

いるのは中国の揚子江流域、台湾北部の山岳地帯で確認されているが、わが国では初めて。

この新種は「ゴイシツバメシジミ」で昨年9月28日、岩手大教養部で開かれた日本昆虫学会の第34回大会で九州大学の白水隆教授から発表されたもので、発見は一昨年8月上旬、熊本県球磨郡水上村の市房山中腹の厚生林で偶然捕獲された。

ゴイシツバメシジミの成虫は開張(はねを広げた大きさ)約2センチ、裏には白地に基石状の黒い斑点がある。熊本県は同9月21日、県の天然記念物に準指定した。

地球の自転速度が 速くなっている

東京天文台の観測によると地球の自転時間が一日あたり〇・5ミリ秒(一万分の5秒)縮まっていることがわかった。専門家の間では気象的要素が影響しているとの見方がある。

東京天文台の観測は時刻観測法を使い常時、原子時間と緯度経度を精密に測る写真天頂筒で測定を行い、地球の自転速度をつかむもの。

地球の自転に変動がみられたのは一昨年の12月からで、それまでと比較して1日にして2.6ミリまで遅れていた。

こんどの変動について同天文台では気象庁の協力や英国のグリニッジ天文台、米国の海軍天文台からデータを取り寄せるなどして北半球の気象状況などを調べたが、いまのところ気象状況に変動はみられないという。

そこで同天文台の天文時部は、「今回は南半球の気象的原因がありそうだ」とみている。南半球の気象の原因は、アルゼンチン、オーストラリア、ブラジルなどの大雨、東南アジア、西アフリカの干ばつ、南半球の気象変化など。

しかし、まだ地球自転と気象の関係を表付けるにはあと1年くらいかかるという。

世界で4番目の シュミット大望遠鏡完成

●東大の天文台が長野県に

世界で4番目の大口径レンズ10センチのシュミット望遠鏡が東大・東京天文台木曾観測所(高瀬文志郎所長)が長野県木曾郡三岳村の春山(1100メ

ートル) 頂上に総工費約7億円で完成し、昨年の10月1日、開所式と試験観測を行った。

筒の長さ8.8メートル、重さ60トンで高さ17.3メートル、直径16.2メートル。これで彗星や星雲、銀河系、星の誕生、死滅など星の進化もキャッチする。

この木曽郡の春山は空の明るさ、透明度が良く20等星まで観測できるといふ好適地である。

「食い合わせ」でガンの原因物質が生成

発ガン性物質のメチルニトロソ尿素が、魚貝類と野菜の漬けものの食い合わせによって胃の中で簡単に生成される——国立予防研究所食品衛生部の俣野景典主任研究官(農博)は10月6日、鳥取大学で開かれた日本栄養・食糧学会第7回中、四国支部大会で発表した。ウサギを使った動物実験で確認後、試験管のなかに人間の胃と同じ条件をつくり試みたところ、胃液の酸性が強い空腹時ほど多量のメチルニトロソ尿素が生成されるといふ。

俣野主任研究官は魚貝類中に含まれているメチルグアニジン

と漬けものから亜硝酸ナトリウムを選び出し人間に最も近い胃を持つといわれるウサギでの実験の結果、メチルニトロソ尿素になることを発見し、100%胃ガンのなっていることが判明したというもの。

木星に13番目の「月」

木星の第13番目の「月」といわれる直径8キロ以内の小さな衛星を発見、昨年9月21日、パサデナのヘイル天文台が発表した。

同天文台のチャールス・コワール研究助手(33)が口径10インチのシュミット望遠鏡で同9月10、11、12の3日間撮影した写真に写っていたが、これは90%確実だという。そして、この「月」はもとは、火星と木星の間の軌道の散らばる小惑星だったのが、木星の方に近づき、強力な引力にとらえられたものとみている。

摂氏1億度のプラズマに成功

●テキサス大学で
米テキサス大学核融合研究セ

ンター所長のドラモンド博士が10月1日発表したところ、同センターでこのほど核融合動力炉の開発の過程で画期的な意味を持つ摂氏1億度以上の高温プラズマをつくり出す実験に成功した。

しかしドラモンド博士は、この温度は核融合に必要な最低理論値の2倍に当たるが、持続時間が1秒の5000分の1という短時間のため、核融合に必要な1秒間の高温持続をつくり出すには、まだまだ時間がかかりそうだ。

桜島、大爆発は確実

●京大観測所が発表

鹿児島県の桜島火山は昭和三〇年以来、小爆発を繰り返しているが、京都大学桜島火山観測所の観測で、再び溶岩を流出する大噴火に向かっていくことが確実となった。

その根拠として錦江湾を形成する始良カルデラが、北側に年平均16ミリにも達しており、噴火がそう遠くないことを暗示していること、マグマが地下深く(10キロ以深)あるときはA型地震、上昇して火口に近づくと

B型地震が発生するのだが、一昨年8月以来、B型なしで爆発したり、A型なしにB型がきたりという異常さを示していること、震源が全島に広がってきたことなどがあげられている。

加茂助教授はこうした現象について昭和三〇年来的活動で地下の溶岩が通りやすい状態になり、溶岩をたやすく噴きあげる大噴火の条件が整ったとも解釈できる、としている。

チリで石器時代人(?)のミイラ発見

サンチアゴのエル・メルクリオ紙が昨年10月22日報じたところによると、チリ北部で石器時代人とみられるサルのような人間2人がミイラで発見された。

発見者のジェームズ・パーキンソン氏はサンチアゴ北方1840キロにあるイキケで「ミイラは非常に毛深く、歯が発達している。衣服を着けていること

と、粗製の石器が近くから発見されたことから人間に間違いなく、高さが14センチ、胸センチと高い」と語っている。

未来のタンパク源にスピルリナが有望

未来のタンパク源として有望視される、藻の一種「スピルリナ」が今、世界の注目をあびている。

一九六二年のある日、フランスの国立石油研究所のメンバーG・クレモン女史が、テレビの記録映画でチャドの原住民の食べている「ダイ」という料理を知ったのがきっかけ。「ダイ」はチャド湖からとったスピルリナを乾かして作ったもので、調べたところ体の60~70%の高タンパクであり「必須アミノ酸」(合成できない自然のアミノ酸)のほか20%の糖分を含み、ビタミン類も豊富だ。そのうえ大きさがクロレラの250倍もあって収穫しやすい、細胞壁が薄く消化が良いことなど、食糧化へのメリットの高い植物といえる。

一九七〇年8月、ワシントンで開かれた第3回世界食糧専門家会議の席上でも成分が報告されFAO(国連食糧農業機関)もアミノ酸基準に合うものとして承認している。

その後、フランス、日本などが実用化に動いている。

ブラック・ホール 解明に一役

●X線観測衛星打ち上げ

イタリアの科学者は昨年10月15日宇宙X線を観測する英国のエアリアル5号人工衛星を打ち上げ軌道に乗せた。

同衛星は重さ13キログラムでケニア海岸沖にあるイタリアのサンマルコ発射台の米国のスカウト・ロケットで打ち上げられた。観測装置が「はくちよう座X-1」のブラック・ホールを明らかにすると期待されている。

安全で確実な避妊法発見

●インドのタルワー教授

全インド医学研究所の医師団は、ワクチン注射による女性の避妊法に見るべき効果を上げ、昨年10月19日ニューデリーで開かれた「避妊技術に関する国際シンポジウム」に報告、注目を集めた。

G・P・タルワー教授ら7人の医師団によると、このワクチンはHCG（じゅう毛性性セン

刺激ホルモン）という女性ホルモンから抽出され、これを女性に注射すると受精を拒絶できるという。8カ月前、3人のインド女性に注射すると3人とも体内に抗体が出来、完全に妊娠から免疫状態になり、副作用もなく、月経も正常だった。この3人の女性は2週間間隔で4回のワクチンを注射したが、6カ月後も体内の抗体は増え続けた。

だが、天然痘と同様に一定期間後に再注射しなければ免疫性はなくなるらしい。

山男たちに「リュック病」

昭和大学の研究グループが、茨城県茨城町で開かれた日本体力医学総会で「リュックサックを背負って手がしびれ、長期の治療を要する若い連中が増えている」と警告している。

発表したのは昭和大医学部整形外科の藤巻悦夫助教授らで、同外科医に「リュックを背負っているうちにしびれて動かなくなった」と訴えてくる患者が目立っていることから詳しく調べたところ、いずれもリュックのヒモが食い込み肩の筋肉を動かす腋窩（えきか）神経、物をつ

かむ正中神経に障害を起していることが明らかになった。

ユリ・ゲラーの超能力は 真か偽か

●科学者達がケンケンガクガク

イギリスの科学雑誌「ニュー・サイエンティスト」の昨年10月17日号にイスラエルの青年、ユリ・ゲラーは実はただの奇術師に過ぎず、そのテレパシーの秘密は一本の歯に埋めこめるほどの「超小型無線受信機」であるとの論文が出ている。論文は、

「ユリ・ゲラーと科学」と題され、編集部の序文を入ると15ページにも及ぶ長大なもの。執筆者は、「ユリ・ゲラー現象調査委員会」のメンバーである物理学者ジョーゼフ・ハンロン博士で、要旨はスプーンやカギの念力による折り曲げは、ゲラー本人が目まぐるしく動き回って観衆の関心をそらし、そのすきに物理的な力を加えて折り曲げたものを適当な時期に念力で曲がったように披露する奇術師のテクニクによっており、スターンフォード研究所の調査でもこれらの現象を認めていないし小型無線装置を利用している疑い

が濃厚だときめつけている。

ハンロン博士はその根拠として「実験前に身体検査をさせるとき、全身レントゲンをとらせないことがそのことを裏付けている」としている。この装置は別室でいろいろな図柄を描いている人々の発言をゲラーの通報者が聞いて、それをゲラーの小型ラジオに通報しているというもの。

これに対する反論として10月30日同じイギリスで彼をバック・アップする2人の一般人と科学者まで現れた。

ロンドン大学の数学の教授のジョーン・ティラー氏は「ゲラーは実験室で金属にわずか触れただけでそれを曲げた。それは驚くべき出来事だ。また、ゲラーが集中したとき生ずる衝撃をガイガー計数管で測ったとしたら彼は死の瀬戸際まできているだろう。もしそれが放射線で生じているとするならばだが」といっている。

また、物理学教授のジョーン・ヘスラット教授もゲラーを支持する一人である。

彼自身も、超小型ラジオを使っていることについて「ばかげたことだ」と否定している。

銀河の中にアルコール

銀河の中心近くにアルコールが存在することが米、英などの科学者の共同研究班の観測の結果、確認された。アリゾナ州のキット・ピークの米国立電波天文台のバトリック・パーマー博士が昨年10月26日明らかにしたところによると、同天文台の電波望遠鏡に新設備を取りつけて観測した結果、銀河近くの水素雲の中にエチルアルコールが自然の状態で存在するのを発見した。同博士による「宇宙のアルコールは地上で酒類を作る時に使われる発酵法とは全く異なった複雑な化学的過程によって作られる」と述べている。

塩ビモノマーで腫瘍発生

職業病の世界的権威であるイタリアのボローニャ大学のマルトーニ教授は昨年の10月28日、ジュネーブで開かれた国際化学産業労働者会議でプラスチックの原料として広く用いられている塩化ビニルモノマー（単体）をネズミに投与したところ、脳、乳房、肝臓、肺に腫瘍（ガン）ができたを発表した。

UFO情報

正体不明の光る物体が連夜出現

●広島県の庄原市、目撃者続出

ナゾの未確認飛行物体(UFO)が飛来? 庄原市に8月末から夜空を飛ぶ正体不明の光る物体が目撃者が相次いでいる。晴れた夜は周辺の高い山などに「UFO」を見ようと高校生らファンが詰めかけ、観察している。

最初に目撃したのは一九七四年八月二十八日夜同市新庄町、会社員常数正治さん(24)。自宅庭でオレンジ色の光る物体を目撃、点滅しながら約5分間、東の空から西空へ移動して消えた。翌29日夜には姉の同市三門市町、高校職員田辺スミさん(42)も駆けつけ、8時5分から約5分間目撃。「物体は途中で止まったり、急に降下して移動をした」という。

目撃者の話を総合すると物体は金星より少し大きく明るい。円形で回転するよう光を点滅しスピードは、流星より速い。この怪物は「ヒバゴン」に続き新たなロマンになっているが、さて――。

(一九七四年九月十五日付、中国新聞)

光跡をカメラでとらえる

●庄原市のUFO

8月末から庄原市や比婆郡西城町、甲奴郡総領町の夜空で目撃者が相次いでいる。「ナゾの未確認飛行物体(UFO)」が、一九七四年九月十六日夜も庄原市峰田町の青岳山(標高500メートル)で観測され、その光跡をカメラに撮影した。

現れたのは、同日午後8時15分頃、頂上から見て南側、山の屋根の上空に突然現れ、赤に近いオレンジ色の光を点滅させながら東へ約5分間移動したあとと停止。しばらく夜空に浮かんで消えた。間もなく消えた場所から少し南へ移動しながら消えた。この間約2分間。

山頂にはUFOを見ようと庄原市や総領町のファンが車で駆けつけ「見えた」と歓声をあげてUFOを見つめていた。同夜見えたUFOはこれまで目撃されたものより少し光が弱かったが、星や飛行機とは光度、光色が違い、目撃者らは、「UFOに間違いない」と話している。

(一九七四年九月十八日付、中国新聞)

円盤が着陸、宇宙人現る?

●京都の女性が目撃

一九七四年十月四日、中日新聞社会部に「空飛ぶ円盤を見た」という電話が2回あった。午前11時頃、京都の住人という女性から「3日前午前11時半頃、自宅近くに円盤が着陸、男女各1人が何かしやべっていました。女性は黒髪が長い、ごく普通の感じで、言葉はよくわかりませんでした。名古屋がどうしたといつて

ました。調べてください」と第一報。

電話はこれで切れたが、間もなく岐阜県の子備校生から「千種区で円盤が飛んでいた」と第二報が飛び込んだ。この朝9時32分頃、千種区の子備校生が窓の外を見ると、銀色の円盤が上下にらせん状を描きながら北から南へ飛んでいた。「黒っぽい銀色になったり、白くなったり、あれは円盤に間違いない」と予備校生は興奮気味。

京大UFO・超心理研究会の浅井総一代表に聞いてみると「エッ、ホント? でも人が降りてきたというのはネエ。それに人工衛星や気球と見誤ることもあるんですよ」――結局正体はもちろん真偽のほどはわからずじまい。

(一九七四年十月五日付、中日新聞)

これこそ円盤の写真?

●尾道市内の高校生が胸さわぎ

尾道市内の高校生が「空飛ぶ円盤」をカラーフィルムに収めた。同市栗原町、尾道工業高校1年の藤松和彦君(15)で撮影したのは11日早朝。現像、焼き付けの終わったカラー写真を前に、19日友人3人と「円盤」論議をしていると再び「円盤」が接近、全員が目撃――という傍証付き。オカルト、ナゾの未確認飛行物体(UFO)……と、現代科学で説明しにくい現象が相次いでいる時、カラーフィルムがとらえた「円盤」の正体は――。

藤松君が「円盤」を撮影したのは一九七四年十月十一日午前6時25分頃。2階自宅で寝ていると頭が痛く、胸騒ぎがする

のでベッドから起き南側の窓を開けると、南東の千光寺山上空から直径約40メートル、厚さ5〜6メートル、黒かった色に緑がかった鈍い色の円盤が音もなくゆっくり北西に向かっていった。和彦君はとっさにベッド横に置いていたポケットカメラのシャッターを切った。円盤は北西の同市久山田上空に消え、間もなく消えた場所から今度は前の3分の1の大きさの帽子型の円盤が現れ、同じ軌道を南東に飛び去った――と言う。

夢中でシャッターを切った藤松君は、驚きとショックで一時的にぼろぼろとしたが、「とにかく現像してみなければ」とフィルムをDP店に持ち込んだ。18日出来上がった写真を見ると、画面こそ少し暗かったが、葉巻型と帽子型の「円盤」がはっきりと3枚撮れていた。

19日朝、さっそくクラスメートに見せたが、「信じられない」という反応ばかり。同日午後3時頃、円盤論議が尾を引いて級友の高良輝久君(16)、砂田邦政君(15)、向井芳臣君(15)が藤松君の家に立ち寄った。3人が写真を開いて真偽論争をしていると藤松君が「頭が痛い……また出そうだ」と言い出した。2階に上がった藤松君の指さす方を見ると、写真に写っているのと同じような帽子型「円盤」が左右に揺れながら迫ってきた。一緒にいた高良君らの話では「体がしびれ何かに魅入られたようだった」と言う。円盤が現れて消えるまで約15秒。その後も30〜40分の間に2回現れては消え、円盤の周りにはブルーの気体のよう

な物が取り囲んでいた」と言う。
(一九七四年10月21日付、中国新聞)

福島市にも現れる

●先生から生徒まで確認

全国各地で話題のタネとなっているUFO(未確認飛行物体)が昨年の11月1日の白昼、福島市上空に現れた。しかも現れた場所が福島2小(渡辺政三校長、50人)の上空で小学生多数や教師まで「確かにこの目で見た」と真剣な表情で証言しており、目下、このUFOの話で持ち切りだ。

「間違いなく見た」と同小5年2組担任の佐藤昭雄教諭(44)の話によるとUFOが現れたのは1日午前10時5分から同10時30分に行われた業間体操の間。業間体操には全校児童、10人の教諭が参加して校庭で行っていたが、子供たちの間から突然「円盤だッ!」との声が出、騒然となった。佐藤教諭も「まさか?」と思いつきながら空を見上げたところ、2小の真上近くにハッキリと見えた。

当時、空は薄雲におおわれていたが、UFOは雲の下に止まっていた。機数は少ない人で一機、多い子供は「12機いた」と意見が分かれているが、大部分の教諭、子供たちは「8機前後だ」だったと語っている。

色は茶色を主張する子供が多いが稲村彦衛教務主任(43)は「黒っぽかったよ」だ」と語っている。UFOは雲の下約1キロの高さに10分間ほど静止していたが、厚い雲にかくれたあと姿が見えな

なかった。数機ずつ固まっていたという話もあり「時々、ピカピカ光っていたようだ。もちろん初めてだが、UFOに違いない」と5年2組の山本淳君(11)はいまも興奮した表情で話している。

(一九七四年11月3日付、福島民報)

鹿児島市では音の出るUFO

●静止してから移動

「空飛ぶ円盤を見た」と指宿郡喜入町前之浜、高校2年の横井泉一君(17)から、本社へ報告が届いた。

一九七四年10月23日午後7時25分指宿スカイラインに出る道の弓指バス停から瀬田寄りの上空で高度200メートル位、赤色灯がつき、50〜60キロ位の速度で、「ウォーン」というようなジェットエンジンに似た感じの音、約30秒静止してから移動した。円盤のような気がしたがはっきりとは確認出来ないというレポ。

図解入りでくわしく書いているが「だれに話しても信用しない。弟がラジオを聞いていたら、高校生が見た」という話だったので勇気を出してペンをとった。信用してもらえればうれしいです」と書いています。

(一九七四年10月29日付、南日本新聞)

同じ鹿児島で写真撮影に成功?

●ただし目では確認していない

「この発光体がうわさの空飛ぶ円盤では」——一九七四年11月7日、本社に1枚の写真が届いた。送り主は指宿郡喜入町前之浜の同町役場職員崩中幸一さん

(29)。本紙29日の朝刊消しゴム欄の同町前之浜、高校2年、横井泉一君(17)の記事に出ていた「円盤」の出没地点にカメラを据え、3日目に撮影に成功した。

撮影したのは10月31日。自宅の窓から問題の出没点である同町バス停から瀬田寄りの上空200メートルに20ミリのズームレンズを16に絞り、カメラを三脚に固定午後10時50分から同11時5分の間、シャッターを開放にしておいた。フィルムはASA400の高感度を装てんした。

「1日に近くの写真屋で現像してもらったら、この発光体が映っていた。レンズを向けた方向には光源はない。撮影中はカメラのそばを離れていたため発光体は見えないが、おかしいことがあるものだ。『消しゴム』の場所とも一致している。UFO(未確認飛行物体)空飛ぶ円盤)かもしれない」と、崩中さんは、言う。

ただカメラの方向に1つだけ発光体の可能が。14キロ離れたところにある九州電力の高圧送電線の鉄塔。送電線は電気がもれて発光するコロナ放電を起こす。

しかし九州電力鹿児島電力所の北方克郎送電課長は「この写真を見て『コロナ放電』を否定した。『コロナ放電は20万ボルト以上でないと起こらないが、問題の送電線は66000ボルト。またガイシに塩がついたり汚れるとたまに発光することがあるが、こんなに光は強くない。光り方もまったく違う」とその理由を説明する。

崩中さんはすっかり円盤にとりつかれ

てしまった。「今度はこの目で確認、もつとしっかりした写真をとってやる」と張り切る。どうです。あなたも喜入に出かけて円盤に挑戦してみたら——。

(一九七四年11月8日付、南日本新聞)

円盤、工業地帯を偵察?

●新居浜で回転するオレンジの物体

工都の空にナゾの飛行物体UFOの飛来?——新居浜市の市立中萩小学校の5年生児童、河端晋治君(桜組)、高橋竜三君(梅組)らは一九七四年9月14日朝、学校から5キロ東の郷山上空に「オレンジ色」の回転する物体を見たと言っている。

最初に目撃した河端君らの話では、飛行物体が現れたのは授業前の8時10分頃河端君の知らせで南教棟3階にいた一色昭夫君(菊組)ら5年生20人も一斉に確認したとのこと。

これら「証言」によると飛行物体は郷山上空に小さく見えていたが、1分後に光を放って消え、2〜3分たつと同じ位置に再び現れ、30秒後に消えた。

形は円盤型というより、ヒシ形に近く、オレンジ色から白灰色へだんだん色を弱くしていた。回転しているのとはっきり見えたと言っている。

(一九七四年9月14日付、愛媛新聞)

ふわふわした飛行物体を撮影

●3人のカメラクラブ員が

UFO(未確認飛行物体)が各地で話題になっているが、甲府で空飛ぶ円盤を

撮影した中学生がいる。甲府南中3年生の桑沢幸雄君、小池浄君、佐藤雄二君の3人。

3人の話を総合すると一九七四年9月13日午後4時頃のこと、甲府市立病院の前を歩いていたら、目の前にフワフワと光る物体。最初は「飛行機かな」と思っているうちに物体は上がった下がり、横に動いたり。「空飛ぶ円盤だ」と3人は持っていたカメラでパチリパチリ。

写真クラブ員の3人だけに、さっそく学校で現像したフィルムにはパッチリ空飛ぶ円盤の写真、3人は「ほかにも見えていた人はいないはずだ。ふだんから円盤には興味があっただけに撮影できてうれしい」と興奮ぎみだった。ちなみにこの円盤は、低空のままどこかへ飛び去ったという。

(一九七四年9月23日付、山梨日日新聞)

小学生が「奇妙な物体」を目撃

●広島、リーダーはキャッチしてない
庄原市でナゾの飛行物体が話題になっているが、広島市でも一九七四年9月20日、小学生が秋晴れの空を飛ぶ「奇妙な物体」を見た。

最初に見つけたのは南観音小学校6年三田智幸君(11)。同市南観音6丁目の同校校庭で運動会の練習をしていて、庚午方面の山並みの上を豆粒大の黒い「物」が二つ西の方に向かって飛ぶのを見た。周りにいた同級生約20人も目撃。

約1分間飛び、ビカッと白く光って消えた。午後2時30分頃だったという。指導の先生4人も校庭にいたが、気づかなかった。

広島空港の話では「リーダーはキャッチしていない。米軍のジェット機が上空をかすめ飛んだかもしれない」。しかし子供たちのUFO(未確認飛行物体)への関心は強まるばかり。「円盤に間違いない。今度見たらきつと突きとめてみせる」と張り切る子供もいた。科学には興味を示す現代っ子、さてどう解明?

(一九七四年9月21日付、中国新聞)

不気味な地震グラフのような光跡

●静岡の町の天文家が撮影

秋の夜空を走る不気味な発光体、いまはやりのUFOか。町の天文学者のカメラに収められた光をめぐっているいろいろな憶測が飛んでいる。

この写真は藤枝市の茶販売業芳村好美さん(25)が一九七四年9月21日の午後11時47分30秒から10分間にわたって天体を写した時のもので、自宅庭からスバルをねらってカメラをかまえていた時に写ったという。

光は地震計グラフのように写っておりおひつじ座にかぶさるようになっていた。芳村さんがこの光が写っている時に気付いたのは焼きつけをしている時ではじめはフィルムにキズがついたと思いついたところ、数枚写したうちの一枚にはっきりと写っていたという。

日本平天文台の浦田武さんも「いまの

ところ、なんであるかわからない。少なくとも天体でないことはたしかだ。写真だけでは断定出来ないが、かなり高空を非常な速さで移動している様に見える」と語っていた。

昨年中は北海道などでUFOの目撃が相次ぎ、県下でも静岡市の用宗で空飛ぶ円盤騒ぎがあり「やはりUFOでは」と芳村さんも首をかしげている。

(一九七四年9月27日付、静岡新聞)

銀色に光る物体が2度も

●岐阜の小学生たちが目撃

「空飛ぶ円盤を見た」「ナゾの飛行物体が現れた」。羽島郡岐南町で空の珍事の目撃者が相次ぎ、話題になっている。目撃者はいずれも小学1年から4年までの児童たちで「ナゾの物体」を確め合っている。

これらの児童たちの話によると目撃は第1回目が一九七四年9月5日午後6時頃、同町下印食で岐南西小の仲よしグループ、森崎友祐ちゃん(9) 同小4年、辻幸一ちゃん(8) 同小3年、柴山信也ちゃん(8) 同、の3人が自宅近くの路上で石けり遊びをしていたが、石につまずいて転んだ友祐ちゃんが起きあがろうとしてふと上を向くと銀色に光る飛行物体を発見した。

「何かが飛んでいる」と友祐ちゃんが指さす南の空を見上げた仲間信也ちゃんが「円盤だ」と叫んだ。友祐ちゃんが「ウーン」と返事をして起きあがったときには、ナゾの物体は音もなく雲の中に

消えていったという。

2回目は同9月21日午後3時10分頃、友祐ちゃん、幸一ちゃんと、それに新顔の赤塚博史ちゃん(7) 同小1年の3人で前回の場所と少し離れた草原で自転車を乗り回していた。博史ちゃんが「あれ、なんだ」と空を見上げると銀色に光る飛行物体が浮かんでいるのが目に映った。3人は寝ころがって見ていると大空に吸い込まれるように消えていった。その間30秒。

友祐ちゃんによると、ナゾの「飛行物体」は、1回目ときは上に上がった翼があり、中央に赤い光が2つあり、にぶい銀色で音は聞こえず、西南から南東へ飛んでいたという。また2回目は、球状の表面に赤い4つの光があり、三角の翼がツバのような形でついていた。前回よりも低空で「形も大きさもかなり鮮明に観測でき、ブーンというような音もした」という。

正村一忠岐阜天文台長は「空でいろいろな光現象が起きる。手っ取り早い例が電光、放電現象を飛行物体と錯覚したりまた空想科学雑誌に興味を持った子供の場合は、幻覚を見ることが、しばしばある」と話している。

(一九七四年10月2日付、岐阜日日新聞)

過疎の町に「落葉運動」の物体

●岡山県の山間部で

吉備高原の北端にあたる久米郡旭町、同町立第2小学校で、一人の児童が「空

飛ぶ円盤を見た」と言ったことから「僕も……」と発見者が相次ぎ、人口5500人、過疎の町はいま、降って湧いたUFO（未確認飛行物体）騒ぎでもちきり。学校では探検隊をくり出そうという動きまで出ている。

この騒ぎの発端は一九七四年九月中旬、三船昌行同校教諭が6年生の理科の授業中、「宇宙の果てはあるの」「宇宙人はいるの」といった児童の質問に混じって児童会長の岡田正人君（12）が「空飛ぶ円盤を見たことがある」と発言した。2年前友だち4人と下校中、前方約200メートルのところで、皿形の物体がフワフワと浮かび、学校の近くの堂のあたりで降りるかと思うと、急に方向を変えて、山の方へ姿を消した。その間約10秒。落葉のようにふらりふらりと飛んでいたという。

一緒にいたクラスメートの西本佳広君も同じ証言。岡田君は円盤を見た翌日、学校でこのことを話したが「夢を見たのだらう」「アホらしい。流れ星だ」と相手にされなかったため、それ以後は黙っていたという。

ところが三船教諭が岡田君の話を聞いた翌日、新たに3人の目撃者が名乗りを上げ、9月14日には3年の難波義美君が「昨晩見た」とホットな情報を持ち込んだ。6人の話を総合すると場所はいずれも同学区内で形は皿形か土星形。午後2時から同7時半頃までに見ており、色は白、金、赤とまちまち。

同教諭がUFOに関する文献をとり寄

せると、岡田君が見たという落葉のような円盤軌道は「落葉運動」と呼ばれる動きにピッタリと一致。神戸市内の日本UFO研究会（平田留三代表）に問い合わせてもやはり「本物だらう」との返事。

しかし、こういった「証言」が信じられないのは証憑写真がないこと。このため、今後の対策として工夫して写真をとること、同町内で大人の目撃者を探すため各家庭からアンケートをとる、円盤が着陸したものとして、高学年児童が近く同町北当地一帯を探検することを決めた。

三船教諭は「真剣な表情で話す子供たちを見て教師として『信じてやらねば』と思う以上に、円盤の存在を信じる気持ちが強くなった。UFOについて知識がないので指導してほしい」と話している。（一九七四年10月4日付、毎日新聞岡山版）

月光のような光体が円を描いて飛行 ●福島市の川俣町上空を

一九七四年10月20日夜、川俣町上空に丸く円を描くようにして光ったり消えたりする「怪光」が出現、目撃した地区民が「空飛ぶ円盤」ではないかと大騒ぎする一幕があった。

同夜7時50分頃、川俣署に一一〇番で「上空に『空飛ぶ円盤』らしいものが光っている」との通報があった。

同署員3人が直ちに同署の裏に出てみたところ、北方上空に約30センチ大の月光のような光が円を描きながら光ったり

消えたりしており、約20分後に北西方面に飛んでいったという。

なお、同時刻頃、福島民友新聞川俣支局にも同町小神の加藤美明さんから同様の円盤らしいものを目撃したとの電話があり、区民多数もこの光を見ている。

川俣署では、この光が北西の保原方面上空に消えたため、保原署に連絡したが保原署へは前日の19日夕方、梁川町の主婦から「北方の空に光るものが見えた」という通報があったという。

（一九七四年10月21日付、福島民友）

長円形の光がついたり消えたり

●東広島市の病院職員が目撃

「私が見たのは空飛ぶ円盤ではあるまいか」と東広島市西条町西条東、病院職員堀川忠彦さん（33）は一九七四年10月20日夜目撃した長円形の光に首をひねっている。

午後8時10分頃、同町寺家の高台を歩いて帰宅中、ふと西の空を見ると、赤に近いオレンジ色の長円形の光が見えた。ゆっくりと西へ移動して、見えなくなっ

た。この間1分余りで空はやや曇っていたという。光を放っていたのは空飛ぶ円盤では——と思いながらも信じられぬ現象だけに、目の錯覚のような気もして黙っていた。

ところが一九七四年10月21日付の中国新聞で尾道市内の高校生が円盤の写真を撮影したという記事を読み、不思議なこともあるものだ、と家族や病院の同僚に話した。

堀川さんは「月にしては変だと思って立ち止まって見た。光はかなり明るく、飛行機でもなく、市内のドライブインが出している、回転光線とも全く違っていった。ほかに人がいればはつきりするのだが……」と話している。

（一九七四年10月23日付、中国新聞）

まんじゅうを横から見た形の物体

●富山県の小学生が発見

魚津市上空にもUFO（未確認飛行物体）出現。一九七四年10月25日午前11時半頃、魚津市立本江小学校の児童がナゾの飛行物体を発見した。

6年2組の川村千恵子ちゃんら4人が4時間目の授業の終わり頃、教室の窓から東側の空を見上げるとUFOが斜め上空をスッと上がって行くのが20～30秒間見られたという。

目撃者の話を総合すると、問題の物体はまんじゅうを横から見たような長円形で3～5センチほどに見え、黄、オレンジなどの光を発していた。

また20日午後5時頃、同小グラウンドにいた6年3組の紙谷博君ら10人は、北西の空にUFOが浮いているのを見、ピカピカ光りながら揺れるように下りてきて30～40秒後に一段と強い光を発して消えたという。さらにその20～30秒前、同市下村木の交通公園にいた同じクラス岡倉幸治君も「だいたい色で5センチほどの円盤が水平に飛んでいた」と話している。

（一九七四年10月26日付、北日本新聞）

UFO 目撃レポート

①山口 靖(14) 室蘭市立蘭東中学校
②一九七四年五月十二日

1回目、午後8時15分頃
2回目、午後8時25分頃

③函館市湯ノ川町1の2の37、ホテル「旭館」の2階の窓から。UFOは海上にあった。

④晴

1回目

⑤約5分間

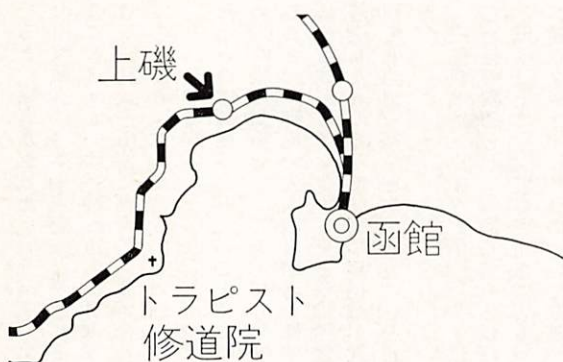
⑥生徒10数人、担任の加畑与吉先生も一緒。

⑦肉眼、友だちが写真撮影

⑧形ははっきりしないが輝きが強く回転している感じあり。時々点滅していた。友達が写真を現像してみるとそれ

- ▼凡例▲
- ①氏名(年齢)・職業・学校名
 - ②目撃日時
 - ③目撃地点
 - ④天候
 - ⑤目撃継続時間
 - ⑥同時目撃者
 - ⑦観測機器・方法
 - ⑧物体について
 - ⑨飛行状態その他
- ()内は目撃者の住所

らしきものが3個写っていたという。ただし私には1個しか見えなかった。⑨現れたのは南の方向でほとんど動かなかったが、わずかに上下左右へ移動していた。そのあと急に速度をあげると輝きは衰え、見えなくなった。な



お、ヘリコプターなどとは考えられない。

2回目

⑤約10秒間

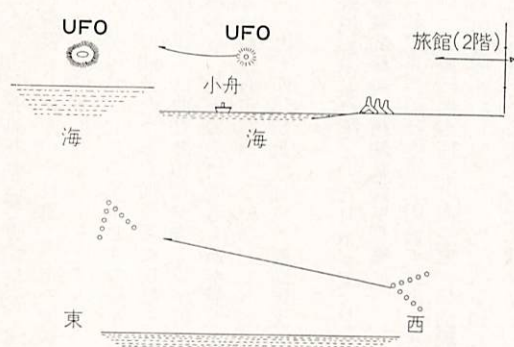
⑥なし

⑦肉眼

⑧1回目のUFOを目撃後、しばらく空を見ていると上空にV字形に数10個の物体が飛行していた。光度は3/4等星ぐらい。

⑨西から東へ直線飛行。編隊はくずれることにはなかった。

(千050 北海道室蘭市知利別町二二三一〇)



* * *

①中越一郎(16) 函館西高等学校
②一九七四年九月十六日(月) 午後5時

30分頃

③親せきの近くの風呂場で

④晴

⑤30秒から1分

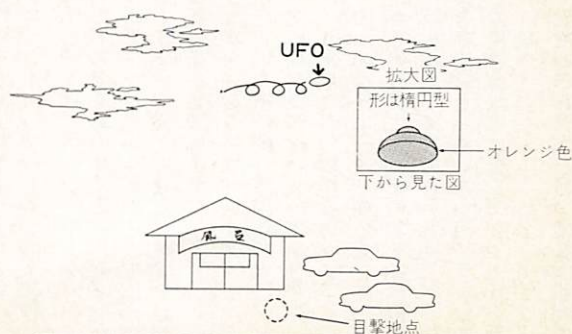
⑥中越キミ、真一郎その他5/6人

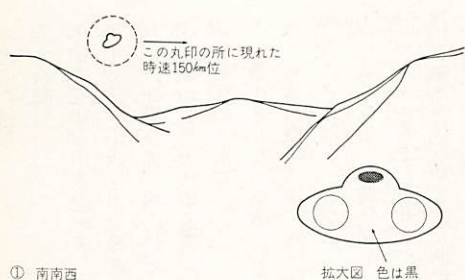
⑦肉眼

⑧オレンジ色で少し光っていた。高度は400/500メートル位。形は楕円型のコーヒーカーップを逆さに置いたようなものの。

⑨風呂から出て窓を見上げると高度400/500メートル位のところに楕円型でオレンジ色に光っている物体がくるくるとラセン状飛行をしていた。

初めは見間違いか飛行機かと思った

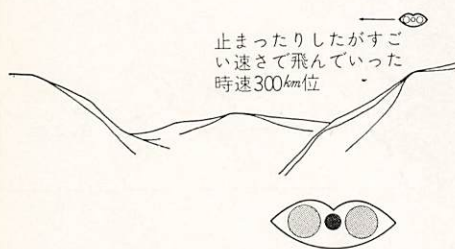




① 南南西



②, ①と同じ場所



③, ①と同じ場所



① 快晴
② 3分間
③ 10数人
④ 昭和48年
⑤ 卒業の三
⑥ 条第一中学

- ① 伊藤嘉彦 (12) 豊里町立鴉波小学校
- ② 一九七四年十月一日午後5時47分
- ③ 宮城県登米郡豊里町山根
- ④ 晴
- ⑤ 1時間25分
- ⑥ 齊正志君 (12)、志賀昭浩君 (12)

千田喜美雄君 (12) 志賀信也 (9) 志

もあった。図4の円盤は最後に現れ、北海道の方へ飛んで行った。この日は雲も煙もないので、本当の円盤だと思う。写真は撮れなかった。

(千987-03 宮城県登米郡豊里町山根)

① 袖山政裕 (16) 三条工業高等学校工学科1年

② 一九七三年十月十九日午後3時20分から3分間。

③ 三条市西本成寺第一中学校

④ 3年7組のベランダから。

⑤ 快晴

⑥ 3分間

⑦ 10数人

⑧ 昭和48年

⑨ 卒業の三

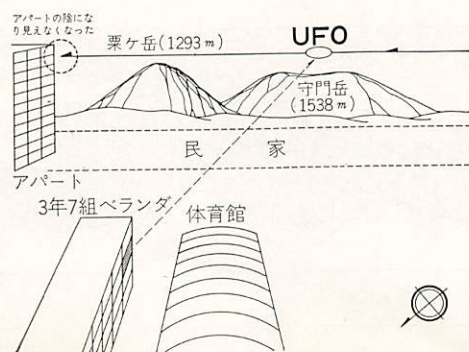
⑩ 条第一中学

⑪ 山本拓司 (14) 和歌山市立小倉中学

⑫ 一九七四年八月二十九日午後7時から9時頃まで。

① 山本拓司 (14) 和歌山市立小倉中学

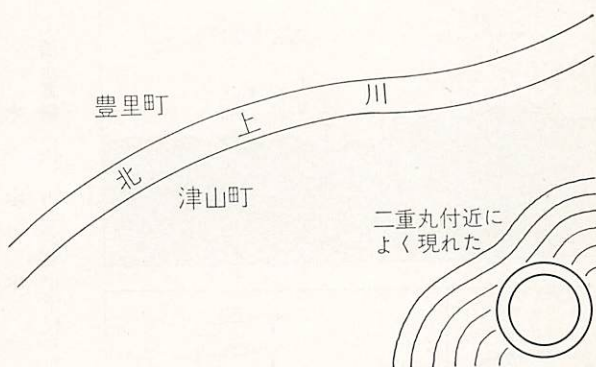
② 一九七四年八月二十九日午後7時から9時頃まで。



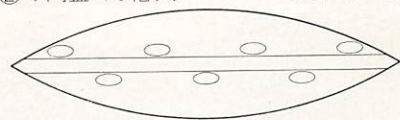
が、そうではなかった。物体のオレンジ色は太陽が沈みかけていることから反射の色ではない。飛行状態はラセン状で一時的に止まったり動いたり、それを、40秒間何度かくりかえしていた。そのあとは一時雲に隠れていたが再び現れたあと突然見えなくなってしまう。

(千049-01 北海道上磯町字七重浜三五六一二三)

* * *



②の円盤の5倍大 時速400km位

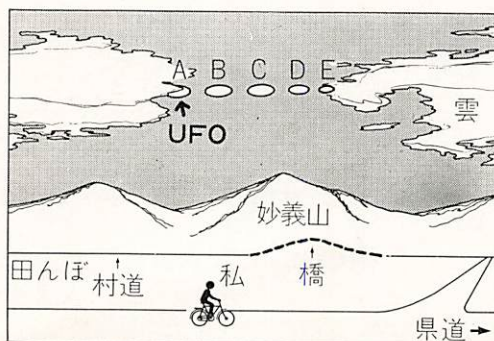
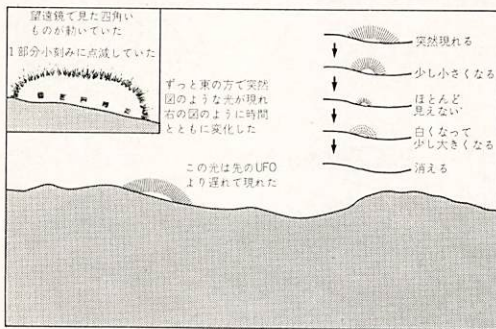
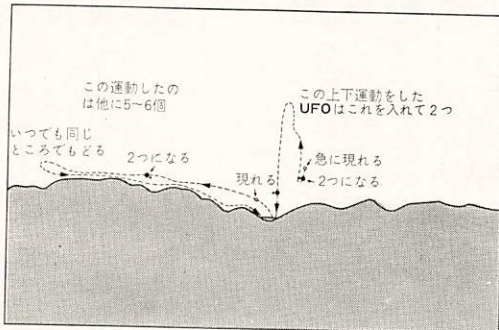
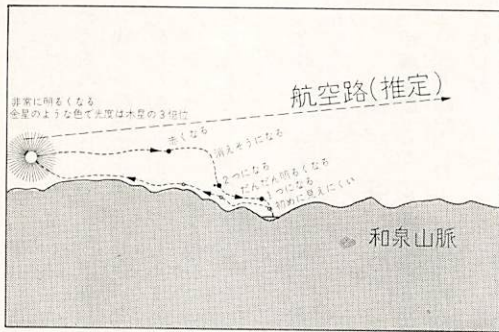


④南西上空

賀千里さん、志賀清喜さん、志賀恵子さん
⑦肉眼
⑧肉眼で見たところ左右1センチ位大のもの。はじめは白が強くわずかにオレンジ色をしていて、時間がたつごとにオレンジ色に変わっていった。
⑨高さ約2000メートルで、飛行中の形態に変化なし。速度はセスナ機位のもの。飛行中の光度の変化はない。直線状に飛んでいた。

○四

(千955 新潟県三条市西本成寺三六八)



- ③ 地図の通り
⑤ 2時間位
⑥ 山本佳孝、山本恵美子、田中昭道、田中智法、小西雅之、嶋本行翁、寺浦保司、土肥正尚、堀内昌充その他家族
⑦ 肉眼および天体望遠鏡(田中昭道、田中智法の2人)
⑧ 一番小さくなった時で3等星位、だいたい飛行機のライト位、母船らしき物の大きさはわからなかった。色は金星のような色から黄色味帯びたものや赤味があった色に変化していた。
⑨ 音は聞こえなかった。速度は止まったり飛行機より速くなったり遅くなったりしていた。
(〒649-62 和歌山市小倉三六一一)

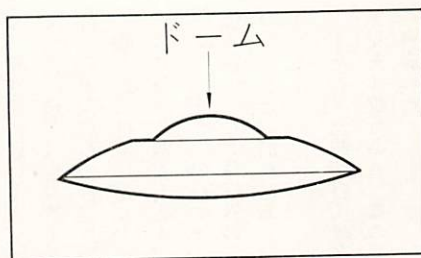
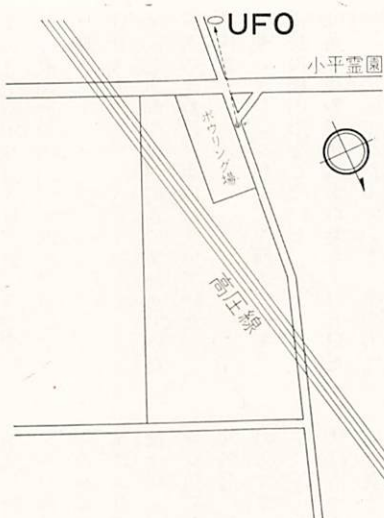


① 須永真樹(12) 市立宮郷小学校6年

- ② 一九七四年七月二十四日午前11時45分頃
③ 市内田中島の村道
④ 晴、やや雲あり
⑤ 3〜4分
⑥ なし
⑦ 肉眼
⑧ 直径は20〜30メートル位、高さは10メートル位、色は乳白色、無音。
⑨ 初め村道を自転車走ってふと西の空を見るとはじめの図のAのところへUFOが浮かんでいた。雲かと思ってまた自転車を走らせて再び空を見るとUFOはBのところへ移動していた。自転車を止めて観測してみると、CからDへ動いているのをみとめた(少し小さくなった)。それからEのところへ来ると消えてしまった。飛行場所は左下図のあたりと思う。ドームをしるした図はUFOの想像拡大図です。スピ

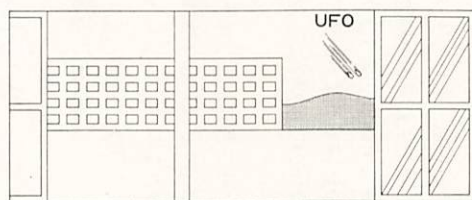
ードはのろく、飛行機でもなく気球でもないように思われるので多分UFOと考えられる。
(〒372群馬県伊勢崎市田中島町五五)

- ⑤ 5〜10秒
⑥ 兄、いっこ
⑦ 肉眼
⑧ 「コズモ」創刊号の表紙に出ているような三角形のもので色は全体に赤かった。大きさなどは距離がはっきりしないから、測ることはできない。
⑨ 3〜6秒位小さきみに左右に揺れ、だんだん赤色に変わってゆき、そのあ



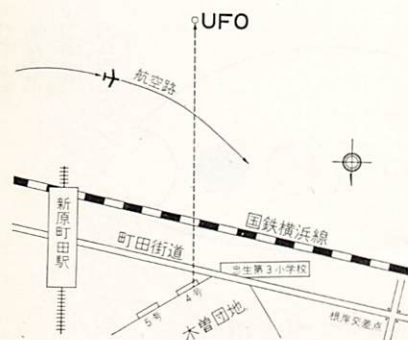
- ① 雲
② 一九七三年8月中旬
③ ボウリング場の近く
④ 匿名希望 (14) 東久留米市立西中学校
⑤ 1回目

- と急に消えた。
2回目
② 一九七四年6月7日午前11時40分から12時25分まで。
③ 学校の教室で。
④ 快晴
⑤ 2〜5秒



UFO のスケッチ

- ⑥ なし
⑦ 肉眼
⑧ 赤く燃えるような光体が落下するよう飛んでいた。
⑨ 仰角15°位のところを2つのUFOが常に一定の距離を保って等速で降下していた。そして仰角5°位になったとき2つとも同時に消えてしまった。
なお、1、2回とも急に空を見たくなって見上げたとき目撃したもの。
(千180—03 東京都東久留米市滝山二五—一〇—二〇六)
① 角田博敏
② 一九七四年8月9日午後6時55分頃
③ 国鉄線の電車に乗り瀬田川を越えたあたりで高塚山の方角に見えた。
④ 晴
⑤ 6〜7秒位
⑥ なし。近くに友人がいたが信じなく見なかった。
⑦ 肉眼
⑧ オレンジ色をしていた。
⑨ 夕方、京都からの帰り、電車の中から滋賀県の瀬田川を越えたばかりのところ、高塚山の上を見ると西南西付近に高度約700メートルあたりにオレンジ色の光体を発見、約1〜2秒後黄色の光を発した後、右側に旋回した。それとともに光が消え物体の形が現れた。その後物体は左の方に70°位傾いて進み、次いで水平になって東の方に移



- 動するように見えた。その間約6〜7秒位。
(千529—11 滋賀県大上郡豊郷町大町七四)
① 匿名希望 (37) 主婦
② 一九七四年9月2日夕方(やや薄暗かった)
③ 町田市木曽町五三九—一、木曽団地(通称) 4号館2階より南の方角、仰角約15°・5'。
④ 雲(ただし、ところどころに切れ間あり)
⑤ 約2秒
⑥ なし
⑦ 肉眼
⑧ 赤色をしていて飛行機の警告灯の色に近かった。田に近い金星位の大きさに

で輝いていた。

⑨洗たく物を取り込もうとしてペランダに出たとき見つけたもので飛行音は聞こえなかった。何か気になっていたが、そのうち消えてしまった。後は何も残らなかった。物体は停止していた。

2 回目

①高田幸治 (38)

②一九七四年九月三日夕方(日没前)

③国鉄南武線久地駅の前後の車中で

④晴

⑤約5分

⑥同じ車両では西向きにすわっていた乗客の半数位。車内はすいていた。

⑦肉眼

⑧強いオレンジ色で白く濁っていて、横長の楕円形をしていた。

⑨黄金色の夕焼雲から離れてUFOだけが鮮やかに浮かんでいた。そのあたりは航空路に近いようだったが音も無くまた、煙、反射光等もなかった。走行中の車両からの目視だったがガラスに顔を近づけて見たり、久地駅ではホームに降りて観察したが、反射光でないことは確か。物体のあの光は全体が強く輝いてUFO以外のものとは思えない。また、消えたあと何も残らなかった。

また私は元航空自衛隊在職中UFOを見た体験もあり、この目撃で自信を一層強めた。

(〒194 東京都町田市木曽町五三九一、木曽住宅第四二七号)

* * *

①相沢光寛 (13) 学生

②一九七四年九月30日午後9時35分～9時40分の5分間

③自宅の2階から

④晴れていたが雲が少しあった。

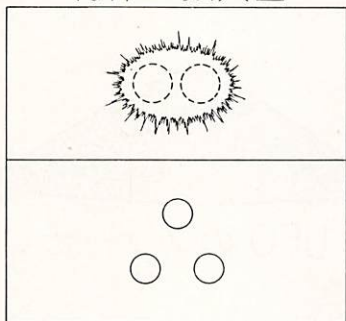
⑤5分間

⑥父、母、姉、近所の山口君。

⑧月の半径位の大きさではじめは丸いものが2つ輝いていたが、しだいに光がにぶり、丸い点が3つになった。色はオレンジで、しまい頃には暗いオレンジ色になった。

⑨名月の日だった。月を見ていると東の方でオレンジに明るく輝く物体が空中に停止していたので見ていると、物体はゆっくりと高度をあげながら南の方に動きはじめたが、ついで西の方に向きを変えて、オレンジ色の物体は2

物体の拡大図



(月)

星。



(〒181 東京都三鷹市井口五六)

* * *

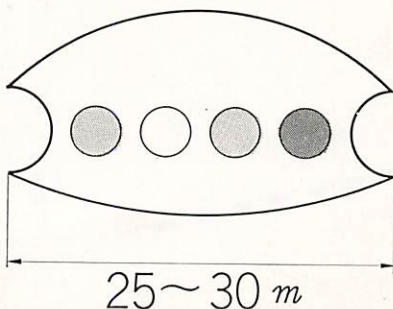
①佐藤賀之 (15) 相模台中学校3年1回目

②一九七四年3月29日午後6時30分

③神奈川県相模原市南台4丁目鶴ヶ丘団地内最北の公園スベリ台上

④快晴

⑤12秒間
⑥なし
⑦肉眼
⑧色はオレンジ、イエロー、グリーン



ン、ブルーが見え、中央が光っていた。

⑨北の方向から南へと飛行していたが行って止まり、止まっては動くという状態だった。

2 回目

②一九七四年4月17日午後6時45分

③鶴ヶ丘歩道橋上

④快晴

⑤約18秒間

⑥外国人の少年3人

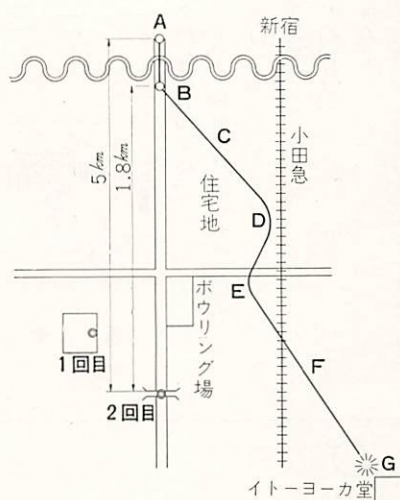
⑦双眼鏡20×80

⑧中央が4つのライトみたいな物がついている部分がかかるがわる光っていた。これは第1回目と同じ。物体の長さは25メートル位。

⑨見つけたのはA地点だった。B地点

目撃者の外人3人はUFOがちょうどE地点に来る、ほんの少し前（1秒位）にぼくの横に来て少したって手まねで双眼鏡を貸してくれといったので貸してやると、外人はUFOをのぞいていたが「ヒィー」などと低い声を出してかすかに笑っていた。そのあと日本語で「ありがとう」と言って返して

あたりで突然止まった。その後方向を変えものすごいスピードで、Dまで来た。そのB-D間はほんの1秒以下でDでまた方向を変えEのあたりに来たとき双眼鏡で見ると約8秒間止まっていた。その後動きだしてGのあたりでパツと消えた。またC、F地点あたりでキーンとかん高い音が聞こえた。止まっている時の方が点滅が激しい。EG間はものすごいスピードだった。またスピードが速い時の方が光が薄かった。



くれた。またUFOがGで消えたとき3人が回りを囲んで話しているの私はなぐられるのではないかとびくびくしていたが双眼鏡をザツクにしまつてから4人で下へ降りて行った。この時おかしなことが起こった。僕の横に外人3人がいまいたのにだれもいない。さては逃げたかな、とあたりを見回したが何か変な気がした。逃げたのには足音もなかった。3人の姿は目をそらしたほんの1秒間のうちに消えたけど、姿を消すには少なくとも3秒はかかるところだ。3秒くらいかかって姿を消したにせよ風が起るはずなのにそれも無い。どう考えてもパツと消えたとは思われない。もしかしら外人3人は宇宙人だったのか

(干渉) 神奈川県相模原市南台四―二、鶴ヶ丘団地五―二)

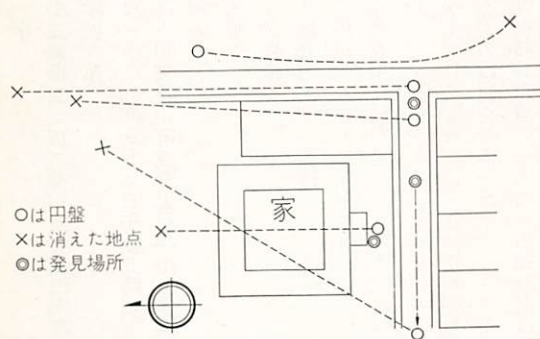
* * *

北村 哲 (16) 工業高校在学中

1回目は一九七四年八月十一日午後9時頃滋賀県内、南方向、仰角45°のところに約30秒間UFOが見られた。そのあと別の方向にも出現、30秒間浮かんでいた。物体は薄いオレンジ色から濃いオレンジ色に変わりスピードをあ

げると一瞬にして消えた。そのあと約1キロのところに下から空へ向かって飛んでいくのを確かめた。大きさは目で見て15センチだった。物体は尾を引いているようだった。この日は晴れていた。

2回目は同年八月二十八日午後8時25分、30分の約5分間、金沢市内で目撃、同時目撃者あり。南から北の方向へ移動していた。真上を飛んで北斗七星あたりで消えた。色は青白く時に赤に変化した。大きさは初め1センチくらいで瞬間的に15センチになった。スピードはのろく約3キロのところにあり、無音だった。



○は円盤
×は消えた地点
●は発見場所

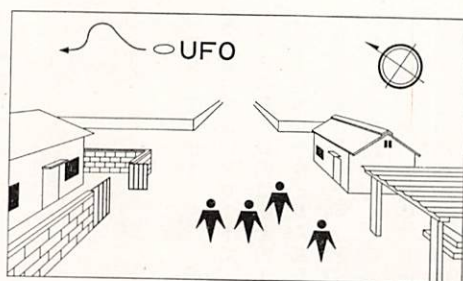
- ①須田洋一 (14) 久里浜中学校2年
②一九七四年十月二十三日午後5時32分頃
③久村二四〇―三三三付近
④晴(少々雲が出ていた)
⑤須田由美子 (11) 妹
⑥肉眼
⑦楕円形で物体の上部と下部が赤く光っていた。特体の大きさは50センチ位で窓と思われるものが見えた。
⑧北東の方向、仰角50°位のところを飛行、停止している時は自転していた。
飛行状態はイオンクラフトのように回転し、ゴーと低い音を発したりキーンという響く音を立てていた。推定速度は時速約10キロ、高度500〜300メートル位。物体が動きはじめると左傾した。

3回目は同年八月二十九日午後7時25分〜30分の約5分間、場所はやはり金沢市内だった。距離は約4キロ、カシオペア座の下を飛んでいた。大きさは15センチ。初め青白くあと赤く変わった。低速。ジグザグ運動をとった。

4回目は同年八月三十日、5回目は同31日、そのあとは9月1日で低速、変わった色だった。距離は約10キロ。7回目は同年九月2日、カシオペア座の下からベガサ座の間を飛んだ。大きさは15センチ。変色して低速だった。そのほか二、三見ている。

(干渉) 11 石川県金沢市田上新町三六八)

- ① 門脇圭志郎 (18)
- ② 一九七四年十月九日午後7時頃
- ③ 自宅
- ④ 快晴
- ⑤ 約10秒間
- ⑥ なし
- ⑦ 肉眼および双眼鏡 (オメガ Coated)



停止 動き始め 飛行中



(千 39)
神奈 川県横 須賀市 久村二 四〇一 八



Lens 30×50)
⑧ 楕円型でオレンジ色に発光、全長10メートル程度。後部が点滅していた。
⑨ 自宅のベランダから星を眺めていると、自宅の西方、仰角60°付近にオレンジ色に輝く星のようなものを見つけたが、しばらく見ていると突然その物体が動き出し、またたく間に自宅から南方にある山頂付近に急降下し、そして山と一定の間隔を保ちながらジグザクの波線を描きながら北へと移動して行った。双眼鏡で見ると後部が1秒間隔程度に赤色に点滅していた。
なお、現在までに奥道後付近の上空

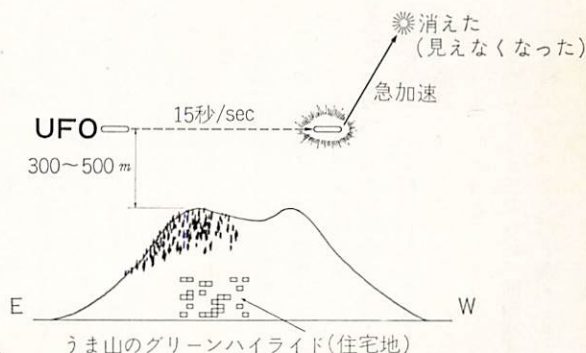
で多くのひとが円盤らしきものを発見しているようだ。
(千 79)
01 愛媛県 松山市 溝辺町 二〇〇 (四)

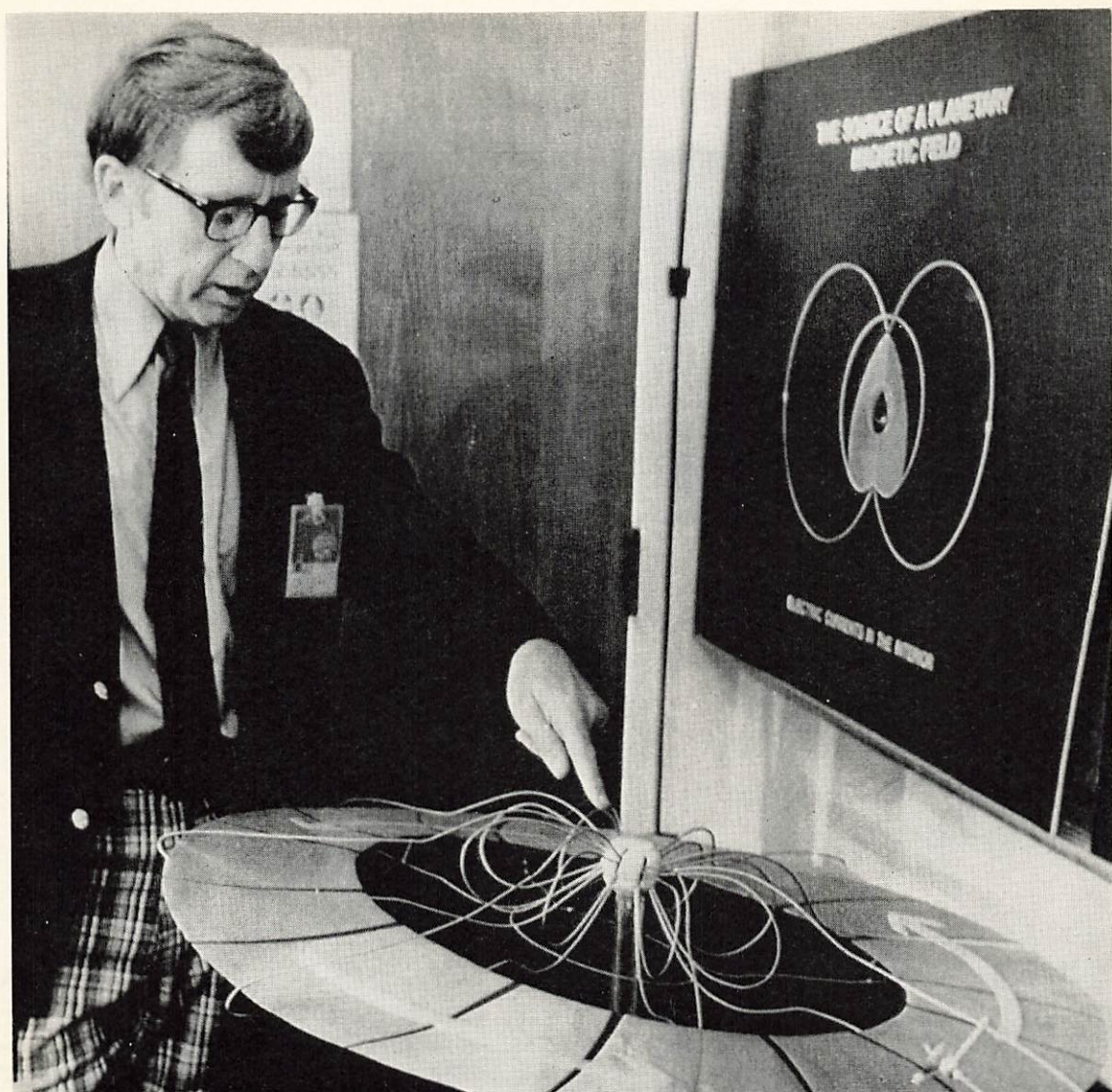
- * ① 三濃博文 (17) 香川県立高松南高等学校 3年
② 一九七四年十月4日午後5時頃
③ 香川県香川町浅野実相寺山上空300~500メートル
④ 晴
⑤ 20秒位
⑥ 松野秀樹、小西修
⑦ 肉眼
⑧ 葉巻型 (松野君はUFO下部に何か付いていたと言っている)。アルミ色をしていてフォース・フィールドらしきものは見えなかった。
⑨ 同時目撃者の一人である松野君は家の2階の窓際で3人がテレビを見ていた時、松野君が実相寺山の上空を指さして「飛行機にしては翼も音もしないが変と思わないか」と言うのでよく見ると実相寺山の上空300~500メートル位のところを東から西へ一定の速度を保って飛んでいた。
その間15秒位。
そのあと急に太陽の反射かUFO自体の発光が銀色に光り、その後南の方へものすごいスピードで飛び、すぐに見えなくなりました。
なお、目撃地の上空は航空機の航路ではなく、もしジェット機なら音を発していたはずだし、あんな芸当はとてできないと思われる。
(千 11) 香川県高松市仏生山町中

二八三三)

* * *

- ① 浅野和男 (14) 埼玉県入間郡越生中学校
- ② 一九七四年八月11日午後7時45分頃
- ③ 自分の家の近くの山の上空。
- ④ 薄曇
- ⑤ 7秒
- ⑥ 母
- ⑦ 肉眼
- ⑧ ⑨ 物体ははじめは星の明るさだったがそのうち物体は大きくなり、それから2つに分かれはじめスピードもはじめの2倍の速さになり、後ろの方から長いものが出てきた。





●木星とその磁場の模型

●11月30日、カリフォルニア州、マウンテン・ビューで木星とその磁場の模型を指さしているジェット推進実験所のエドワード・J・スミス博士。平らな輪型の物体は流動面で、木星の磁気赤道の数千キロメートル上空で惑星を取り囲んでいる低いエネルギーを帯びた電子からなる希薄な地域を表す。曲がった針金は科学者たちが木星の周りにあると考えている異常な形をした磁場の線を示している。模型は昨年12月にパイオニア10号が木星を通過した後になされた正確な計算の結果に基づいている。NASAのパイオニア11号は12月2日には木星の雲の上層部から43,009キロメートル以内を通過する予定である。

パイオニア11号・木星の電波信号を探る

科学者たちは長年、太陽からの同類の信号を除けば、宇宙から発せられる信号中最も強い信号音が木星の月であるイオの活動に関係していると考えていたが、パイオニア11号はこの発信源を探るため木星に接近している。

11月30日現在、パイオニア11号は時速48,279キロメートルで木星に向かって飛行しており、もし接近に成功すれば、木星が地球に発信している大量の電波信号の発信源を知ることができるだろう。

米国NASAのパイオニア11号チームのメンバーであるウォルター・フィリアス博士は電波発信源としては木星の9個の月のうち、最大のイオに向けて木星から流れている約100億ワットの高いエネルギーの電流が考えられると述べている。

同博士は「もし電流が存在し、宇宙船がそれに近づきすぎた場合、パイオニア11号の精密な装置類は故障するか、破壊してしまうだろう。宇宙船全体が同時に充電されれば、問題はないが、片側だけが充電されるとスパークするからである」と述べた。

宇宙船をコントロールするNASAのエームズ・リサーチセンターでのインタビューでパイオニア11号計画に参加している科学者、ジョン・ウルフ博士は「われわれはもし電波源がそこにあることを発見すれば、また最初からやり直さなければならない」と発表した。

パイオニア11号は、想定されるこの電流が電波発信源であることを確認できる距離まで木星に接近する予定である。

宮崎県の

UFO現象を

分析する

宇宙UFO研究会代表

■松田二男■



長年UFO現象を研究する松田氏が、
詳細な調査に基づいて“UFOと宇宙”
のために書いた特別レポート。

私が、UFOに興味を持つきっかけを作ってくれたのが兄でUFOを研究しようというきっかけを作ってくれたのが、近代宇宙旅行協会を主宰しておられ、またUFO問題のわが国最高権威者である高梨純一氏でした。MSFAへ入会すると同時に、学校の地学部の中に、「空飛ぶ円盤研究班」というのを作って活動を始めました。当時、私は、地学部の部長もやっていたので、そんな私が、空飛ぶ円盤という普通の人からは無視されているものをクラブの中に持ち込んだのだから、クラブの中ではあまり風あたりはよくありませんでした。しかし、班員は一番多かったようですけれど。

空飛ぶ円盤研究班では、「FLY I

日南市に「土星型円盤」が出現

ここにご紹介するUFO目撃は、一

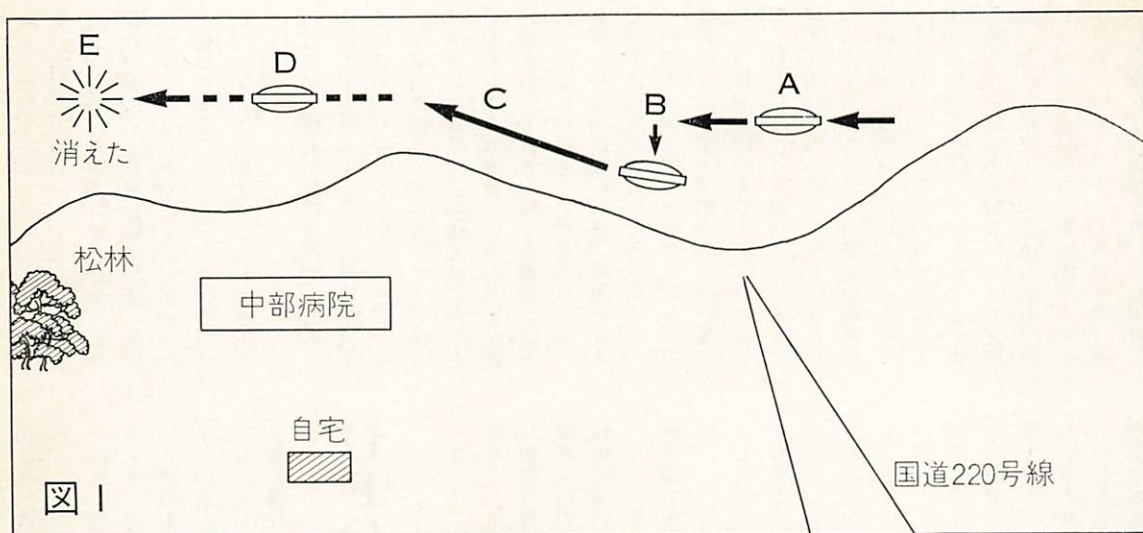
九七〇年の夏に、宮崎県日南市大堂津において、近藤喜彦君（当時中学一年生）という人が、円盤の中でも最も信憑性が高いと言われている「土星型円盤」を目撃したときの報告です。この近藤君の目撃を最初に耳にしたのは、空飛ぶ円盤研究班員の小玉君からの報告ですが、今まで報告を受けたUFO目撃とは異質のものであり、その形や飛行状態などが詳しく報告されています。

NG・SAUCER」（フライング・ソーサー）という情報誌を発行していました。内容は班員や、校内のUFO目撃報告がほとんどです。現在では、空飛ぶ円盤研究班は、休班中ですが、高校三年間にはたくさんのUFO目撃報告が手元に集まりました。こうして、クラブで調査した目撃報告や、地元の新聞に掲載されたUFO記事などを吟味、検討して、この程「宮崎におけるUFO現象」という小冊子にまとめ発行しました。

今回、「UFOと宇宙」ご愛読の皆様、私の冊子「宮崎におけるUFO現象」の中より、三つの記事を選んでご紹介します。これは同誌に投稿するために、後で加筆したものです。

す。

空飛ぶ円盤研究班員の小玉陽史君からの報告によると、彼の友人の近藤喜彦君（現在高校二年生）が今から四年前の一九七〇年夏にUFOを目撃したということであり、早速、私は小玉君を通じて、UFOを目撃した人がいたらいともそうするように、「UFO目撃報告書」を渡し、目撃の様子を詳しく書いてもらうことにした。それによると、彼（近藤君）が目撃したUFO



は円盤研究者の間で土星型円盤と言われているものであることがわかった。この土星型円盤というのは、近代宇宙旅行協会(MSFA)というわが国最高の円盤研究団体を主宰しておられる高梨純一氏が、昭和十三年その機関誌「空飛ぶ円盤情報」(現在は「空飛ぶ円盤研究」と改題されている)第一二号に「土星型円盤の実在は実証された」という特別レポートを発表しておられ、その実在は、国内の目撃例と海外での目撃例がピッタリと合致して実証されたというものである。

近藤君の目撃した土星型円盤は、土星の輪にあたる部分、つまり、リングの部分が回転しており、回転するたびにキン、キンという金属音を発していたということである。ここでハタと気がついた。前記の高梨氏が発表された「土星型円盤の実在は実証された」という論文の中にあるように、この土星型円盤というのは、リングの部分が回転するのである。はからずや、近藤君の目撃した円盤も、そのリングの部分が回転していたのである。当時中学一年生の彼が、土星型円盤の存在を知っていたわけでもないであらうし、また高梨氏の論文を読んでいたわけでもないであらう。この偶然の一致を、どう説明したらよいのだろうか……。なお、リングが回転するたびにキン、キンという金属音を発していたということであるが、このような金属音が聞かれたという実例は他にもある。それにもうひとつ、近藤君の目撃で特筆したいことは、UFOの周囲を浅黄色の光が取り囲んでいたという点である。これは、フォース・フィールドと呼ばれるもので、ハッキリとしたUFO写真が撮れないのも、このフォース・フィールドというものがある。UFOを取り囲んでいるために、いくらピンと正確に合わせても、ボケて写るためである。

では、ここで近藤君が提出してくれた報告書の中にある飛行スケッチ(図1)を紹介しましょう。このスケッチは、目撃者が不確かな記憶に基づいて書いているので、(一九七〇年に目撃したことを一九七三年に回想して書いているので)、読者もこの点を考慮していただきたい。さて、近藤君自身も言っているように、読者もその奇妙な飛行に気づかれたことでしょうか。それではその飛行の様子を分析して見ましょう。まず、わかりやすくするために、飛行経過にAからEまでの記号をつけて見ました。

図Aに到るまでは水平飛行ですが、これからほとんど垂直に下降して、図Bの位置にきています。もし、この物体が飛行機だったとしたら、こんな飛行をするときは、おそらく墜落するとき以外にはあり得ないであらう。次に急に加速して図Cの位置にきています。これも円盤特有の飛び方で、空中に停止している状態から、ものすごいスピードで視界から消え去ったという実例があります。もし飛行機がこんな飛行をやったら、その飛行機は完全にニュートンの法則を無視したことになります。次にスピードを下げて物体のリングの部分が回転を始めて、そのまま水平飛行をしている状態が図Dです。そして、図Eの位置で消えています。この点に関して近藤君は、その報告書の中で、「その物体自体が光を消し空間に吸い込まれるようにして消えた」と言っています。私が考えるに、この物体は消えるとき、ものすごいスピードを出して、人間の目には消え

たように見えたのではないかと思えます。実際、円盤のスピードは、ずばらしいもの「だと聞いています。この場合、このUFOの速度が光速に近いスピード(?)を出して、飛び去ったと仮定すると、もちろん人間の目には、一瞬にして消えたように見えるでしょう。

ここで近藤君の報告書の中にある一節を引用しておきます。「現代の科学ではなんとも説明できないことが、現に三年前に起こっているのです。私には、あれが地球上の物体ではなかったと思われてなりません」こんなに至近距離からUFOを目撃する機会はおそらく一生に一度もないであろう。もっと詳しいことがわかれば、今後のUFO研究に役立つであらうに。

最後に二、三気づいたことがあるので書いておきます。第一は米国最高のUFO研究団体であるAPROでは、UFOが目撃された場合、なぜそんな場所に現れたのであろうかという点について検討がなされ、目撃発生場所近くの重要な施設やその他が吟味されていますが、この大堂津の目撃の場合それにならって吟味していくと、まず鹿児島の内之浦にある東大ロケット実験場が考えられます。大堂津から南西四〇キロの地点にあり、わが国のロケット打ち上げのメッカでもあります。第二に円盤が至近距離を飛行した場合に

起こる「電磁的效果」があったかどうかということである。電磁的效果というのは、空飛ぶ円盤が近くの空に現れたとき、地上のテレビやラジオにひどい障害が入ったり、自動車のヘッドライトが消えたり、エンジンがかからなくなったりすることである。近藤君の目撃の場合、この電磁的效果が起こっ

UFOか人工衛星か？

ここにご紹介するUFOの記事は、昨年(一九七三年)一月二七日付朝日新聞宮崎版に掲載されたもので、目撃者(撮影者)は、私の後輩の日南高校地学部メンバーである。

さて、その撮影のいきさつですが、地学部で夜間観測(星の観測)を行っていた、一月二五日の午前四時過ぎに北斗七星付近に小さな輝く光を発見し、そのまま、斜め上に動き出し、南の空へ飛行していき、ついには山に隠れて見えなくなったというもので、そのとき、手元カメラがあった一年生部員が撮影したというものである。私は、三年生でクラブ活動にタッチしていませんので、残念ながらこのUFOを目撃することはできませんでした。しかし、その後、私の慎重な吟味の結果、このUFOは、人工衛星パジオとの誤認であるということが判明しまし

たかどうかは残念ながら知らない。しかし、折角このような千載一遇の出来事に遭遇しながら、すぐ詳しいメモや物体のスケッチを行わなかったことは、おしまれることである。しかし、目撃者は当時中学一年生であるので、そんな要求をする方が無理かもしれないが……。

た。以下、その根拠を科学的に述べてみましょう。まず、新聞に載っている目撃者の証言を引用しておきましょう。

「物体は時に止まったり、速度を変え、大きなカーブを描きながら飛んだ。二〇分ほどして二つに分裂して南に消えた」「光の強弱がある流れ星や一定の直線を飛ぶ人工衛星でないことははっきりしている。分裂したのは空飛ぶ円盤の母船から小船が飛び出したように想像もでき、全くミステリーだ」——しかし、これら目撃者の証言とは、相反して、この物体の写真を見ると、物体は直線飛行(厳密には直線ではない。このことについては、後で述べます)をしています。もし目撃者の証言のように、大きなカーブを描きながら、しかも、止まったり速度を変えたりしたのなら、その光跡は一直線には写らないし、本当に、そんな変

化をしたのなら、光跡に変化が見られるはずであるが、写真を見る限りでは、そんな変化は認められません。新聞の写真ではよくわかりませんが、私は、四つ切りに引き伸ばしたプリントで調べているので、正確です。ではなぜ目撃者の証言と写真に写っている光跡とが異なっているのだろうか？ それは人間の目はごまかせても、写真はごまかせないと言うことです。ここに「天体観測入門」(日本天文学会編)という本の中の「人工衛星の観測」という数ページにおもしろい記事が載っていますので引用しておきます。

「衛星を肉眼で見ていると、よろめきながら動いたり、ときどき止まったりするように感じることもある。これは、もちろん心理的なものだが、どんなときにこういうことが起こるのか調べてみるのも興味があることだろう」私も経験があるので、人工衛星を肉眼で見ていると、時に速度を変えたり、止まったり、またUターンしているように見えます。これは、あくまでも目の錯覚で、人の心理状態によっても異なるということで、極度に興奮していたりすると、一層そういう風に見えるそうです。

次に目撃者の証言の中に、「二つに分裂した……全くミステリーだ」とありますが、私が調査した結果、正確にはこの分裂は、だれひとりとして確認



●朝日新聞宮崎版に掲載された写真。黒い線はシン座

していません。そのように見えたというのが正しいようです。

さて、次に具体的な数値をあげて説明しましょう。まず、人工衛星の角速度、つまり一度の角度間を飛行するの、どのくらい時間がかかるかということですが、人工衛星「バジ奥斯」(衛星の名称)は、その高度が四〇〇キロメートルという他に類のないくらい高い所を飛行しているので、角速度は一度動くのに約一〇秒から一二秒くらいかかります。「天文ガイド」という雑誌に載っているバジ奥斯の写真より角速度を求めたところ、一度動くのに約一〇秒かかっています。つまり、月の直径(見かけの大きさで、角度で〇・五度)の二倍の距離を飛行するのに、一〇秒もかかるのですから、きわめてゆっくりとしたスピードです。そこで地学部が撮った物体の角速度を計って見ると約一二秒です。しかし、地学部の写真は、露出時間が正確にわかっていませんので、(露出時間に一分くらいの誤差がある)二秒の誤差など問題になりません。

次に、バジ奥斯の軌道傾斜角(衛星の軌道と天の赤道とのなす角)を調べて見ると約八六度です。地学部の撮影した物体の傾斜角は約八二度でした。ここに約四度の誤差が生じていますが、バジ奥斯は軌道変化が激しいということ、また測定誤差のことなど考え

ると、この四度の差もたいして問題になりません。これだけでも証拠として十分ですが、もうひとつ重要な証拠を述べましょう。「天文と気象」という天文雑誌を発行している地人書館が出している「天文観測年表」の「人工天体」(つまり人工衛星のこと)の欄に、バジ奥斯の一年間の出現予報が載っています。しかし、この予報と実際の出現時刻との誤差を調べた結果、予報の方が、二時間遅いことがわかりました。(つまり、予報で午前五時に見られるとなっていて、実際は午前三時に出現するということです。)

そこで問題の一月二五日のバジ奥斯の予報を調べて見ると、午前六時一〇分頃に南行(北から南へ向かって飛行)となっています。予報は実際見られる時刻より二時間遅いから、実際、この日のバジ奥斯の南行は、午前四時一〇分頃に見られるはずです。地学部が撮影した物体は、午前四時一〇分頃に見られ、北から南へ飛行、つまり南行しており、バジ奥斯と全く同じです。

さらに、私のこの「バジ奥斯説」を決定的にしたのが、二月二四日の「地学部の忘年会&コホーテク彗星観測会」でした。この日は一月二五日の物体の目撃者であるクラブの後輩たちが主体となって催したのですが、はからずも、二五日の真夜中、午前一

時四五分頃に一月二五日に目撃した物体と全く同じ物体が北斗七星付近から出現しました。この物体がバジ奥斯だとしたら、予報は二時間遅いので、予報では、午前三時四五分頃に出現する予定で。そこで調べて見ると予報時刻はズバリ、午前三時四五分となっています。

私は、以上述べた根拠は科学的でありしかも正確であることを疑わない。それでも、まだ私の吟味を疑う人がいるであろうか？

先に、後で述べると宿題にしておいた、「この物体が厳密には、直線飛行

「光る物体」を都城と日南で目撃

今年、一月二七日付宮崎日日新聞

(略して宮日)に、「夜空に光る物体」と題して、一月二五日後九時に、宮

崎県都城で多くの人が、夜空にナゾの光る物を目撃したという記事が掲載されました。早速、私は目撃者のひとりである鉄道郵便班員・浜田幸四郎氏に詳細を聞くために、手紙を出しましたが、すぐに詳しいご返事をいただき、調査に多いに役立ちました。

なお、この一月二五日には、日南(日南海岸で有名です)でもナゾの光体が目撃されており、都城で目撃された光体と、同一物体か否か興味津々た

ではなく、わずかにカーブを描いて飛行している」という点について述べて見ましょう。カーブといっても、写真を見ただけではわからないくらいのもので、光跡にそって定規をあてて見てわかる程度のかすかなものです。実はこのカーブもこの物体が人工衛星であるという、ひとつの証拠となったのです。いろいろと論理を展開していかなければいけなく、また、UFOとは直接に関係もないので、割愛しますが、結論は人工衛星の光跡写真はわずかであるが、カーブを描いて写っているということです。

るものである。

浜田氏の報告

都城での目撃者、浜田氏よりいただいた報告書をご紹介します。同氏からいただいた報告書は、宮日の記事の内容とほぼ同じです。

すなわち、今年一月二五日後九時都城駅において、西空から北東へ向かって飛行中の点滅する光体を目撃されたというもので、写真も撮られたが残念ながら、カメラにキャッチすることはできなかったというものです。

この光体は、青白色をしており、フ

ラッシュをたいように光り、そして消え、また、フラッシュをたいように光るといったように点滅し、ジグザグ飛行をしていたということです。

なお、飛行機の点滅のような赤色の光はなく、光が消えている間は全くの無物状態で、そこに何があるのかもちょっと見当がつかなかったと同氏は言っています。

日南での目撃

さて、この都城でのUFO目撃が報道されると、私は、すぐに目撃者に詳細を聞いたわけであるが、意外にもこの日、日南でも一個のUFOが目撃されていることが、後でわかりました。

すなわち、一月二五日後九時から九時半の間に(目撃者が目撃時刻をハッキリ覚えていない)、丸尾君という私と同級生だった人が、北東から東へ向けて、星のような感じの光体が、カメラのフラッシュをたいように光り、次に消え、また光るといふ風に点滅を行いながら、ジグザグ飛行をして、ついには山に隠れて見えなくなっただけというものである。なお、目撃時間は、三〇秒から一分間ぐらいであったということです。

その正体は何か？！

都城、日南で目撃された物体が、はたして同一物体なのか否かよりも、そ

のもののずばり、正体は何であったのだろうかという点が関心の的であるが、正体の吟味の前に同一物体か否かの吟味から行っていきたいと思います。

まず、同一物体かどうかを考えるに於いて重要なことは、その飛行形状の類似、物体の色(UFOの場合、速度に依りてその色に変化する)、この点を考慮しなければならぬ、物体の速度、目撃時刻の一致(これは目撃場所が近い場合)等々が考えられます。

そこで、両氏の報告書を読んでいただければわかりますが、共に「カメラのフラッシュをたいような光」という主旨の表現を使っており、これら別々に目撃された物体の光がきわめて類似していたことを示しています。

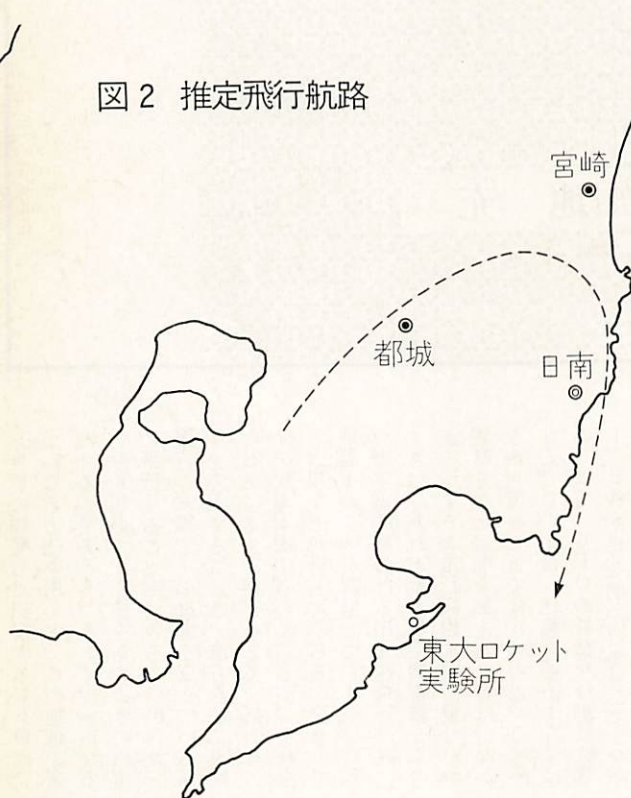
次に点滅の状態ですが、両者とも、フラッシュをたいように光り、また消え、そして、また光るといふ風に答えてくれており、共にジグザグ飛行をしています。そして、その光体の大きさですが、浜田氏は、星のようなもので、北極星(二等星)より少し大きいくらい、丸尾君は星のような感じと言っておられ、その大きさも似ています。

このように、飛行形状が類似している上に目撃時刻の方が、都城(浜田氏)で午後九時、日南(丸尾君)で午後九時から九時三〇分の間と、これま

た似ております。もし、同一物体であるのなら、目撃時刻から判断して、最初に都城で目撃され、次に日南で目撃されたと考えられます。

以上、このような類似点を考えていくと、この同者の目撃が単に偶然に別々の物体を目撃したとは、どうも考えられません。都城での目撃を報じた宮日の記事を読んでいくと、多数の人がこの光体を目撃しているということから、人目につく目立った光体であったのだろう。割合目立った光体であったからこそ、日南でも目撃されたのではないのでしょうか？　そしてもうひとつ。都城では、この光体は西から北東の空に向かって飛行していますが、日南では、北東から東へ飛行しています。日南、都城の地図（南九州）があります。日南、都城での飛行方向を書いて見ると、都城では地図に対して、右斜上へ飛行、日南では下に向かって飛行しています。これらが、同一物体と考えて、推定飛行航路を点線で描くと、何と自然なことであらうか！　こうして、いろいろと検討していくとどうもこれらが同一物体である可能性が強くなってきたが、はたして、その正体は何であったのだろうか？　これら都城と日南での目撃物が同一物体としか考えられないような証拠をいろいろ述べてきましたが、果たしてその正体は何であったのだろうか？

図2 推定飛行航路



目撃報告書を読むと、天文現象とは考えられない。

よくUFO否定者が、それは、人工衛星や流星との誤認だよということを言っているが、この場合はあてはまらない。つまり、報告書をよく読んでいただければわかるように、この物体はフラッシュをたいたように点滅し、ジグザグ飛行をしている。人工衛星の場合、無論点滅やジグザグ飛行などしない。流星もこんな飛行はしない。流星の中で特に明るいものを火球と言っていますが、この場合、火球とも考えられ

れません。

ここで、この物体を天文現象との誤認と考えるよりは、飛行機等の地上の飛行体と考える方が利口であろう。つまり飛行機は夜間点滅灯をつけながら飛行するからです。

ここで飛行機と考えても、二、三の疑問がわいてくる。つまり、飛行機の点滅灯の場合は、赤色の光があるが、浜田氏の報告にも丸尾君の報告にも、その物体は青白色であり、赤色など出てこない。そして、飛行機が点滅灯を消して、光を発していないときも、光

の残影のようなものがあるはずであるが、浜田氏は、光が消えているときはそこに何があるのか全然わからなかったと言っておられます。

ここに浜田氏からいただいた手紙の一節を引用しておきます。――「光り方は飛行機と同様点滅していたが、普通飛行機は赤色の光があるはずなのに、それが全然なかった。それに光が消えている状態では、何があるのかも判明できず、全くの無物状態のようだった」――はたしてその正体は何であったのだろうか……？

ここで、おもしろいことに気がついた。この一月二五日にUFOが目撃される前に、鹿児島の内之浦にある東大ロケット実験所より、数発のロケットが打ち上げられているのである。このUFOは、ロケット打ち上げを観察するために出現したのではないであらうか？　地図（図2）を参照してもらえばわかるように、このUFOの飛行コースから考えて十分考えられることである。あちらさんもむちゃくちゃに日本上空を飛び回っているのではなく、何かの目的を持って飛んでいるのだからと考えられるからである。しかし、これはあくまでも仮説である。

果たして、その正体は何だったのだろうか？　もし、その正体が空飛ぶ円盤だったとしたら、当夜何をしていたのだろうか……？

UFOの推進法について

不思議な飛び方をするUFOは
何を推進エネルギーにして飛ぶのか？

伊知地 充

世界に頻発して出現するUFOは、いかなる方法を用いて、この地球を訪するのであろう。そして、いかなる方法を用いて、空中をあのように自由に飛行することができるのであろう。既存の知識でその推進を支えている何かを究明することは、途方もなく困難なことである。何とかして一括したアイデアを案出するのであるが、それをいざ現実と照合してみると、決まって理論上のミスが露呈してしまう。UFOの宇宙間における超光速飛行の謎、または、われわれの航空機常識をくつがえすような飛行様相に、一定でかつ曖昧でない説明を加えることは、なかなか可能なことではないのだ、と痛感する。この上は、迂路を通るようではあっても、UFOの特徴を仔細に吟味し、比較的説明の容易なところから、段階を追って推理していった方が無難であろう、と私は思う。そこで、便宜の上からも、UFOの具体的な推進法のアイデアを提出する前に、UFOの諸特徴およびUFO現象に伴うところの諸問題を摘出し、それについての私なりの分析、考察を述べてみようと思う。

1. UFOの推進の特色として、第一にあげなくてはならないのは、その重力を無視したような運動である。言い替えば、UFOは、重力作用を無に帰して空中を飛行しうる物体なのである。そこで、遊星の重力的な引力によ

る下向きのフォースに逆らって、ある重さの物体がある距離位置まで引き上げることを考察してみよう。ある重さを持った物体を持ち上げるのであるから、必然的に仕事をすることになる。重量が大きければ大きいだけ、正比例して、それがある距離の位置まで上げるのに要する仕事量は増大する。そして、同じ重量の物体を上げる場合については、上げる距離が大きければ大きいだけ、なされる仕事量は増大する。

ここにおいて、問題となるのは物体の「重さ」である。「重さ」というのは、単にわれわれが重力作用によって受ける下向きのフォースの大きさのこととを、そう呼称しているだけにすぎない。下向きという「向き」は重要な意味を持っている。というのは、フォースはその「向き」が本質的に意味を持つところの物理的変数の一つであるからである。つまり、フォースの向きが下ではなく上であるとき、物体は遊星から上向きのフォース、すなわち反発力を受けたことになるのである。とするならば、UFOは、遊星の重力を逆利用して、何らかの方法で反発力を得ているのではないかと推理される。われわれ地球人は、これまでに、重力に対してさまざまな分野からごく粗末な抵抗を継続して試みてきた。だが、重力が何であるかを、われわれはまだ確認していない。重力の解明は、UFOの推進構造を知る上において、最も基本的なものであるし、円盤の建

造者である宇宙人も、この段階を経てこそ宇宙船を完成することができたはずである。重力が何であるかを完全に理解したときが、重力を人為的にコントロールできるときなのである。

2. UFOは、飛行機の航空理論を完全に無視した飛び方をする。つまり、急激な方向転換や急停止、またはジグザグ飛行や波状飛行などに見られるように、無慣性の運動が可能なのである。われわれが運動の第一法則に固執しようとするなら、明らかにそれは未知の推進原理に支えられているとしか言いようがないのである。しかし、推進する限りにおいて、物体に何らかの力が働いているのでなければならぬ。そこで、円盤は機内で作り出される「小帯」のようなものに向かって、いかなる方向にも加速されうるのだ、という推理が成り立つ。

3. UFOには、空気抵抗および空気摩擦などの障害が発生しない。UFO研究家のなかには、円盤は高速で飛行するために機体表面はかなり加熱されるはずだ、と唱えている人があるけれども、このようなことを宇宙人が解消してはいないはずはない。防止の対策案としては、たとえば、機体の周囲に特殊なフィールド（強力な電磁場もしくは真空場など）を作り出すという方法が考えられる。大気による抵抗がなければ加速が容易になるし、摩擦が解消されれば機体の損傷および搭乗員のストレスが回避できる。

4. 無音である、ということもUFOの顕著な特徴である。彼らがいかなる動力を用いているかは明らかでないが、爆音を生ずるジェット推進などではないことは明白である。おそらく、機体にエンジンなどは内蔵していないのではないかと推測される。そして、彼ら宇宙人は、未知の、あるいは地球人に知られていないが利用法は知られていない自然力を功みに利用しているのではないだろうか。どうであるにせよ、騒音を発しないということは、航行を快適なものにするためには、不可欠な要素であるだろう。

5. UFOは、しばしば急に視界から消滅したというように観測される。これは一体どういう物理的效果に起因しているのだろうか。一部の人間が主張するように、円盤が非物質化したためであろうか？あるいは、特殊なシステムによってテレポーテーションを行ったためであろうか？または、円盤を操縦しているのは四次元生物であると仮定する人間が言うように、物質からエネルギー体に転移したためであろうか？しかし、私はこのような意見に賛同する意向はさらさらない。というものは、以上のような短絡的ともいえる見方をしなくとも、別な見方で十分説明がつくからである。つまり、理由は少なくとも三つ考えられる。一つは、円盤は無慣性飛行が可能なので、光速に近いスピードで、スクランブルを行ったためである。もう一つは、機体も

しくはその力場が非常に高振動を起こしたためである。またもう一つは、機体の力場の強さが変化することによってそのスペクトルが次ぎつぎに移行していき、ついには人間の眼に見えるスペクトルを通過してしまつたためである。ご存知のように人間の可視範囲は、四〇〇〇〜八〇〇〇オングストロームまでであるから、それ以上に波長が長くなると、もう見ることはできなくなるのである。

6. UFOは多くの場合、コロナ状の周光を伴っている。なぜそのようなものが伴うのかといえば、円盤の力場ではないかと考えられている。つまり、観測されるUFOのほとんどは、フィールド推進機関の宇宙船であつて、機体の周囲にフィールドを作り出し、そのフィールドを遊星の持つフィールドと相互的に作用させ、進行するのに必要な力を得ているのではないかと推測されている。彼ら宇宙人がいかなるフィールドを用いているかは確認されていないが、それは推進を可能にするうえにおいて重要な役目を果たしている、と推測されうるのである。

米国の科学者たちの一団は、次のように語っている。「UFOが一種の宇宙船であるということに、われわれは疑いを持っていない。それらは、惑星の重力の場を歪め、または変形することによって高速移動を可能にしているのだ」と。つまり、科学者の間でも、UFOが一種の力場によって推進力を

得ているのだという考えが定着しつつあるのである。UFOは、地球やその他の遊星が重力および磁力の場をもっているように、それ自身の場を作り出して、重力を克服しているのである。力場の正体としては、多くのデータから、強力な電磁場ではないかという見方が最も有力であるようだ。

7. UFOは、光を放つ物体、もしくは色光をもつた物体として観測される。これは昼間ならば、太陽の光が機体の表面に当たって反射したのだ、というふうに見えることができる。しかし、夜間の場合は、赤やオレンジ、緑その他のスペクトルを発するので、円盤の力場がスペクトルを放出しているのだ、というような解釈をするのが妥当であるだろう。円盤の力場は、昼間はほとんど不可視であるが夜間には可視的なものとなるのである。スペクトルは円盤がそのスピードを増すごとに変化する。したがって、推進に必要なエネルギーの強度に関連があるのだろう、と推測される。別なエネルギーの強度に関連があるのだろう、と推測される。別な見方としては、力場の色光は、円盤が飛行する際に、空気中の組成分子（酸素、窒素、アルゴンなど）および水蒸気や浮遊塵などと力場が接触するために生ずる、という解釈がある。つまり、基底状態にあったそれらの分子、原子が、円盤の力場に遭遇することによって、エネルギーの一部を得、電離や励起を引き起こし、ス

ペクトルを生ずるのである。

8. UFOは、非常な高速度で飛行する。しかも、遠距離の宇宙間を横断する場合には、超光速飛行をしなければならない。こう考えた場合、スピードによる人体への物理的ダメージの惹起を、彼ら宇宙人はどうやって防止しているのだろうか、ということが疑問になる。一般に信じられている説を支持するならば、そのような条件下では、機体はおろか肉体までも、微粒子に分解して、エネルギー化してしまうのである。したがって、宇宙人は当然そのような困難を回避するためのシステムを導入しているはずである。

スピードから人体を保護するような機関としては、「重力場機関」理論が考案された。しかし、これはこれで多くの利点があるにもかかわらず、多くの致命的な欠陥を生ずる結果になった。だが、われわれが最も注目してよいポイントが存在する。すなわち、「フォースが、機体だけでなく、内部の搭乗員の各細胞、もっと詳しく言えば原子の一つ一つに作用し、機体と同方向に同じ大きさの加速度が加えられるのならば、いかなる推進力を用いても、ストレスおよび危険は回避できる」ということである。ただ、従来の重力場理論を修正すると、加速するフォースは、人工的に作られる引力場もしくは反力場ではなく、自然のフォースでなければならぬ。つまり、円盤の作り出すところの力場は、自然のフ

ォースを効果的に引き出すところの手段でなければならぬ、ということである。

9. UFOは、加速度を増すときとか、あるいは極度に減速したときなどに、回転することがある。方向転換する場合以外に回転運動を行うということは、われわれには不合理であるように思われる。しかし、それが不可避のものであるとするならば、少なくとも二つ、それについての見解をあげるべきである。一つは、円盤が動揺をきたした場合に、自動制御機構が働いて、機体の姿勢を整えるために行う自転運動である。そして、もう一つは、円盤の周囲磁場が回転するだけで機体はそのまま、とする考え方である。

10. UFOの特色は、まだまだ摘出することができず、最後に一つだけ、UFOの推進力を解くカギになりそうな、一現象を提示しよう。すなわち、円盤が接近すると自動車のエンジンが停止したり、ラジオが自発的に空電を発したりするという、いわゆるEM効果がある。点状装置コイルに強力な電磁場をかけると、実際に自動車が動かなくなるといふことは、よく知られていることである。ラジオが突然おかしくなるといふのも、これはサイド効果と呼ばれるものであって、イオン化放電、もしくは電磁誘導が原因しているのかも知れない。円盤は、電離層内において活動するときは、強力な電

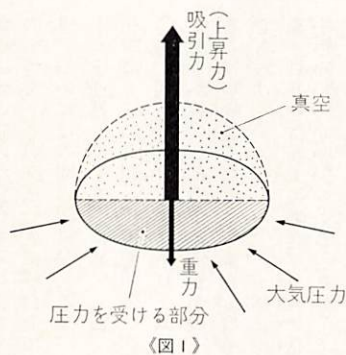
磁力を利用して推進するらしいから、円盤が放出する荷電粒子が自動車などの上空に多量に侵入するためであろうと推測できる。

それにしてみても、円盤の電磁場は、機体の推進力なのであろうか？ それとも、空気抵抗や空気摩擦などの障害を防止する手段なのであろうか？ 電磁力が推力として用いられているのならば、それは地球重力場から浮動力としての反発エネルギーを得、重力を克服しているのだ、と考えられる

I 遊星大気圏内における飛行

①大気圧推進機関

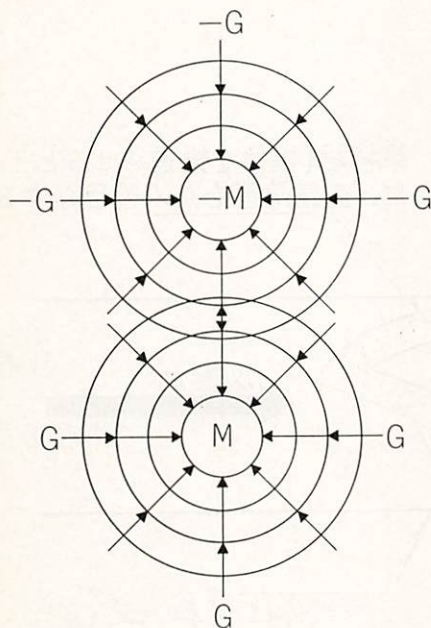
大気圧推進は、簡単に言うならば、



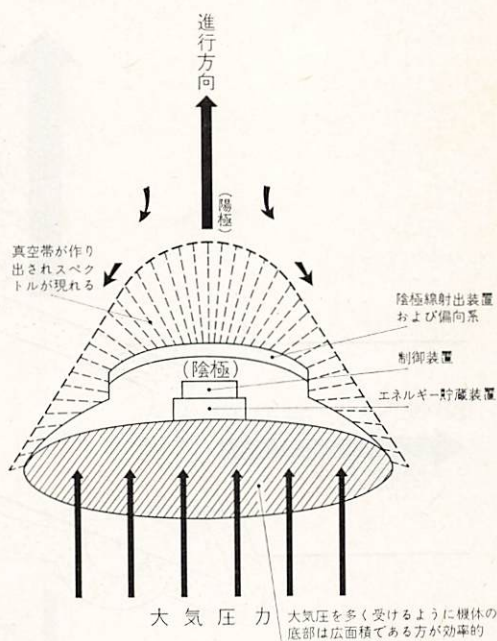
だろう。

以上、UFOの推進の特色や諸現象を、仔細に分析、検討してきたが、いよいよ私の推進法のアイディアを提出し、読者のご批判を請いたいと思う。なお、便宜をはかるため、UFOの遊星大気圏内における飛行、近隣宇宙間における飛行、そして遠距離宇宙間における飛行というふうに、区分して推測してみることにする。

自然の大気圧力を利用したものである。本誌において議論がさかんな重力場推進機関は、質量の引力作用を応用したものであるが、大気圧推進法は、真空の吸引作用を応用したものである。つまり、円盤の機体上部に人工的に真空状態を作り出し、気圧を極度に低くすることによって、気圧を機体の底部に十分受け、推進エネルギーを得るというものである。この推進機関の原理は、図に表すと上のようになる。機体の上に真空状態を作るには陰極線(電子線)を用いることができる。陰極線は周知のように空気分子を破壊し、真空化させる働きを持っているので、これを射出するわけである。しかし、これだけでは真空の方向や大きさ、あるいは形状を操作することがで



《図3》



《図2》

きないので不十分である。そこで、電子ビームを集める役目をする陽極を進

行方向に作る必要がある。機体の内部から、ある角度より陽極線を射出しな

②単極場推進機関

これは、反重力と磁気力によって推進されるように設計された機関である。つまり、負エネルギーの反重力作用と、遊星の磁気力とをミックスして利用した推進法である。

推進を可能にするには、まず遊星の重力作用を克服することを考えなくてはならない。そこで、遊星の重力を逆利用することが想起される。

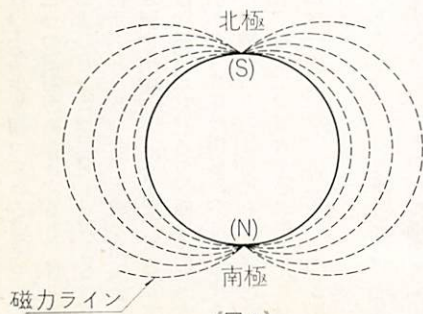
地球はプラスの質量を持った天体である。したがって、プラスのエネルギーを放射して物体を引きつけていることになる。これが、つまりは引力である。だが、もし物体がマイナスの質量を持っていれば、地球はそ

ければならない。陰極と陽極との間に高電圧をかけてやると、陽極に入射した電子の量に比例した真空状態（真空帯）が作り出せる。真空帯は、空気抵抗などの障害を回避する働きを兼ね持っているが、望ましい結果を得るためには、ある程度の幅を保っておかなければならない。したがって、電子ビームを電界もしくは磁界によって曲げる役目をする偏向系を装置する必要がある。また、真空帯の密度を自由に転移させるために陰極にかかる電圧を変えて電子ビームの強度をコントロールする制御装置が必要となる。

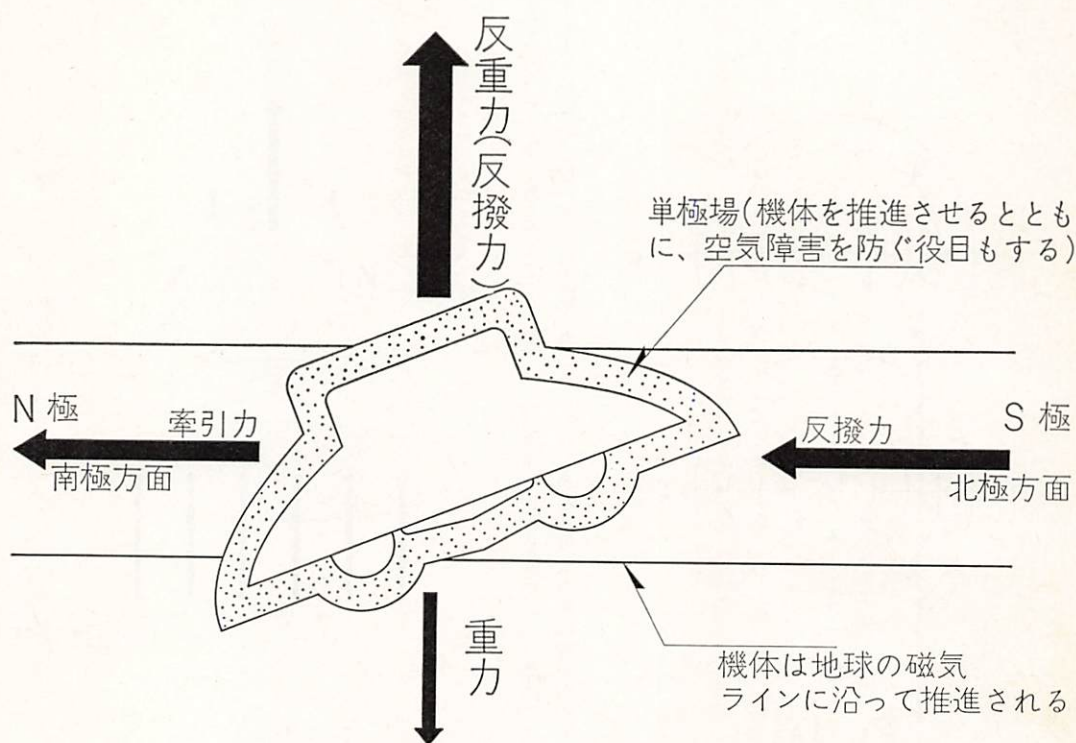
なお、このシステムを用いれば、大気存在する遊星内ならば、どこでも有効に作動することが出来る。

この物体を逆に反発することになるであろう。というのは、正のエネルギー物質と負のエネルギー物質とは、互いに反発し合うからである。

図3に注目していただきたい。これは、質量Mの物体と質量Mの物体が相互的に作用し合っているという設定によって書かれたものである。質量Mの物体の重力線と、重力ポテンシャル領域が、質量Mの物体のそれと交叉しているのがわかる。これによって明らかなのは、正物質と負物質とは反発し合う関係にあるということである。そういうわけで、物体は、己れの質量を負の状態に移し変えることによって、反重力を可能にすることができる。そして、円盤がマイナスの質量（エネルギー）状態になっているならば、それはマイナスの重量を持っていることに



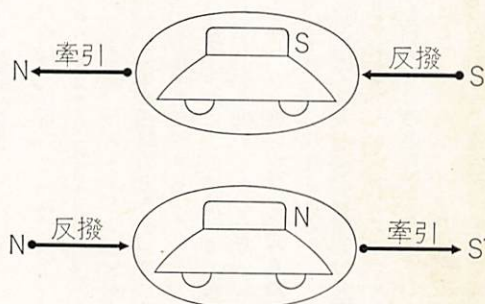
《図4》



なり、わずかな推力を与えるだけで、高速飛行が可能になるのである。さて、反重力が可能になったところで、今度は、水平飛行を可能にしなければならぬ。私は、これもやはり、自然力に依存して推進力を得ることができるであろうと思う。

地球の任意の地点に磁石の針を置くと、およそ北極の方角を指す。これは地表面やその付近の空間が一種の磁場をなしているためと考えられ、これを地球磁場という。このような磁気が存在するということは、地球自身が一つの大きな磁石のように磁気を持つからだと考えられている。

磁石にN極とS極があるということ



は、小学生も知っている事実である。二つの磁石があるとすると、NとN、およびSとSは反発し、NとSは互いに牽引し合う。今、地球の北極近くにS極、南極近くにN極があるとすれば、磁気コンパスのN極は北極の方に引かれ、S極は南極の方に引かれるので、磁石の方向は南北を指すことになる。そして、両者を結ぶ磁力ラインが地球付近の空間に存在することになる。

ところで、この磁極同士の反発力と牽引力とを、UFOの推進力に利用することができる。つまり、機体の周囲にN極かS極かの力場をつくって、地球のどちらかの磁極に牽引されるようにするのである。単極が作り出せるかどうかはわからないが、前述の負エネルギーによる反重力と併用すれば、地球の磁力ラインに沿って推進することができるにちがいないのである。

UFOがその遊星の磁気ラインに沿って推進されるというアイデアは、決して新奇なものではない。これと同じような推進法は、アダムスキーの著書にも散見できるし、ニューメキシコのコンタクトマン、機械工のポール・ヴィラも、彼が会見した宇宙人から「われわれの宇宙機は、磁気の力線に沿って進行し、高速飛行を可能にしているのだ」という円盤の推進法についての回答を得ている。また、科学者の間でも、この方法を支持している者が少なくない。

II 近隣宇宙間における飛行

③重力コントロール型推進機関

これは遊星の重力をコントロールして、近隣の宇宙間を光速に近い速度で飛行する方法である。重力が何であるかを知らないのに、重力をコントロールする装置を案出するというのは、いささか変なことであるが、これはあくまでも仮定の領域内での結論である。それに、現に、重力の本質に肉薄するような新理論が生まれていないわけではないのである。私はこの種の推進法については二つ考案してみた。牽強的に結論にもっていった個所があると思うので、十分検討して欲しいと思う。

(A)重力とは、そもそも「質量」が大きな役割を演じているものである。質量がなければエネルギーは存在しないし、したがって重力も存在しない。だから、重力の作用から逃れるためには、物体の質量がゼロかもしくはマイナスであればよい。そこで、負のエネルギー状態に、物体が転移できるとするならば、物体と遊星との間にはマイナスの重力、つまり、反発力が生じることになる。

粒子も反粒子も、エネルギー揺動という固有振動をしており、これがブラスのエネルギーとマイナスのエネルギーの往復運動であるということは、イ

ギリスの理論物理学者ディラックによって確かめられた。彼によれば、「往復の最初の半サイクルは正エネルギーにあり、残りの半サイクルは負エネルギーにある。そして、平均として正のエネルギーにある。つまり、前半の振動成分が勝っているのである。」このように、正エネルギー振動が勝っている状態にあるとき、物体は遊星の重力によってF向きのフォースを受けることになる。だから、物体を負のエネルギー状態に変えてやれば、反重力が得られるのである。普通の天体、たとえば地球や火星は正の物質であるから、これに反発されるためには、機体を負エネルギー状態に保ってやればよいのである。そして、遊星が質量の振動によって空間を歪め、重力場を形成しているように、円盤も負エネルギーによって、反重力場を作り出す。結果的に両者のフィールドは交叉して、推進するのに必要な反発力が得られるのである。シャーマーと会見した宇宙人は、「可逆電磁エネルギーによって物質をコントロールし、重力を克服するのだ」と言っている。これは、非常に強い電磁場を円盤の材質に作用させ、負のエネルギー状態を作り出す、ということを示しているのではないだろうか、と思う。

(B)第二の推進法は、静電気を利用したものである。これについては重力についての仮定が伴うことになる。

英国の数学者、バートランド・ラッセルはかつて重力に関して「物質が帯電された場合、どのように作用し、その物質がどのような状態、条件Fに帯電されるかを知ることが、われわれが知らねばならぬことの全てだ」と語ったことがある。これはアインシュタインの「統一場理論」の重要性を一般に知らせるための発言であったが、これは重力が何であるかを説明する上において重要なキーポイントとなるものである、と思う。

ゴムや空気などのような絶縁体を帯電させると、その中に静電場が作られる。そして、その静電場の働きによって、求心力が生じる。重力も一種の求心力である。そこで、重力とは遊星の静電力による引力作用ではないか、と私は推測するのである。Gの値は、空間中の物質とエネルギーを加えたものの総量と分布とによって決定される、というのは、一般相対性理論の結論であるが、空間中の物質が帯電されているために重力が存在すると考えられるのである。

われわれが電気と呼称しているものには、陰性のものと陽性のものとがある。

III 遠距離宇宙間における飛行

電子は陰性の帯電粒子(波)であり、その片割れの陽子は陽性である。重力が静電気の効果によって生じるものであるならば、われわれの住んでいる地球も陰か陽の電気を帯びていることになるだろう。アダムスキの著書によると、この太陽系の中心である太陽は陽性であり、その周りを回転している惑星群は陰性であって、太陽から引力を受けているという。とするならば、電気の原理の法則を応用して、重力をコントロールすることが可能はずである。というのは、電気の同極同士は互いに反発し合うが、異極同士は互いに牽引し合うという性質を利用して、推進力を得ることができであろうからである。すなわち、地球の重力場を脱出するときは、船体を陰のエネルギーで保って反発力を得、いったん重力場を離れた後は、プロセスを逆にして、次ぎに向かう遊星の重力場に牽引されるために、陽のエネルギーを作り出すのである。莫大な電子を放出し、強力な電磁場を機体にするというのは、遊星の重力場に反発することになるし、また陽電子(反電子)の電磁場を作るといのは、遊星の重力場に牽引されることになるだろう。これは、シェアラーの会見した宇宙人の語った宇宙間推進法と合致すると思われる。

もし、円盤が他の銀河系から来訪してくるのならば、彼ら宇宙人は時間空間という重要かつ困難な問題を完全に解消していることになる。そして、彼らは自分の思うままに時間空間をコントロールして、大宇宙を探訪し、旅行を楽しんでいるに違いない。われわれは円盤の存在を絶対的に信じているが、この時間と空間という問題が大前提としてあることに気づくと、自分の思考力の限界を改めて痛感せざるを得ない。そして、たちまちそれ以上究明の足を踏み入れることを逡巡してしまう。地球の科学および技術は、過去において様々な時間空間を踏破し支配してきたが、宇宙レベルになって挫折を余儀なくされてしまうのであろうか？

そこで、こう反駁する者があるう。すなわち、「われわれは既に時間というものが存在しないものだということを知っているのではないか」と。なるほど、注意深く思考すると、「時間」というものは「空間が存在することによって随伴して現れる観念的な物理量ではない。まさに時間は人間の意識が勝手に捏造したもの」にすぎないであろう。われわれ地球人は、自分で時間というものを想定している間にかそれに束縛されてしまっているのである。時間には取るに足りないものであった。

では、「空間」の場合はどうであろうか。空間というものが物質の別称であって、いわゆる無の領域ではないという事実をわれわれは知っている。宇

宙空間のほとんどは真空であらうが、そこは無ではなくてマイナスのエネルギーの電子で完全にいっぱいになっているということが、イギリスの物理学者ディラックによって予測されている。そして、既存の恒星間距離の測定は誤っており、他の恒星はわれわれの予測よりはるかに近いと仮定してみても、空間（距離）にまつわる困難は依然として解消できないものがある。というのは、いくら従来の測定距離を否定してみても、光年以下であるということは考えられないからである。

④虚エネルギー推進機関

「虚エネルギーによる宇宙横断」という仮説を展開する前に、吟味しておかねばならぬことが一つある。それは、虚エネルギーの担体であるところの物質、もしくはそれに似た振るまいをする実体はあるだろうか、ということである。われわれは虚エネルギーという言葉を知り、条件反射的にタキオンという粒子を思い浮かべるが、もっと実際のかつ身近なもので、それに類似したものはないであろうか。人間の「意識」あるいは「心」とかいったものは、虚物質的なものである、と私は思う。意識というものは、われわれがこの世に生誕したときからずっとわれわれを支えて成長の基本条件となっているものである。それは色も形も持っていない非物理的なものであるが、まぎれもない実体である。

科学者の猪股修三氏は、「私は、意識タキオンと置くと、すべてうまくゆくような気がする。つまり、存在の様式が奇妙なことに意識とタキオンは同じレベルなのです」と語っている。意識が超光速粒子であるタキオンと同じような性格をもっているとしたら、円盤が意識の法則に基づいたシステムを用いて作動する、と考えてもおかしくはない。つまり、意識は自由であって、意識的な想念の速度には限界がないのである。円盤がいわゆる想念エネルギーによって推進するというような推論は敬遠されるべきであらうが、その原理を応用して推進すると考えても不自然ではないであらう。

物体を加速するためには、他からエネルギーを与えなければならぬ、というのはいわれわれが知るところである。その場合、物体は与えられたエネルギーを質量の形で保存するのであるから加速されるにつれて物体の質量は増していく。われわれが日常扱うスピードにおける質量の増加は、光速に比較して非常に小さいので無視してよいが、光速に近づくと、問題になってくる。というのは、速度を光速に近づけて加えていけば、ローレンツ因子が介入してきて、物体の質量が無限に大きくなって加速に困難が生じてくるからである。したがって、無限大のエネルギーを持つてこないかぎり、物体は光速に達することができない。

しかし、物体を加速するために用い

られるエネルギーが「虚のもの」であったならば、どうであらうか。相対論において考えられていたエネルギーは「正のもの」であったが、「虚」である場合、どういう事態になるであらうか。事態はまったく正反対になるであらう。つまり、虚のエネルギーは虚の質量を保存するのであるから、速度を加えるにつれて物体の質量は減少していくのである。そして、ついにはゼロを越え、質量は虚数となるであらう。そうなる、物体はもはや加速度を増すことに困難は生じなくなり、楽々と超光速飛行が可能になるであらう。アインシュタインの相対論に矛盾することなく、光速の壁を破ることができるのである。

—UFO情報テレフォン・サービス—

05392-5-2615 番

- 国内UFO研究界の最新情報を、いち早く紹介。情報化時代のトップを行くテレフォン・サービス。UFO界「足入」15年のベテラン平野が電話でお答えします。〈無料サービス〉
 - ただし、午後11時から午後11時30分までの30分間のみに限ります。(それ以外の時間は一切受付けません)。土・日曜日はお断わり。
- ユーホロジストクラブ 平野泰敏**

鹿児島県で撮影されたUFO

喜入町の崩中さんが写す

鹿児島県指宿郡喜入町の公務員、崩中幸一さん（29）は昨年一〇月下旬にUFOらしき物を撮影して以来、しばしばUFOを目撃・撮影し、すでに多数の写真とレポートを本誌編集部へよこされた。なかには撮影時に物体に気づかず、現像後に写っていたというのもあるが、数名で不気味な光体を確認して同時に撮影したというのも数点ある。氏によると薩摩半島はUFOの飛行コースにあたっているのではないかといい、紙面の都合により、ここには目撃して撮影したもののみを数点紹介する。

なお氏はUFO観測に非常に熱心で、そのレポートの内容はきわめて冷静かつ客観的に書かれてあるが、都合により全文は掲載できなかった。これら一連の写真は一月八日付南日本新聞、一月二一日付読売新聞、西日本新聞などにも掲載されて状況が詳しく報じられており、九電鹿児島電力所送電課長のコロナ放電否定説も掲げている。



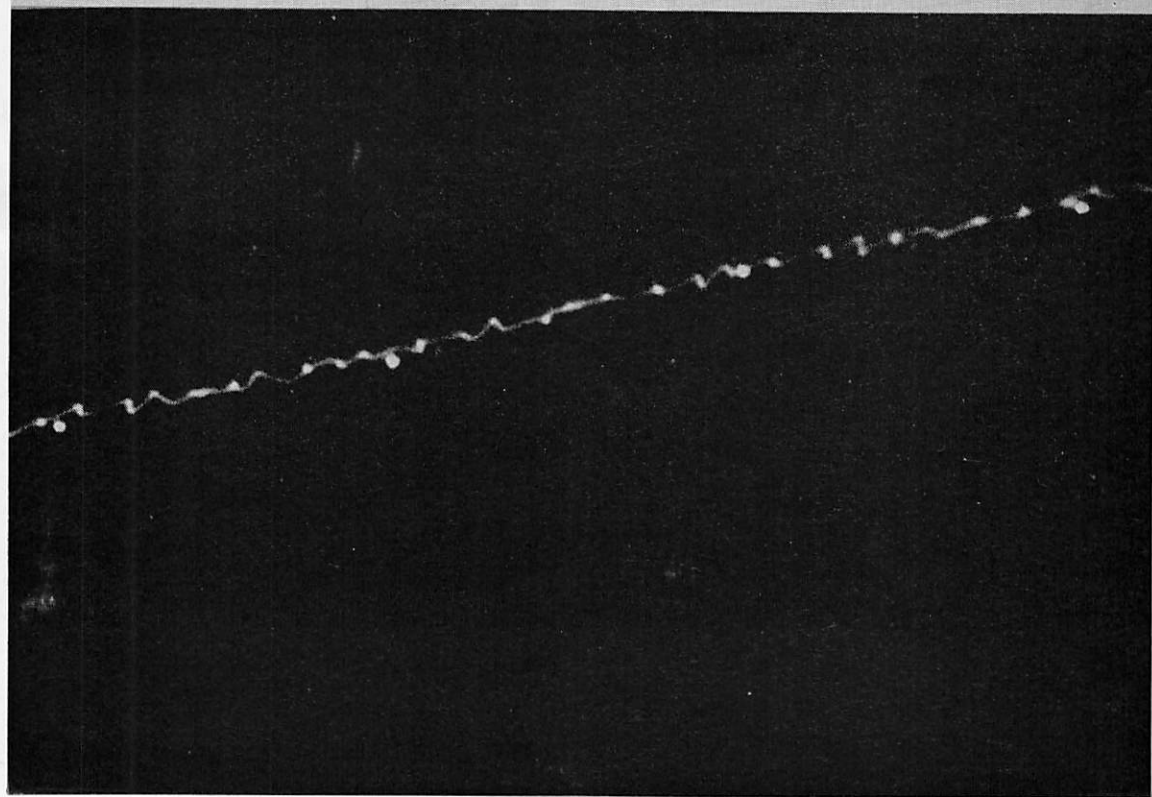
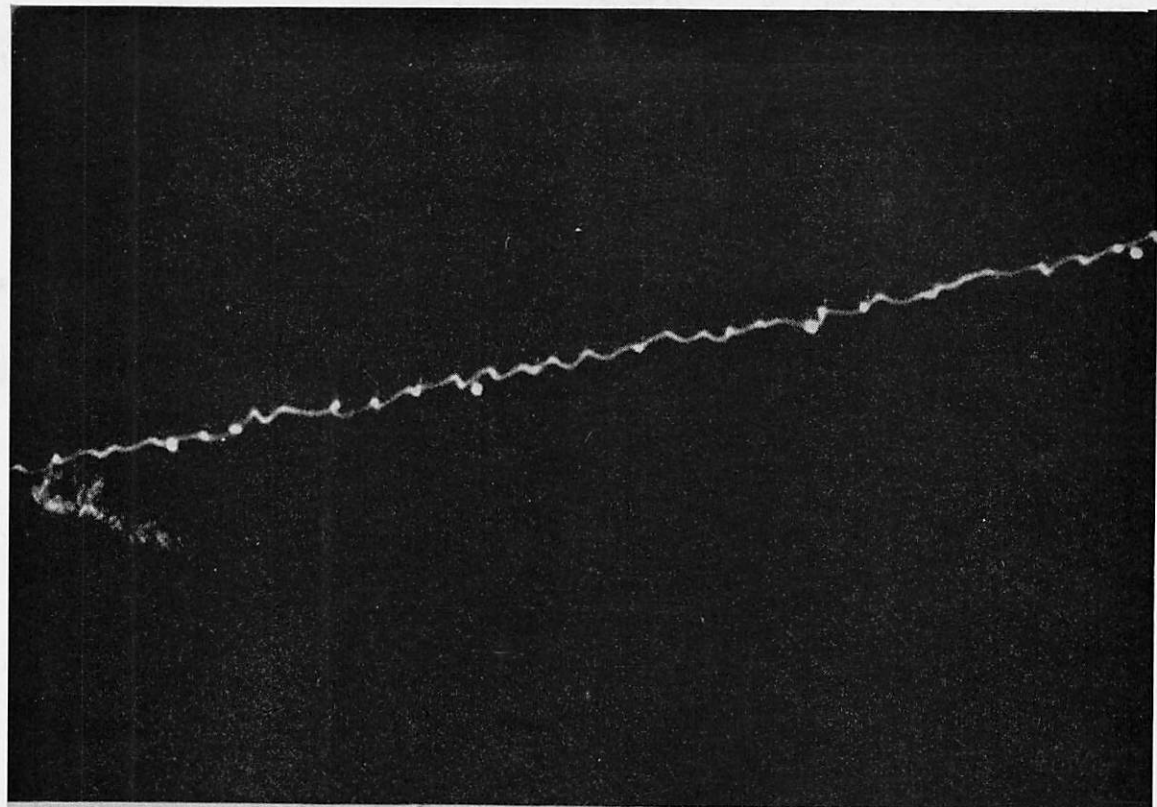
昨年10月18日午後10時12分頃、薩摩半島・指宿スカイライン近くの標高460メートルの山頂から夜空に出現した謎の発光体を目撃した崩中さんは、かねてから三脚に固定しておいたカメラで撮影に成功した（上の写真）。

同夜は午後6時50分頃、上空を西から北へ動き、更にUターンして鹿屋方面に没した発光体を確認。そのあと写真館経営の南和義さん（25）夫妻と農協職員の弓指ミズエさん（23）が同行して山頂へ登り、待機するうちに7時6分、強烈な光を放つ物体が西から北へ飛び、更に10時12分までに7回も同じような現象を一同で目撃して、写真に撮ったという。上掲の写真撮影の直前のみ、ジェット音とは異なる怪音が約2秒間響いたため、弓指さんが崩中さんにしがみつき、そのため物体がかなり遠ざかってから撮影した。光は鈍いオレンジ色で、目前で新幹線ほどのスピードで鋭角ターンをしてから山の斜面に沿って降下して行った。大体の輪郭は三角形であったが、闇夜のため距離は見当がつかなかったという。

（コニカF TA・F 200ミリ・約 $\frac{1}{500}$ 秒）

なお本誌が崩中さんと12月14日に電話連絡した際、その話によると、12月11日に喜入町で望遠鏡による発光UFOの観測を行ったところ、光体は大体に3角形に見え、底辺が強く輝いており、頂点から左右の2辺に沿って数10個のランブ状の光点がチラチラと光っているのが見えたという。氏は自衛隊鹿屋航空基地に照会したり、その他綿密な調査を行って、のべ数10個目撃した光体の大部分の出現時刻は飛行機の航行時間帯と一致しないことが判明したと述べている。

更に11月7日午後10時8分、崩中さんは喜入町前之浜と崩中間の砂浜で1個の光体がジグザグで飛ぶのを同行の川口健一さん（NHK記者）と南和義さん（写真業）と共に目撃、撮影した。この写真は多数の光体ではなく、1個の光体が左上から降下して右の方向へ点滅しながら飛ぶ光景が露出約5秒で1コマのネガに写ったものである。（コニカFT A・ヘキサノンズーム200mm・絞りF3.5・ネオパンSS・三脚使用）



上の連続2枚の写真はその後11月20日隣家を訪問した帰り、午後8時54分から59分までの間、角度30度で西の空を南から北方へジグザグ飛行する点滅光体を発見した崩中さんが、自宅へかけ上がり、セットしてあったカメラを三脚ごと持ち出して撮影したもの。日石原油基地付近上空で方向を東に変えて鹿屋市方向へ消えた。同時目撃者が他に4名いる。(コニカF T A・広角24mm・絞りF2.8・露出各約4秒)

● 連載科学記事

宇宙・引力・空飛ぶ円盤

イギリス工業デザイン協会会員

レナード・クランプ

(5)

K 空飛ぶ円盤の機構



K 空飛ぶ円盤の機構

これまで空飛ぶ円盤に関する情報や、円盤によって示唆されている理論などを述べてきた。そして観測された事実や報告類から裏付けされる重力に関する一歩進んだ理論を展開した。この段階にまで来たからには、我々は「アンバランスな」重力場を生み出すかもしれない「機械的な」必要条件をある程度まで検討してみる立場にある。

前章ではいわゆる超能力的状態下で見られる放射物によって重力が克服され、または「中性化」される様子を述べたし、更にその放射物の形成は白い光に対して極端に感じやすいことも述べた。しかしまだ言及していないのは、ある条件下では逆に光が高周波または電子ビームによって変調されるのかもしれないということである。

そうかもしれないということは今までに述べた基本的創造理論から考えられるのである。というのは、重力、超能力的な放射物、光線、電子ビーム、超音波などは、例のエーテル的放射線の異なる「あらわれ」にすぎないからである（第13図）。したがって次のようになる。もし

第13図



重力がこのエーテル的放射線の一つの「あらわれ」にすぎないとすれば、適当な条件下で他の「あらわれ」のどれかを用いるか、または適当に組み合わせることによって、図に示されるような「超自然的な」すなわちもっと高次な振動状態を生み出して、重力を遮断できるかもしれないということである。

さてこの基本的理論（注Ⅱ万物はエーテル的な創造波のあらわれという理論）に重点を置くのに証拠が何もないということになれば、読者がこれを無視されるのはもっともなことであるが、これは的はずれである。なぜならこの理論はまだ物理学の諸法則で説明されていない自然現象の多くの面によって裏付けられているからだ。

重力は光の変調によって遮断できるかもしれないと述べたが、この説を裏付ける有力な証拠は存在するのである。そしてここで再度言わなければならぬのは、今述べた自然現象は最近検討されているということである。次にそれを紹介しよう。

有名なウィーンの物理学者フリクス・エーレンハフトはある実験を行った。これはカイネマティックス（注Ⅲ力を加えないで物体を動かすこと）の研究者にとって一つのインスピレーションを与えるかもしれない。

エーレンハフトと同僚のエルンスト・レーガーは、チリの微小物が日光にさらされると回転する傾向があることに気づき、これには重要な

意味があることを証明した。二人は研究室内でこの現象をつくり出した上、写真に撮ることに成功したのである。エーレンハフトは空気を完全に抜いたガラスのフラスコの中に石墨の粉を入れて、これを太陽の集中光線にさらしてみた。するとただちに多量の粉がフラスコの底から舞い上がり、長円形、円形、螺旋形などを描き始めた。肉眼ではっきりと見えたのである。光線を弱めるか遮断すると同時に現象も停止する。一五分の一秒と一〇分の一秒で写真を撮った結果、微粒子は軌道を描いていたばかりか、各粒子が自転していたことも判明した。

エーレンハフトがこの現象をある新しいタイプの物理的な力に関する自説と結びつけようとしていることは注目にあたいる。彼が言うには、既知の宇宙空間に満ちているのは純然たる「磁気的な力」であるという。

エーレンハフトが文字通り「磁気的な力」という言葉を用いていることには納得しかねるが彼は明らかにもっと深遠な説明を省略するため用いたのである。しかし彼の理論は私のそれとさほどかけ離れたものではない。

エーレンハフトの実験によって示された意義は別として、その現象の螺旋形や自転の運動は空飛ぶ円盤に関してより大きな力ギを示すかもしれない。というのは筆者の友人が、UFOが頭上に見られるときは高速のジグザグ運動をするのがよく報告されているし、地平線上で見られるときは、波形を描いて飛ぶとよく言わ

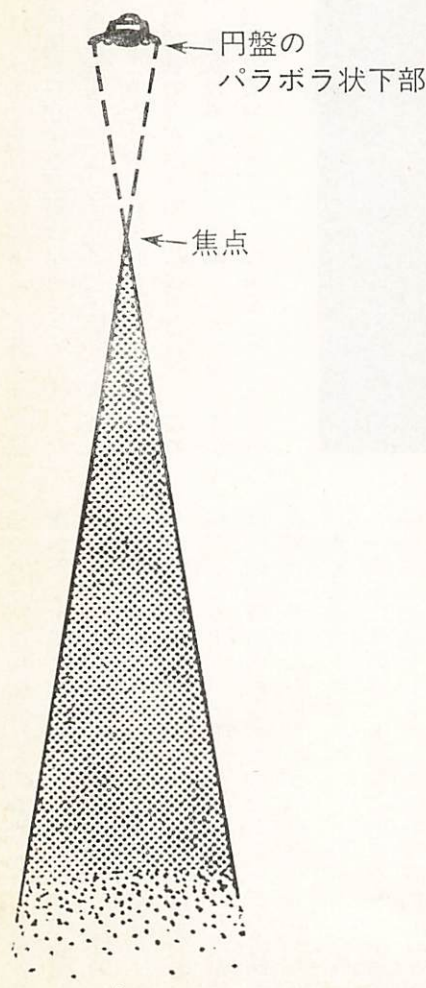
れている、と指摘したからである。

これは物体が螺旋形を引き伸ばした形の運動をしていると言えないだろうか？これが最も筋道のたつ説明のように思われる。

多くの関係者が超音波の実験を行っているが、これは比較的新しい科学であり、多くの奇妙な結果が出ている。この数年間、これと同じ奇妙な事がロンドン近郊のある路上で起こっている。多数の自動車のフロントガラスが不思議にこわれるのだ。超音波を応用した実験中に別段異常がないままに実験者が驚いて天井を見上げることもあり得るだろう。多くの科学的な驚異が同じような事件を通じて発見されている。

空飛ぶ円盤は半透明または透明だとよく言われている。これは本来ガラス状の物であることを示唆しているのかもしれない。チェコスロバ

第14図



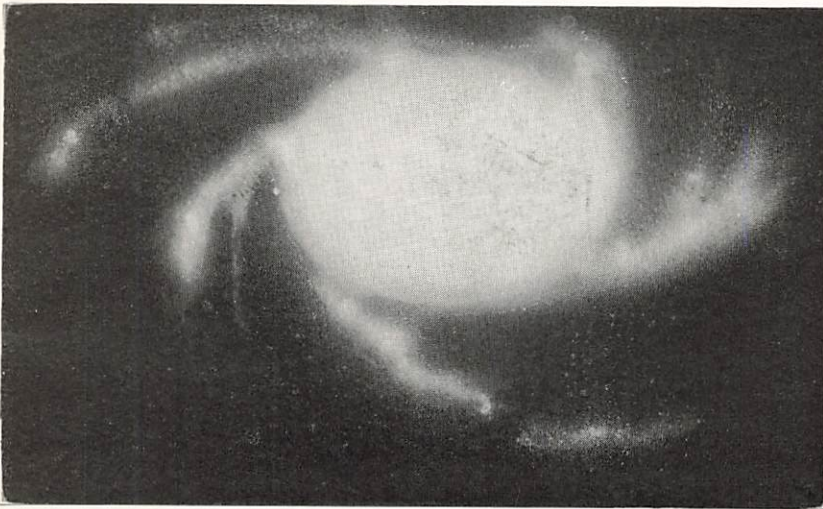
キアのある物理学者が第二次大戦の直前に驚くべき実験をやったと信すべき理由がある。この科学者はあるすばらしい方法を用いて、二・五センチ角の特殊なガラスの立方体を一五センチほど空間へ完全に「浮揚」させることに成功したと言われている。これについては二・五センチ角のガラスの立方体と大理石とを用いたという以外、詳細はわからない。しかし円筒形の大理石が空中から落下したという記録が残っている事実を知ることが重要である。これらの事を心に留めるならば、何か未知のタイプのガラスは超音波、光、電子ビームなどを応用すれば慣性を失うことは考えられないだろうか。

次章でおわかりのはずだが、我々が空飛ぶ円盤と呼んでいる天空の乗物は、たしかにパラボラ状をなしている。そうだとすれば、円盤のバ

ラボラ状と、夜間に見られる巨大な、光る逆円錐形物体とのあいだに何かの関連があるのではないだろうか。円錐形の頂上は実際には放射されたフォース・フィールドの焦点ではないだろうか？（第14図）その円錐形はフォース・フィールドが広がるにつれてできた可視的な効果ではないのか？ そうかもしれないという証拠がたしかにある。この円錐形現象が発生した地点で円盤が飛び去った例があるのだ。円盤が一つのパターンで建造されていないということは最もよい証拠になるのであって、結果は同じにしても推進方法も用途に応じてそれぞれ異なるだろう。これは我々の飛行機とヘリコプターの相違によく似ている。どちらの場合にも航空力学的な浮揚原理が存在するが、その用途は異なるからである。

本稿の既出の部分で円盤の分析を試みたとき中心軸のまわりをある部分が回転することを簡単に述べた。この現象についても少し考えてみることにしよう。円盤の一部分が回転すると言われる場合、そのようにさせる機構について考えることができるが、この点で筆者の憶測はちょっとした証拠によって裏付けされるのである。というのは、エンリケ・ハウゼマン・ミューラーの撮った下の写真に見られるように、はっきりとした車輪の回転状が観測された例もあるからである。これから見ると、どうやら円盤を回転させるのに噴射推進方式が応用されているようにも思われるが、早急に結論づけてはなら

ない。しかも中央部の摩擦トルクを打ち消す逆噴射機構が存在する証拠はない。そうなるとなぜ噴射推進方式がはっきりしてこないのだろう。なぜときたま噴射孔の存在だけが考えられて、噴射物の存在が証明されないのか？ この噴射の種類は外縁の周囲に踊る小さな青い光から、強烈な噴射ストリームに至るまで、さまざま



まである。これはこれらの噴射に対する制御機構があり、またそうしなければならぬ必要があることを意味しているのだろうか？ 昼間よりも夜の方がある種の炎がよく見えることはたしかである。しかし次の驚くべき事件をひとつ検討してみよう。目撃されたというこの円盤には一種の噴射が見られたのである。この事件を真実とみなすことにすれば、有力な手がかりがつかめるかもしれない。

一九五二年の春、大議論的になり、ひどく疑われたセンセーショナルな事件が発生した。この種の事件を認めるのは通常困難であるが、我々は忍耐力を持たねばならぬ。円盤の謎が解決されるまでにまだもっと大きなショックが待ちかまえているかもしれないのだ。

この事件を最初に明るみに出したのは、白髪の四八歳になる、マイニンゲン近くのグライメルシャウゼン市の前市長オスカー・リンケである。彼は妻と六人の子供をつれてソ連占領地域から逃亡した。西ベルリンの係官に囲まれてリンケ氏は一一歳の娘ガブリエレと共に判事の前で次のような証言をしたのである。

「私はオートバイに乗り、後部席にガブリエレを乗せて帰路についていました。ハッセルバッハ村の近くでタイヤがパンクしました。村の方へ向かってオートバイを押しながら歩いていると、ガブリエレが約二三〇メートルむこうの何かを指さすのです。薄明りの中で最初是小鹿だろうと思いました。

私は木のそばにオートバイを置いて、その「鹿」にそろそろと接近し、五〇メートルばかりの所まで近づきました。

すると鹿だと思っただけの間違いで、二人の間だったことに気づいたのです。二人ともキラキラ光る金属の服らしいものを着て、かがんで地面の何かを調べているのでした。

私は更に三〇メートル以内にまで前進し、低い土堤越しにのぞいて見ますと、直径約一二ないし一五メートルの大きな物体があるのに気づいたのですが、正確にはわかりません。大きなナベのような形です。

物体のまわりは直径約三〇センチの三列の丸窓が並んでおり、各列の間隔はざっと四五センチです。

その金属物体から約三メートルの高さの円筒形の「司令塔」が立っています。

すると、ずつとうしろに残っていた娘の呼び声が聞こえました。これは二人の人物にも聞こえたにちがいありません。二人は大急ぎで物体の方へ走りもどって司令塔の側面をよじ登り、中へ入り込みました。

その前に、一人は胸の所にランプをかかえているように見えたが、それは一定の間隔をおいてパッパッと光っていました。

ナベ型物体の縁は輝き始めて丸窓は見えなくなり、最初緑色のように見えた色が赤に変わって、同時にかすかなブーンという音が聞こえました。輝きと音が大きくなるにつれて「司令

塔」は物体の中心部の中へ引っ込んでゆき、物体全体がゆっくりと地上から浮き上がりました。

輝く「排気ガス」の渦巻き現象から私は物体全体がコマのように回転しているという印象を受けました。

それは物体の中心部の中へ沈み込んでしまった円筒形「司令塔」に依存しているらしく、今や塔は底部から突き出て地面に立っていました。ナベ型物体は周囲に輝く炎のようなリングを伴っており、地上一メートルの所に浮かんでいます。

それから物体全体が地面からゆっくりと上昇してゆき、円筒形の塔はまた中心部へ引っ込んで、ふたたび頂上部から現れました。

上昇速度はしだいに速くなり、同時に娘も私も落下する爆弾みたいなヒューッという音を聞きました。それが、それほど大きな音ではありませんでした。

物体は水平運動で飛んで行き、近くの村の方へそれで見えなくなりましたが、シュトゥックハイムの方向の丘や森の上をかなりの高度を保っていました。

後にその地域の数名の住人がリンチ氏に語ったところによると、彼らも妙な物を見たが、スイ星だと思ったという。約二キロ半離れた場所にいた羊飼いのゲオルク・デルプストは、スイ星が地面ではね上がったと思った、と言っている。

判事の前に出たあとでリンケ氏は次のように述べた。

「ある事が残っていなかったら私も娘も夢を見たのかと思ったことでしょう。物体が去ったあと、私はそれが着陸していた場所へ行ってみましたら、地面に丸いくぼみがついているのを見つけました。これはたしかに「司令塔」の形でした。そこで夢ではないことに気づいたのです。

私はソ連占領地域から西ベルリンへ逃げたときまで、「空飛ぶ円盤」という言葉を聞いたことはありませんでした。物体を最初に見たときソ連の新しい兵器だと思いました。それでひどく恐れたのです。なぜならソ連は自国の開発事に関して人に知られたくないからです。それで東ドイツは多くの物事を知らされないで、この数年間は口を閉ざされています」

我々はこのような話をただちに否定してはならないということが最も大切であり、むしろそれがいかに信じがたい話であっても、真実ではないと速断することは避けるべきである。単なる作り話か、それとも何らかの点で我々の理論にあてはまるかどうかを自分で徹底的に検討する方が賢明である。あてはまるならば、少なくともインチキではなく事実であると考えるべき理由がある。

さて、二人の人物のうち一人が持っていた奇妙な閃光物体は、各種の円盤の頂上部でしばしば見られているという点を注目してみよう。現

在のところこの原因は不明だが、話を進めることにしよう。まずリンケ氏が言うには、円盤の外縁部が輝き始め、低いブーンという音が聞こえたという。それから円盤が地面から浮揚したが、中心部はまだ地面に残っていた。船体の輝きとブーンという音が大きくなるにつれて、外側の円盤が回転した。一方、輝きは丸窓群から溢れ出る光のようでもあった。すると、ついに中央部も地面から浮き上がり、元の位置にもどって、高音のヒューッという音だけを残して離陸した。

もしリンケ氏が何かの目的でこのような話をでっちあげようとしたのなら、他の人と同様に「航空力学的な意識」を持つ人ということになるだろう。噴射によって推進される回転円盤というのは、彼にとってはたぶんヘリコプター的な物に思えるだろう。したがって大きな回転翼を持つ物と言ったかもしれない。静かなブーンという音や輝きがあったなどと言うよりも、むしろその噴射は爆発するロケットだったと言うだろう。

だがリンケ氏の言う輝きと色光の変化はまさに電気的な現象にあてはまるのである。そうすると浮揚した外側の円盤部の唯一の理由は、それを回転させることにあったということにならないだろうか？ それとも中心部の黒い部分を軸または絶縁体として、船体が地面と接触しないようにする必要があったと考えられないだろうか？ コペンハーゲンの農場で円盤が無数の

スパークとなって分解した事件を思い出すと右の理由もうなずける。

リンケ氏の見た噴射が円盤を回転させるほどの力を持ち、それによって何らかの方法で浮揚力を起こすとするならば、同じ浮揚力を生み出すには噴射を垂直に應用する方が簡単ではないか。我々がGフィールド（重力場）理論について手がかりを見出すのはこの点である。今、我々が宇宙船を設計して当座は推進法としてロケットの原理を應用すると仮定しよう。一定の速度を得るのに、垂直上昇に際してXトンの推力を生じるためにはどれくらいかの排気ガスを噴射しなければならぬかを計算する。更に燃料を最も経済的に使用するために出発時に六〇秒間一〇Gの加速を加える必要があるなどと計算する。これがすぐれた方法だとはだれも思わないが、現在是最上の方法である。このことを心に留めるならば、次のように考えることができる。もし同じ量の燃料を用いることによって船体の全体に（乗組員も含む）「等しい場の」Xトンの力を生み出し得るとすれば、相対的な加速は存在しないということである。そこで、噴射を應用して船体の外側を回転させながら力の場を生み出せば、もっと効率が有り、もっとも快適になるのである。

だが、しばしば見られる円盤の炎またはぼやけた排気ガス状物をどのように考えればよいのだろうか？ たしかにこれはGフィールド理論に矛盾する。どうみてもこれは噴射による反動

の原理の証拠のように見える。それともGフィールド現象として説明できるだろうか？

もう一度言うと、この解答はもっとありふれた現象、または少なくとも我々が見なれている現象を比較することによって発見できるかもしれないのである。円盤はあるフォース・フィールド（エネルギーの場）の中で作動すると述べてきた。そうすると、このような「排気ガス状物」はどうして発生するのか？ なぜ航跡が残るのか？ 次のように考えてみよう。高電位の回路を遮断すると、空気の分子の部分的なイオン化のために強烈な閃光を発する。通常、空気は絶縁物であるので、電流は遮断部分をとび越えるのである。

一對の遮断器を用いて絶えずスイッチを入れたり切ったりしながら、急速に接続と遮断をくり返すと、炎のようなものが出てくる。この遮断器を急速に空気中で動かすと、一種の排気ガスのように見える。

もちろんこれが円盤の飛行機雲だと考えるわけにはゆかないが、高速で飛行する物体が飛行機と同じように排気ガス状のものをあとに残すように見えることをそれは示している。実際には飛行機雲は観察者にとって相対的に動いているのではない。それは吐き出された位置にとどまっているのである。実際の運動は飛行機にとって相対的な物が行っているのだ。

ところで、円盤にしばしば見られる飛行機雲現象は航空力学的な機械が存在することを意味

するかもしれないが、次のことも指摘されねばならない。つまり、普通の飛行機雲は空中の水を含む粒子をかく乱する飛行機の通過によって起こるのと同様に、“自分自身の空気”を持つフィールドで動く物体は抵抗を受けないけれども、やはり同じようなかく乱作用を起こして同じ結果を伴うのである。

夜間によく見られる輝く航跡は、たぶんフォース・フィールド自体と接触した空気の粒子によってひき起こされるのかもしれない。実際、円盤と接触する空気にも同じことが言えるだろう。空気の粒子のある部分が、そこで発生した非常に高温によって完全に分解することは十分にあり得ることである。

このように考えてくると、あらゆる種類の解決困難な事柄が出てくる。その主なものは乗組員の絶縁である。航空機製作の技術者が考えているのと同様に、オーバークヒートを冷却する問題に直面するだろう。しかしこの考えは正しいだろうか。現代の超音速機の発達を例にあげよう。最初の大きな障害であった“音の壁”は克服された。次の障害は三月三日頃に起こってくるだろう。異常なオーバークヒートが問題化するはずである。もしパイロットを保護しなければフライになってしまい、車輪のタイヤは溶けてしまうだろう。そこで唯一の解決法を用いる。操縦席、機械などを冷却しようというわけである。大体に“過剰な”熱は損失なしに発生することはない。したがって有効な仕事をなすよう

にそれを元へ返すことができないのは哀れである。だが方法がわかればそれがやれるのだ。

このことがまさに円盤に起こっていると考えるのは不合理だろうか？ 信じがたいほどの高温がG効果によって発生しているが、この温度は内部の乗員に影響を与えない。彼らは最も効果的な断熱法を発見したのではなく、船体内外に満ちている例のエネルギー的放射線を巧みに処理することによって、あらゆる温度を仕事に転換させる、きわめてすぐれた方法を発見しているのである。円盤のすぐ近くに我々には全く未知の状態が存在していて、極端な高温が即座に転換するために、結局高温は存在しないのかも知れない。我々が観測するのは転換の証拠だけであり、それは光である。我々が物質の組成についてもっと多くを知るならば、そのときこそ原子の真の構造を現在よりもっとくわしく知ることになるだろう。その知識によって我々は物質を、制御されたエネルギーに転換できるかもしれない。アインシュタイン博士はその有名な公式 $E=mc^2$ によってこのための道をすでに切り開いている。Eはエネルギー、mは質量、cは光速をあらわす。

我々は空飛ぶ円盤現象に対する最も重要な手がかりとなるものを今や考え得る段階に達している。それを受け入れるのも拒むのも各人の自由であるが、深遠な意味が存在することを否定する者はほとんどいないだろう。これまで述べてきたように、筆者は空飛ぶ円盤なるものはコ

ントロールされた重力場によって作動すると信ずるものであり、また重力、慣性、光などは、万物を存在せしめている“条件”の異なるあらわれであると考ええるものである。

そこで読者に対しては次の事実を考えていただきたい。

物質の核そのものの中で電子がどのようにして軌道を回転しているかはだれも知っていない。チリの微粒子が光線をあてられて旋回することも知った。衛星、惑星、太陽、そして銀河系までが旋回しているし、宇宙のこのような現象に関連があるのは、いわゆる引力なのである。そして——空飛ぶ円盤もまた回転しているのだ。(以下次号。本文中の「注」は訳者による)

久保田八郎訳

コピー中止！

本誌第8号、83頁の最後の「★コピーします」という欄で、千葉県船橋市の学生・浜村建郎君(早大理工学部)が学校の複写機を利用して安い実費で本誌創刊号のコピーを引き受ける旨の広告を出したところ、全国から申込みが殺到し、学業とまわしで大奮闘してこの依頼に応じていましたが、約40名分を作成した時点で、残念！機械が故障して中止のやむなきに至ったとの連絡がありました。約60名の未作成分の代金は個々に返送するとのこと。同君の高貴なご奉仕に深甚の謝意を表する次第です。(編集部)

声

OPINIONS



●金子ゆうじ(画)

〒240 神奈川県横浜市保土ヶ谷区上星川町221

毎号楽しく読ませていただきありがとうございます。私は先日、あるデパートでやっているUFO展に行ってきた。UFOの写真や宇宙人の姿、円盤の模型、イオンクラフトの実験、UFOの8ミリ映画など数多く見て来たが、いろいろ見ていると、なんとこの展示会の中に宇宙人がいるではないか。

それは金星人と土星人らしき姿であります。どうして金星人や土星人がこの展示会に来ているのかと疑問でしたが、それは自分達の乗り物が写真となって展示されているというところは地球人たとして同じことではないでしょうか。地球人は自動車という乗り物を使い、また自動車の展示会にも参加するではありませんか。それと同じように宇宙人もこのUFO展示会に参加しているのです。アダムススキーが会った宇宙人(金星人)、ぼくはこの金星人の顔写真をUFO展に行きました。そして宇宙人を発見したのです。

松岡正憲(21)
〒100 東京都渋谷区本町一〇九一七、洗旗荘二〇(一室)

コズモ7号たいへん興味深く読ませていただきました。特に「写真のゴーストはなぜ現れるのか」は非常にためになりました。そこで記事を読んで気がついたことをお知らせします。

ゴースト写真撮影の実例の小松、鎌田両氏のリング状ゴーストを見て大驚きました。なぜかという点、北海道上磯町の小坂孝一さん他5名の研究グループ(このグループは、木曜スペシャルで紹介された)がとらえたUFOの写真とそっくりだからです。そこでさっそくその写真を出してこの記事のゴ

ースト・イメージの判定法に従ってそのリング状UFOの左の突端と右の突端を結んだ線上にゴーストの原因になる光源があるかどうか調べてみたところ、確かに工場のライトらしい大きな光源があり、これはゴースト写真だなぁと思ったのです。しかしこの写真を現像してみても写っていたのです。グループが物体を目標して写したのかわかりませんのでゴースト写真とは断定できません。

西村康生(18)
(干) 滋賀県彦根市大堀町五六八

僕は沖縄県内に住む高1の男性です。きょうはじめてコズモNo.7を見ました。感想としては、大変楽しいUFOの勉強、研究に役立ちます。2年前ある本からコズモのことを知り、今まで捜していたことが、沖縄にはまだ来ておらず、今まで探していたところ。実はぼくもUFOに大変興味、趣味、関心を持っており、自分で少々UFO飛行原理などを考えています。

UFOに関する書物などいろいろ持っているし、ある本の切り抜き、新聞の切り抜きなどもたくさんあります。UFOに関するものは一つも逃がしません。他に心霊、ESP、四次元、UFO、その他あらゆるナゾに興味を持っています。僕自身としてはまず否定、疑問を持ち、本などを読みはじめます。もちろんUFO(宇宙人も含めて)の存在は信じています。

将来はUFO研究家になり大きな研究会を作ることが僕の夢です。もう1つの夢は自分達で超光速で飛びUFOを作り、広大な無限の宇宙へ飛び出すのが2つ目の夢でもあります。そこで僕と同じ夢を持っている方、「世界のミステリー・ナゾ」に関心を持っている方、文通をして意見の交換などを

しませんか? 男女、年齢を問いません。もしよかったら「研究会」など自分たちで作ってみませんか? 全国の男女諸君! どしどしお手紙(ハガキ)をください。またT.E.もいいですよ。では待っています。

大城丈和

(干) 01 沖縄県那覇市宇栄原六二一A九一二
電話〇九八八・五七・三四四六

われわれの学校の天文部はおかしいのです。それは一年に数回ほど野外に天体観測にいくと必ず未確認飛行物体、つまり、UFOらしきものが飛ぶのです。今年の2月4日、土星観測のときもUFOらしきものが飛び、部員の一人が撮影に成功しました。昨年の11月17日、獅子座流星群のときも夕方、UFOらしきものが飛び、われわれ天文部一同を驚かせました。何かのインセンでもあるのでしょうか。必ずといっていいほど出るのです。夕方だから人工衛星など飛行機、鳥かもしれないけど「そんなものじゃない、あれはUFOだ!」といいます。顧問の先生は信じない方ですけど2月4日の時は初めての、方々なんですから変なものです。今年も8月13日のペルセウス座流星群の観測に行きます。その時出るかもしれません。もしも出たらまたこの欄に投書します。

匿名希望

(干) 東京都練馬区田柄一四一五

拝啓、私は、貴社の雑誌の愛読者の高3であります。実はうかがいたいことがありまして筆をとりました。

(その一) なぜ「コズモ」という名を付けたのでしょうか。あいに創刊号は興味を引かず買いませんでした。(宇宙人はいるに決まっています。問題には円盤が作れるか)

(「コズモ」は宇宙を意味する英語のCOSMOSからとった題号です。編集部)

(その二) なぜ遺跡などを現代の科学で解明できないものを宇宙人のしわざと考えるのでしょうか。地球人類は、そんなに「はか」だったとは思いたくないのです。

神谷清孝

(干) 01 茨城県西茨城郡友部町旭町三七九

注文しておいた「コズモ」、ついにわが病床(入院中へ)到着! タカイ! それが見る前の印象。ササガ! それを読んだ後の印象でUFO専門誌の名に恥じない内容の充実です。UFO専門誌の僕は俗にいわれる超自然現象に並み並みならぬ興味を抱いている愛人でもあります。貴社の目玉商品、

「コズモ」を筆頭に、ESP、心霊現象、雪明、ネッシー、四次元等々。これら現代の科学では解明できない未知なる一連の現象には興味しない夢とロマンがあります。これらの現象の興味(専門家にとっては研究課題)は便宜上、三段階に分けられると思います。存在の有無を問題にする第一段階、正体究明を問題にする第二段階、そして第三段階はその実用面が問題にされます。火のついた煙は立たないといわれるように、現在これらの現象がさまざまな形の目撃者によって確認されている以上、第一段階の存在性に關してはかなり濃厚だと思われます(むしろ、それだけの現象において差はありません)。そればかりか今や容認、否認うねんなど悠長なことを論じ合うときはすでに過ぎ、各学会が総合的に協力し合い、その正体究明に乗り出すべきだとおもわれつつあるほどです。ご存知の通り、ソを初めとする諸外国ではさまざまな公的機関を通して、これら不可思議現象にメスを入れているところ。わが国においては非難の渦中で少数の私的機関のみが散在するといった状態、この超自然現象に関する研究は赤子同然です。何とも嘆かわしい限りです。

山重真一(19)

(干) 01 北海道江別市錦町一〇一一

空飛ぶ円盤は何のため飛来するのか? 今までのことから考えると「侵略」ということではないように思える。なぜなら、植民地などのために侵略しようとするならとくに攻撃して来てもいいはずだ。地球の科学が進歩すれば、侵略しにくくなるだろうし、何もしてこないのは何か、観測のためののだろうか。昔から円盤はやって来ていると思われるが、いまだ攻撃しないのは、やはり侵略ではなく地球の発展を観察しているのかもしれない。

本場の地球侵略者とは人間ではないだろうか。地球を我者顔に暴れまわり、乱す人間こそインペーダー等生物である。このまま自然破壊を進めれば地球最高等生物として恥ずかしくなる。自然と共存してこそ地球人といえるのではないだろうか。

話は変わりますが、超自然現象をただ否定する人がいるが、何も知らずに発言することには間違っている。また円盤などがあると思う人、いないと思う人もそれぞれにあるならある、ないならないという証明をするため研究し発言すべきである。また今までの古い考えに縛られているのは新しいことを理解し納得することではないだろう。古い考えが間違っているのなら、それを捨てて新しい考えを素直な目で見ることである。とにかく、新しい、超能力など超自然現象がこれからの科学の課題になることを信じている。超常現象に関心を持つ人、お手紙ください。

さい。

金子祐二

(210) 神奈川県横浜市保土ヶ谷区上星川町二二

コズモを毎号興味深く読ませていただいております。結局、UFO・宇宙人という問題はその人の人生観によっても評価されると言うことでしょうか。

時々考えるのですが、日頃われわれは何もかも知っているのんきに暮らしていますけれど本当にそうでしょうか。われわれが生きている宇宙のことなど知らないのも当然です。なぜ、人間は宇宙人と交流できないのでしょうか。そして、われわれの考え方や生活も地球に押し付けられている、大体において人々は宇宙に無関心だし、それに宇宙に乗り出して行くほどの科学もありそうにない。これでは両者が出会えるわけがありません。まず心を外に開けて頭の中を柔軟にすることが始めましょう。

異星人との交流こそ混乱する地球人を救えるただ一つの残された道と信ずる地球産の美女より

(213) 千葉県東金市

私は北の都(札幌)に住むUFO研究家の人です。国内の目撃事件はもちろんのこと、諸外国の目撃談なども可能な限り入手し、研究に励んでいます。

ここ二、三年來、わが国でもマスコミを中心にUFOブームとなり、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌などにUFOの記事が載っておりまして。私も記事の良否は別とすれば、うれしく思っております。

また直出版社のUFO専門誌の存在も重要と思っております。UFO、それは多くの謎を持っておりまして決してSFではないのですし、現実には我々が直面している問題だと思います。UFOの出現地が外宇宙なのか、我々の未来人のタイム・マシンなのか、または我々の知らない自然現象なのか、本当に理解しがたい問題だと思います。多くの目撃報告が集められ、多くの研究者によつて調査されておりますが、その一つ一つに我々の想像を大きく超え、また我々地球上の人類が果たしえない心理的要因があるように私は思います。一九四七年六月24日に空飛ぶ円盤研究のきっかけとなったレイニア山事件、それは我々にも多くの謎を与え、また地球人類に一つの夢を与えてくれた気がします。現在では世界中にUFO研究者や団体が存在し、それぞれに私見や主張を持っておりますが、何よりも大切なことは皆がUFOに対する知識を正確に持ち、決して自己を有名にしようとか、金銭的利益を得ようとかしないことだと考えます。現在のようにオカルト・ブームとかUFOブームと言ふ時期に何よりも恐ろしいのは、一部のマスコミが実行しているようなでっち上

げの記事や自己の利益を追求した記事だと思えます。UFOを知らない人や研究しようとする人に誤った知識を与えることは、極力さけるべきと考えます。真実のUFOを知り、また研究することがこの謎を世間一般に伝える唯一の道だと思えますし、何よりもUFO研究者の存在が一般の人々に理解される要素だと私は考えます。

と付く日本人は奇怪な事件や現象を宗教的なものと結びつける面が多いのですが、一般の人々にとつてUFOは神秘的なものとしか考えないのでしょいか。私は自分の研究を推進してUFOの実体を一般に普及させたいと思ひ、もっとポピュラーな存在へと持っていきたいと考えております。

コズモの読者の皆さん、あなた方もUFOを今以上に真剣に研究し、もつとわが国での研究向上へと互に進めましょう。皆さん方からの卒直なご意見を心よりお待ちしております。

また資料面での報道をお互に進めていけたらと思っております。

(214) 札幌市北区新琴似十条一四丁目

逢坂輝夫(25) 学生

はじめまして、UFO、コズモファンの皆さん。私は初めて「コズモ」を読んだ大喜びしているUFOキチガイです。私とコズモとの最初の出会いはず

年7月の曇った日でした。いつものようにバスを待つ間近くの書店で立ち読みをしていたところ目に

あったのが、No.7のコズモでした。「コズモ」と言う雑誌があるのは知っていたので「これがコズモか、ムスカシソウだなあ」と思ひながらページをめくっていったところが案の定、私は到底理解できていないような、むずかしい感じが、いっぱい書かれていました。でも不思議にこの雑誌を買ってやろうという気持ちで頭の中がいっぱいになり、とうとう買ってしまったのです。それからというものコズモは私の宝物となつてしまつたのです。小さなときに見ていた「謎の円盤UFO」と言うTVドラマがまだに印象に残っているという私の円盤キチガイの原因なのではなかろうか、いづれにせよ、すっかり私はコズモのとりこになつてしまつたといふことは事実です。これから末長くコズモとお付き合いしたいのです。これから私のUFOを信じている人がいなくて、UFOについての話し相手がいません。こんな私ではいけません。どうか文通してください。

(でも、こんな私ではいけません。どうか文通してください。)

赤松克美(12)

(212) 徳島県鳴門市市浦田町浦坂田三〇二二

私は日本UFO研究会員であるが、現在、人類が持っている宇宙人に対する考えに不満がある。何か

といへば宇宙人は地球人の敵にされてしまう。マンガにまで、そんなことが書かれている。こんなことでは子供たちに、宇宙人は敵であるという先入観を与えてしまう。そして将来地球上に宇宙人が現れたとき、宇宙人側には敵意はなくとも地球人から攻撃を始めるだろう。そうすると宇宙人側も攻撃をしてきて地球は終わる。しかし宇宙人もそういうことを予想して地球には現れないだろう。もし現在人類が宇宙人に対する考え方を改めるなら、そのとき宇宙人は地球上に現れ、人類の良き友達になるのではなかろうか。

それから現代科学の超常現象に対する考え方にも不満がある。現在、一般に認められている法則に反するものはすべて否定する。現在の法則が絶対的だと考えているのだ。今までに不可能とされてきたことがどれだけの可能になったか数知れない。現在の法則がすべて絶対的だとそれが証明できようか、それを証明することは不可能だ。

こういうことから超常現象を肯定することは出来ても否定することは困難なのではないか。それなり

にすぐに否定する現代科学はある意味では進歩がないと言えらるだろう。

久本健二(17)

(215) 兵庫県神戸市垂水区舞子坂二二一五

編集部の方々、毎日ご苦労さまです。僕は目撃報告を数回出したことがあり、コズモ7号に載りました。その後時々見るのですが、中学3年生の、高校受験を控えて、じつくりと一晩中、夜空にのめこをする暇もなくなつてきて、非常に残念無念です。

ところで僕の住むこの町ではUFOがよく現れます。そこで僕は私同様の「自称UFO研究家」が多数おり、私の知る限りでも十人近くいます。しかしその中の女の子が、いないのであります。思うに日本の女性は戦後強くなったなどと言われますが、物事を科学的に見る目はまだだと思ひます。うちの母などと一緒にUFOを目撃しているくせに否定的なことを言ひ出す。僕が反論する

と「UFOがいても、いなくても今の生活は変わり

はしない。そんな暇があれば勉強せよ」と、こう

です。まったく相手が出来ません。自分に影響がな

ければ目を向けようとしないのです。もっとも

と日本女性は物事を科学的に見る目を養うべきで

す。

さて話は変わりますが、先に書きましたように私

の知人に数人UFOに詳しい人物がいますが、最

近私たちだけの情報では飽き足らず、もっと外の都

市ではどうなのかわりたくなつてきました。そこ

で「UFO研究会を結成して全国の目撃者などか

ら情報を集め、相互にそれを交換し合はばすばらしい」ということになりました。どうかUFO目撃経験のある方やUFOについて一緒に考えたい方、どうぞ手紙をください。老若男女を問わず、どなたでも結構です。よろしく願ひします。

井上 寛(14)

(219) 03 広島県広島市瀬野川町中野七六一三

拝敬、私は今年の夏、京都に旅行して8月6日真大文字焼きを見、その時撮った写真が同封した写真です。三脚を持ちあわせてなく、手持ちで撮ったので、そのためご覧になればすぐわかるように、そこには円盤の光跡であるライティング・フレイツとまっ



たく同様な光跡が映っておりまして。しかしそれは明らかに円盤の光跡ではなく、大文字焼きの火とか、街の灯の跡にはかならないです。私は今でも円盤と宇宙人の存在を強く信じています。そしてライティング・フレイツについても、そうでありました。しかしこの写真によつて、すべてのライティング・フレイツが円盤の光跡であるとは言えないことがわかりました。そして我々円盤愛好家には自覚的な物の見方は円盤研究の上で非常に危険であり害でもあると思うのです。もっと懐疑的な物の見方をすべきなのでしょう。ところで私は、だからといってすべてのライティング・フレイツがにせ物だとも思いません。貴誌コズモに載つた写真には大きな光源となるものがないし(ただしこれは印画紙のカットの仕方でもないので、ネガ自体に光源がない場合のみである)、星の光は自転による動きのほか、ブレた跡がないことなどを考えに入れれば、疑うことはむずかしいと思ひます。

ただ私がこの写真を撮つたときの状態ははっきりしていませんが、光跡が点線となることは不思議です。しかしこのようなことが偶然ではなく、同時に

何枚ものネガに撮っているの、ある状態下ではこのようなライティング・ライツのような光跡を写すことが可能なのは確かである。そしてこのブレが一瞬にして行われたならば、星の光跡はその間に光が弱くて感光されず、その後カメラを固定すれば、星の光跡は普通どおりになることも考えられます。そうなるが貴誌3号の表紙のライティング・ライツも疑問の余地が生じるのではないだろうか。私にはこれ程度のことでしか疑えませんが、なにとぞ円盤研究の助けにしてください。

松本 紳

(千原 東京都港区南青山七―十二六)

コズモの皆さんは、UFOをカメラで撮えようという日夜、空を見続けているバカなひとりで、こうしてコズモの皆さん、UFO写真集「いいですね」は貴社の方に直接注文していたのですが、家に届いたとき、中を開く前からうしろれしくうしろれしく、なんとなく開いてみたら、なんと思わす目の玉を2倍以上にして、やっただコズモ！と叫んでしまった。まずカラー大画面の迫力です。それになんと、日本語から英語に訳すなどの気の配りようは、まさに国際的だと思ふのであります。僕にとっては一生の宝物であり、大切に記録資料として保存します。

それからバイナードも届きましたよ！とても便利で出し入れも簡単です。いちいち一冊ずつ取って読まなくてもまとめて読めるので、保存用にはとても最適で便利です。

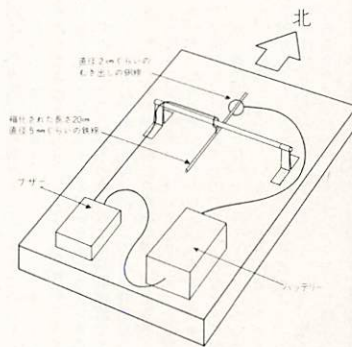
ところでUFOが出現するのは、忘れたころにやってくるという感じだと思いつつ、もしもUFOをカメラで撮えたら、即！コズモさんに超速連絡便に車に乗って送りたいなあと思っています。

久保田八郎様は関係者各位様はとうとう苦労様です。これからはUFO写真集第2巻も頑張ってくださ。楽しみにしています。田舎生まれより、だれかお便りください。

新藤志男(19)
(千原 秋田県横手市南町)

僕は、UFO発見機を今年の3月頃作りました。そして今までに3回鳴るのを聞きました。僕は、いつも学校へ行っているのだから、あるかも知れない。まず第一回目に聞いたのは6月19日の朝7時40分、プザーが鳴ったとき、すぐ外に出て空を見上げたのですが何も見えませんでした。それから11日後(6月30日)弱震ですが、地震が起こり、また第二回は8月22日朝8時頃鳴ったので、すぐ空を見ましたが何も見えませんでした。そして13・14日後東北地方で地震、阿蘇山の爆発がありま

した。(これは単なる偶然で、こじつけかもしれない)第三回は10月5日、僕は学校に行っていないが、学校から帰ったとき祖母から、プザーが10時頃かすりと鳴ったと聞かれました。それから6日後(10月11日)福岡で震度2の地震が起こりました。僕は地震の専門家でないのだからわかりませんが、地震が起こる10日ぐらい前に磁気に変化



が起るのだと思ひます。皆さんもUFO発見機を作って、試して見てください。UFO発見機は仕組みが簡単で、だれにも作れます。

福岡博文(糸高UFO研究会々長)
(千原 福岡県糸島郡志摩町小金丸)

コズモファンの皆さん!! 宇宙人はこの地球へ何をしに来ていると思ひますか? その訳はね、私たちがあまりにも無鉄砲な生活をしているので、それを正しに来ているんです。しかし彼らはね、絶対に強制などというとは思っていないんだ。それに彼らは、私たちのことを兄弟だと思つて接してくれているんだ。

私たちの無鉄砲な生活というのはね? そうですね、宇宙には一つの法則があるんだが、この法則をある人は宇宙の根源の法則とか、宇宙意識、現象の因、神とか呼んでいるけれども、呼び方はどうあれ、その法則というのはいわゆる、ウチは鳴る鐘のようなものなんだ。そしてそのウツ役目をするのが、私たちの信念(思い)なんだ。そして行動も言葉も、信念を経て出てくるものだから、信念はそれらの因に当たるわけだ。故にその信念が鐘をウツ役目をするから、どのような信念を抱こうと、関係なく鐘は信念に応じて響くんだ、宇宙すべてにね。そして自

分自身にもその鐘の響きは帰ってくるんだ。だからその鐘の響き(バイブレーション)が快いものならば、自分に帰ってきたとき、何の苦痛も感じない、それどころか喜びさえも感じることができるよう。しかしその逆だったらどうであろうか……考えただけでも恐ろしく使用しているんだ。ところが私たちはそれを知らずに使っている。だから彼ら(宇宙人のすべてか、一部)は、このことを私たち地球の同胞に知らせるべく来ているんだ。興味本位で円盤を研究することも、宇宙に対してオープン・マインドを持っているという点で、いいだろうけれども、ときにはこういうことも考えて見てはどうだろうか?

宇宙は常にわれわれと接し、交わりその深遠なる根源の力、愛を私たちすべてに与え続けています。宇宙の法則ならびにUFO、超常現象等に興味をお持ちの方、私であらうお手紙ください。

浅川和彦(19)
(千原 福岡県直方市大字盛田王子団地五七二号)

僕はコズモを1号から愛読しております。本当に充実した内容だと思ひます。まだUFOを見たことはありませんが、見ている人以上に信じています。ここで一つ提案があるのですが、コズモで「UFO写真集」という別冊を出しましたが、この別冊をフルに活用して外国のUFO関係図書を訳して出してほしいと思ひます。また百科辞典式にしてUFOや宇宙に関する特集をしてほしいと思ひます。どうもタキオンとか重力場理論のところを読んでも覚えられないし、わかりにくいです。だから本誌でも別冊でもいいから特集号を出してください。

今井春樹(18)
(千原 千葉県市川市曹谷七二四一三)

中高生のUFOの研究クラブを作りました。会員を募集しています。(20円切手同封してネ) 荻野和男(学生)

(千原 群馬県館林市足次九〇一一二)

UFO新聞を作りました。詳しい方は連絡ください。それから、めずらしい体験をしたかた教えてください。

田中孝治
(千原 神奈川県横浜市神奈川区磯子二丁目九一―二)

物理部同好会を作ります。入会者募集します。研究内容はUFO、物理学、超心理学、電子工学などです。2ヶ月に1回、会議発行の予定です。入会希望者は次のところまでご連絡ください。

中野芳明
(千原 兵庫県宝塚市南口一丁目二番一九号)

★譲ります

●UFO、テレビ、科学、天文に関する雑誌、書物あり。ハガキください。目録を急送いたします。
長島 太(千原 兵庫県多紀郡多紀町安口八八六―二)
●昭和33年発行の朝日新聞社「ユニバース」版「パンピック」空飛ぶ円盤なんでも号」B6版ページを持っています。次の本との交換を。尾崎喜八著「音楽への愛と感謝」新潮社初版、購入希望の方は適当な価格をお知らせ下さい。

岡田栄一(千原 大阪府阿倍野区美草園一〇一―一七)

●カメラ「コダックポケットインスタマチック30」(定価18000円)をフラッシュキープ付きで12000円(送料共)で譲ります。今までに8回使用しただけです。故障なし。
大野成子(千原 東京都葛飾区新堀二二二―一九)

●ズーム式双眼鏡(最高17倍)を現価22000円を6600円で譲ります。一年間使用。
竹内 肇(千原 石川県泉沢市寺町三六―一三)

●コズモ3号18号一括。希望の値段を書いてハガキで連絡してください。
大東直裕(千原 66 和歌山県那賀郡那賀町六伏三〇四)

●高文社「火星からの空飛ぶ円盤」「空飛ぶ円盤の秘密」「空飛ぶ円盤の真相」「空飛ぶ円盤とアダムスキー」「空飛ぶ円盤は飛ぶ」の以上五冊を送料共定価の7割くらいの値段で譲ります。
佐藤広一(千原 北海道釧路市緑ヶ岡一―二九)

●コズモ創刊号有りです。(少々キズもの)欲しい人に譲ります。詳しいことはハガキで。
岡部昭夫(千原 北海道釧路市北流の川九三ノ八)

●コズモ3号16号各3300円(送料そちら負担)またはハガキで。
高木康明(千原 福岡県福岡市西区室見四一〇―二〇)

●コズモ創刊号18号、計8冊、送料共2500円で譲ります。往復ハガキをお願いします。
村田恭男(千原 東京都調布市人間一三四 磁部)

●カメラ(フジコンコンパクト35EE)15000円を8000円ぐらいで。
北村恒雄(千原 03 大阪府泉南郡岬町深田二九一

七

●私の妹がクリフ・リチャードの大ファンでして、この10月に来日した時のステージのプログラムを捜しておりました。もしこのプログラムを、お持ちの方で私のコスモ創刊号と交換して下さる方、大至急ご連絡をお願いします。

久保田 稔(千四) 福岡県福岡市中央区赤坂一四二五
●コスモ創刊号/No.7までを2000円で、超相対性理論「超相対性理論入門」宇宙の四次元世界を2500円で譲ります。

長部和彦(千四) 東京都杉並区高円寺南三二四二一九
●コスモ創刊号/No.3まで、「宇宙人の痕跡」「地底文明説」「古代竜と円盤人」「宇宙の使者」「世界の不思議」「世界の四次元現象」「日本ミステリーゾーン」を適価で、その他UFO関係の切り抜きがあります。

●小山謙二(千四) 静岡県小富士市石坂八七五
●創刊号/No.8をなにかに適価で譲りたいと思います。連絡は往復ハガキをお願いします。

下田浩昭(千四) 文京区小日向一四一六
★譲って下さい。

●コスモNo.2求む!! 1000円+UFOの写真でお譲りください。

小関芳宏(千四) 福岡県福岡市花園町七二二
●創刊号/No.4までを譲ってください。どれか1冊でもかまいません。創刊号を1000円、No.2を600円、No.3を400円、No.4を400円ぐらいまで、折れていたり、よれていたら少し安く譲ってください。

山口文昭(千四) 静岡県伊東市赤沢五〇
●コスモ創刊号/No.2を1000円で、No.3、No.4を500円で、どなたか譲ってください。まず連絡を!!

森田正男(千四) 埼玉県熊谷市久下一六七五 電0485-12204
●コスモNo.2/No.3を東京都23区内の方から希望します。値段は各送料共400円をお願いします。2冊の場合は送料共700円をお願いします。美本を希望、必ず電話してください。

本田邦彦(千四) 都内江戸川区北小岩五一六一七
●コスモ創刊号/No.5までを5000円で譲ってください。(美品希望) お願いします。

嶋 弥弦(千四) 26 北海道小樽市塩谷四七七
●コスモ創刊号/No.3までを2000円でお譲りください。(創刊号を1200円、No.2、3を400円

送料共。またUFOに関する物をお譲りください。

小酒井慶次(千四) 静岡県静岡市幸町八二
●コスモNo.1/No.4までを2000円から2500円くらいで譲ってください。

藤本 実(千四) 山口県大島郡橋町油良
●コスモ創刊号を複数冊保存されている方、ぜひ1部お譲りください。まずはご連絡を。

小倉正美(千四) 02 千葉県君津郡袖ヶ浦町神納二七二二
●コスモ創刊号/No.4を持っています。1冊でもいいですからお譲りください。1冊1000円くらいで、まずはハガキで。

坂 晃雄(千四) 01 岐阜県安八郡安八町中村
●創刊号/No.2をぜひ譲ってください。お願いします。

小島博子(千四) 埼玉県久喜市中央四一六二二
●私はUFOにすごく引かれていた14歳の女の子です。コスモ創刊号/No.4が欲しいのです。どうかお願いします。

大長真理子(千四) 兵庫県尼崎市七松町一六二二
●どなたかコスモNo.2/No.4を譲ってください。(できるなら資金の都合により安く) 連絡するときに希望の値段を書き添えてください。

中江好伸(千四) 滋賀県彦根市後三条町五八八
●創刊号を1200円、No.2を1000円以内でぜひ譲ってください。(送料当方負担)

渡辺智司(千四) 福岡県いわき市小名浜野田字田中一三〇一
●コスモNo.2/No.4を譲ってください。方、またはコピーして下さる方はどうかご連絡ください。なお当方には創刊号がありますので、その方にはお貸しします。

吉本光宏(千四) 03 東京都八王子市大塚四二二後田莊二二二 電04-76-8607 井上
●コスモ創刊号/No.4までを2000円で譲ってください。ただし破れ、切り抜き、落書きは不可。

横山めぐみ(千四) 東京都船江市岩戸九六七一
●コスモNo.2をぜひ手に入れたく思いますので送料共1500円で譲ってください。

町田祐太郎(千四) 東京都杉並区高円寺南五二八
●電03-312-9307
●No.8から買い始め、No.5、6、7は求めましたが、なんとかそろえたので、どなたかNo.1/No.4を譲ってください。値段は譲ってくださいの方との交渉で。

千田 真(千四) 岩手県胆沢郡胆沢町南都田字本木一六四二
●創刊号/No.4までをぜひともお譲りください。四冊2500円前後でどうですか。それが不可能な方はこの内1冊でもどうぞ。適価でお譲りください。お早目にご連絡を。(送料当方負担)

石田秀二(千四) 東京都中野区野方二二二一五
●コスモ創刊号を送料共1600円で、No.2/No.4を各送料共550円で譲ってください。

川原信介(千四) 大阪府東大阪市鴻池本町七二三
●コスモNo.3がたまりません。同じUFOに興味を持つ同志諸君、5000円程度でぜひわれに協力をお願いします。

渡辺一由(千四) 札幌市南区真駒内南町一七七八 HBC真駒内社302号
●私、新人りなので、No.8しか読んでいません。どなたか創刊号/No.7までを4000円以内で譲っていただければ、何分後学に通っているもので暇がありません。それから送ってもらえたら助かります。代金は着き次第必ず送ります。よろしくお願ひします。

古原孝男(千四) 名古屋市中区川名町一五五 名古屋ライトハウス内
●コスモNo.1/No.3を三冊2000円で譲ってください。切り抜き、落書き等のない美品をお願いします。ハガキで知らせてください。

田中光一(千四) 東京都渋谷区富ヶ谷二一三七一六
●コスモ創刊号/No.4までが欲しいのです。1冊でも可能。1冊6000円以内でどうでしょうか。(送料当方負担)

●創刊号/No.4までをぜひともお譲りください。四冊2500円前後でどうですか。それが不可能な方はこの内1冊でもどうぞ。適価でお譲りください。お早目にご連絡を。(送料当方負担)

石田秀二(千四) 東京都中野区野方二二二一五
●コスモ創刊号を送料共1600円で、No.2/No.4を各送料共550円で譲ってください。

川原信介(千四) 大阪府東大阪市鴻池本町七二三
●コスモNo.3がたまりません。同じUFOに興味を持つ同志諸君、5000円程度でぜひわれに協力をお願いします。

渡辺一由(千四) 札幌市南区真駒内南町一七七八 HBC真駒内社302号
●私、新人りなので、No.8しか読んでいません。どなたか創刊号/No.7までを4000円以内で譲っていただければ、何分後学に通っているもので暇がありません。それから送ってもらえたら助かります。代金は着き次第必ず送ります。よろしくお願ひします。

古原孝男(千四) 名古屋市中区川名町一五五 名古屋ライトハウス内
●コスモNo.1/No.3を三冊2000円で譲ってください。切り抜き、落書き等のない美品をお願いします。ハガキで知らせてください。

田中光一(千四) 東京都渋谷区富ヶ谷二一三七一六
●コスモ創刊号/No.4までが欲しいのです。1冊でも可能。1冊6000円以内でどうでしょうか。(送料当方負担)

佐藤恵一(千四) 山口県小郡町明治北
●UFOの写真を書かれた方、焼きまわしを一枚お譲りください。(トリック不可) ハガキで連絡を。

小橋俊哉(千四) 岡山県津山市総社三三
●創刊号を手入したいです。1500円以上で譲ってください。連絡してください。(ただし美品)

早内 稔(千四) 03 千葉県香取郡小見川町大根塚四一八三三
●コスモ創刊号/No.3を譲ってください。だいたい一冊1500円で、コピーでも結構です。

平塚卓史(千四) 板橋区成増二一九一六
●コスモ創刊号/No.2を1000円前後で譲ってください。また神秘現象研究同好会をつくりました。UFO、心霊などの資料も譲ってください。

山崎邦明(千四) 千葉県千葉市天台町一五二一九
●No.1/No.4のいずれかを適価でお譲りください。(破れ、落書き不可) UFO関係の資料、写真も。高橋 寛(千四) 福岡県田村郡三春町字新町三三六
●コスモNo.1/No.4を譲ってください。創刊号は、

1500円前後で、No.2/4は各7000円以下で、どれか1冊でもかまいません。(多少のヨロレ可)

高橋みよ子(千四) 東京都立川市富士見町二二八
●神々の戦車(1)〜(完)までの記事、どなたかコピーして譲ってください。実費、手数料当方負担。おハガキで。

高橋政美(千四) 奈良市佐紀新町三五一一
●創刊号/No.4までを、どなたか4000円前後で譲ってください。

平松賢治(千四) 静岡県浜北市新原三八四七
●どなたかコスモ創刊号を無代で譲ってください。

小野高嗣(千四) 12 北海道十勝郡下川町緑町
●コスモNo.2、No.4の2冊1500円前後で、創刊号を3500円前後でお譲りください。

添島洋治(千四) 東京都昭島市郷地町四九二一九 電0425-434487
●コスモNo.2を適価で譲ってください。

片山明宏(千四) 01 埼玉県児玉郡美里村古郡五一四一
●コスモNo.2/No.4までを適価でお譲りください。連絡をくださるときは希望の値段を書き添えて。小林信行(千四) 04 埼玉県入間郡毛呂山町長瀬三五四
●コスモファンの方で、UFO写真のネガを持っている人は、私に貸してください。責任をもってお返しいたします。

長町常正(千四) 01 徳島県徳島市川内町津二九二
●創刊号を4000円前後、No.2を3000円前後でお譲りください。ただしなるべく美本で。ものによってはさらに考慮します。

高橋謙一郎(千四) 東京都荒川区東日暮里五三九一
●コスモ創刊号/No.2 (切り抜き可) を適価で求めます。

佐藤茂一(千四) 01 釧路市緑ヶ岡一一二一九
●コスモNo.1/No.3を2000円で譲ってください。1なら1200円以内。切り抜き可。

小橋清美(千四) 新潟県新発田市大手町二六一九
●コスモ創刊号/No.3を手入したいので、どなたか適価でお譲りください。

白石安徳(千四) 08 岩手県東磐井郡千厩町千厩字北方九九
●創刊号を1000円、No.2/No.4を各800円でお譲りください。1冊でも可、美本希望(落書き、切り抜き不可) (送料当方負担)

清水和久(千四) 03 栃木県安藤郡田沼町大字栃本下町二七六六 電0283-211577

わが国最初のUFO写真集!

コスモ別冊 絶賛発売中!

UFO写真集①

—UFOファン必携—

¥1300 送料 ¥300

●2冊以上は¥300×冊数

- A4判、94頁、極上厚手アート紙使用、美麗表紙カバー付き豪華本／貴重な資料として長期保存性を考慮、入念に制作。
- カラー写真約20点、白黒写真約30点／本誌よりひとまわり大きい判の左右2頁にわたる大画面からわき起こる圧倒的迫真感!
- 書店発売は10月中旬／書店で入手できない場合は本社宛直接ご注文下さい。3万部限定版。
- 第2巻以降も発行を企画中。

★本誌バックナンバー(既刊号)

品切れ後は再版しません。未入手の方は早目にご注文を!

- ★第5号(1974年3月発売)
- ★第6号(" 5月発売)
- 第7号(" 7月発売)
- 第8号(" 9月発売)
- 第9号(" 11月発売)

定価 各¥330

送料 1冊 ¥85
2冊 ¥145
3冊 ¥250

★印は残部僅少

■創刊号より

第4号までは
売切れ、絶版。
在庫なし。.

—本誌特製—

本誌とじ込み用

バインダー

¥400 送料 1〜2個 ¥300
3〜4個 ¥600

- 1カ年6冊分のコスモ誌一括保存用の必要品。
- 極厚手表紙、布装、表面背共金文字箔押。
- コスモ読者は書棚に誇らしく飾ろう!
- この品は書店にないので必ず本社宛直接ご注文下さい。

***ご注文は振替・現金書留・小為替・低額切手等により必ず前金で(収入印紙は不可)

代金あと払いはおことわり。

〒110 東京都台東区秋葉原3-3、アキバビル

コスモ出版社

振替 東京 119478

●目撃報告とは別に、読者の「声」欄を設けています。本誌に対する感想、UFO問題に関する所感等をふるってご投稿下さい。宛先は「コスモ出版社、声係」

●目撃報告と写真を募集
UFO(未確認飛行物体)の目撃報告と写真を募集します。左に掲げた各項目を参考にして、なるべく正確な詳細な報告をお送り下さい。掲載された分には薄謝を呈します。写真の場合はできればネガもいっしょにお送り下さい。ただし本誌に掲載後に偽作であることが判明してトラブルが生じた場合、本誌は一切の責任を負いませんので、その点をあらかじめご了承下さい。その他、各種新聞雑誌などに掲載されたUFO関係の記事・写真類の切抜きも歓迎します。

●UFO目撃報告用参考事項
(1)目撃者住所氏名(できれば本人の写真添える)、年齢、職業(学生の方は学校名・学年)、電話番号(匿名を希望の場合は本名明記の上、その旨を付記すること) 同時目撃者の有無、その他。
(2)目撃場所地名、付近略図、時刻、天候、目撃継続時間、その他。
(3)物体飛行物体の形(スケッチを添えること)、大きさ、色、その他。
(4)飛行状態(仰角、方向、飛行中の形態の変化、飛行中の色の変化、飛行中の光度の変化、推定速度及び高度、その他)。
(5)観測機器使用の場合はその機器名性能その他を付記する。
(6)撮影用具(カメラを使用の場合はカメラ名、使用フィルム、レンズ名、絞り、シャッタースピードその他のデータ)を付記する。

送り先 東京都台東区秋葉原三の三、アキバビル
コスモ出版社UFO資料調査部

●本誌掲載記事写真の無断転載を禁じます。
●海外の記事はすべて翻訳転載権取得済。

●別冊「UFO写真集」や本誌口絵写真の被写体がボケていてつまらないという声を時折耳にしますが、UFOはフォース・フィールドを持っていると考えられるために、少数の例を除いて不鮮明に写るのが普通です。ボケた写真でもジッと凝視して何かを感じしうとするテレパシクな洞察力を養うことが大切ではないでしょうか。(K)

●本誌から題号をコスモより「UFOと宇宙」に改題し、内容も一段と充実。わが国唯一、世界一流のUFO専門誌にふさわしい変貌をとげました。今後は一日も早く月刊誌になるよう努力します。

●頁数も四頁ふやして総頁を八八頁にしましたが、昨今の物価高騰には抗しきれず、定価もやむを得ず三〇〇円アップ。全国のUFOファン読者には全く申し訳ないことですが、あしからずご了承下さい。

●本誌から題号をコスモより「UFOと宇宙」に改題し、内容も一段と充実。わが国唯一、世界一流のUFO専門誌にふさわしい変貌をとげました。今後は一日も早く月刊誌になるよう努力します。

Across the Editor's Desk

●本誌から題号をコスモより「UFOと宇宙」に改題し、内容も一段と充実。わが国唯一、世界一流のUFO専門誌にふさわしい変貌をとげました。今後は一日も早く月刊誌になるよう努力します。

UFOと宇宙 一九七五年二月号

編集発行人 久保田八郎
発行 株式会社 コスモ出版社
〒110 東京都台東区秋葉原三の三 アキバビル

電話(255)8784(代表)

振替 東京 119478

印刷 昭和五〇年二月一日発行

(隔月刊・奇数月二十日発売)

定価三六〇円・送料一五〇円

年々め購読料・送料共二七〇〇円

(地方の書店で入手できない場合は本社へ直接ご注文下さい)

スリーピーチUFOシリーズ

No.MTZ40S

アクロマートレンズ

口径 40mm
倍率 ズーム変倍
15×～40×



¥9,000
送料 ¥600
(¥7,200)

No.ST60A-UFO アクロマートレンズ

D60mm F800mm
倍率 100×
44×
上下微動装置



¥27,000
送料 ¥1,000
(¥189,000)

〔天体地上兼用〕

性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.ST63A-UFO アクロマートレンズ

D60mm F1,000mm
倍率 125× 55×
上下微動装置



¥29,000
送料 ¥1,000
(¥20,900)

〔天体地上兼用〕

性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.ST62A-UFO アクロマートレンズ

D60mm F900mm
倍率 112× 45×
上下微動装置
水平微動装置



¥34,000
送料 ¥1,000
(¥23,000)

〔天体地上兼用〕

性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.ST67A-UFO アクロマートレンズ

D60mm F1,000mm
倍率 125× 50×
上下微動装置
水平微動装置



¥39,000
送料 ¥1,200
(¥29,000)

〔天体地上兼用〕

性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.ST420-UFO アクロマートレンズ

短焦点屈折赤道儀 D60mm F420mm
倍率 70× 21×
経緯微動装置
経緯目盛環



¥53,000
送料 ¥1,500
(¥41,300)

〔天体地上兼用〕

性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.ST800-UFO アクロマートレンズ
屈折赤道儀

D60mm F800mm
倍率 160× 100×
44×
経緯微動装置
経緯目盛環



¥52,000
送料 ¥1,500
(¥40,300)

〔天体地上兼用〕

性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.SST600 アクロマートレンズ
屈折赤道儀

D60mm F910mm
倍率 150× 73×
45×
経緯微動装置
経緯目盛環



¥55,000
送料 ¥2,000
(¥42,000)

〔天体地上兼用〕

性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.SST76 アクロマートレンズ
屈折赤道儀

D76mm F910mm
倍率 151× 73×
36×
経緯微動装置
経緯目盛環



¥73,000
送料 ¥2,000
(¥55,000)

〔天体地上兼用〕

性能 1.5秒・11.2等星・118倍

No.SST80 アクロマートレンズ
屈折赤道儀

D76mm F1,250mm
倍率 208×100× 50×
経緯微動装置
経緯目盛環



¥78,000
送料 ¥2,000
(¥60,000)

〔天体地上兼用〕

性能 1.5秒・11.2等星・118倍

プリズム双眼鏡(アクロマートレンズ・ケース付)

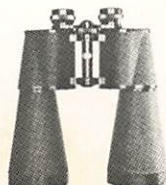


← No.SB1030 倍率10× D30mm
¥12,000 送料 ¥500 (¥8,500)

← No.SB1040 倍率10× D40mm
¥13,000 送料 ¥500 (¥9,500)



← No.SB1050
倍率 10× D50mm
¥14,000 送料 ¥600
(¥11,000)



← No.SB2050
倍率20× D50mm
¥15,000 送料 ¥600
(¥12,000)

← No.KB3070
特大型高さ26cm
倍率30× D70mm
¥38,000 送料 ¥1,000
(¥30,000)

()内は学生特価
くわしくは 切手180円
同封の上、総合

カタログNo.11

お申込み下さい

屈折式望遠鏡
反射式望遠鏡
望遠鏡部品
双眼鏡
顕微鏡

〒121 東京都足立区
東島根町2392

K. K. スリーピーチ

サービスセンター
KM 係



ヤマモト

サテライト天体望遠鏡

新発売

60mm 屈折径緯台

MODEL A-7

定 価 32,000円

荷造送料 1,500円



●光学的性能

有効径 60mm
焦点距離 700mm
集光力 73倍
分離能 2.0秒
極限等級 10.7等

●付属品

接眼鏡 (倍率)
SR-5mm 140倍 (280倍)
R-20mm 35倍 (70倍)
〔 () 内はバーローレンズ使用〕
2倍バーローレンズ
5倍ファインダー
天頂プリズム
地上用正立プリズム
サングラス

●格納箱

発泡スチロール入り木箱

ヤマモトの天体望遠鏡は海外で絶賛を博しております。

メーカーからユーザーへ！

通信販売のお知らせ！

●上記の他各種あります。詳しくは115円切手同封の上カタログをC係へ御請求下さい。

株式
会社

山本製作所

東京都板橋区大原町 5 - 3
電話 966-2408 郵便番号 174